

石丸遺跡Ⅰ

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2022

大 府 市
株式会社アコード

石丸遺跡Ⅰ

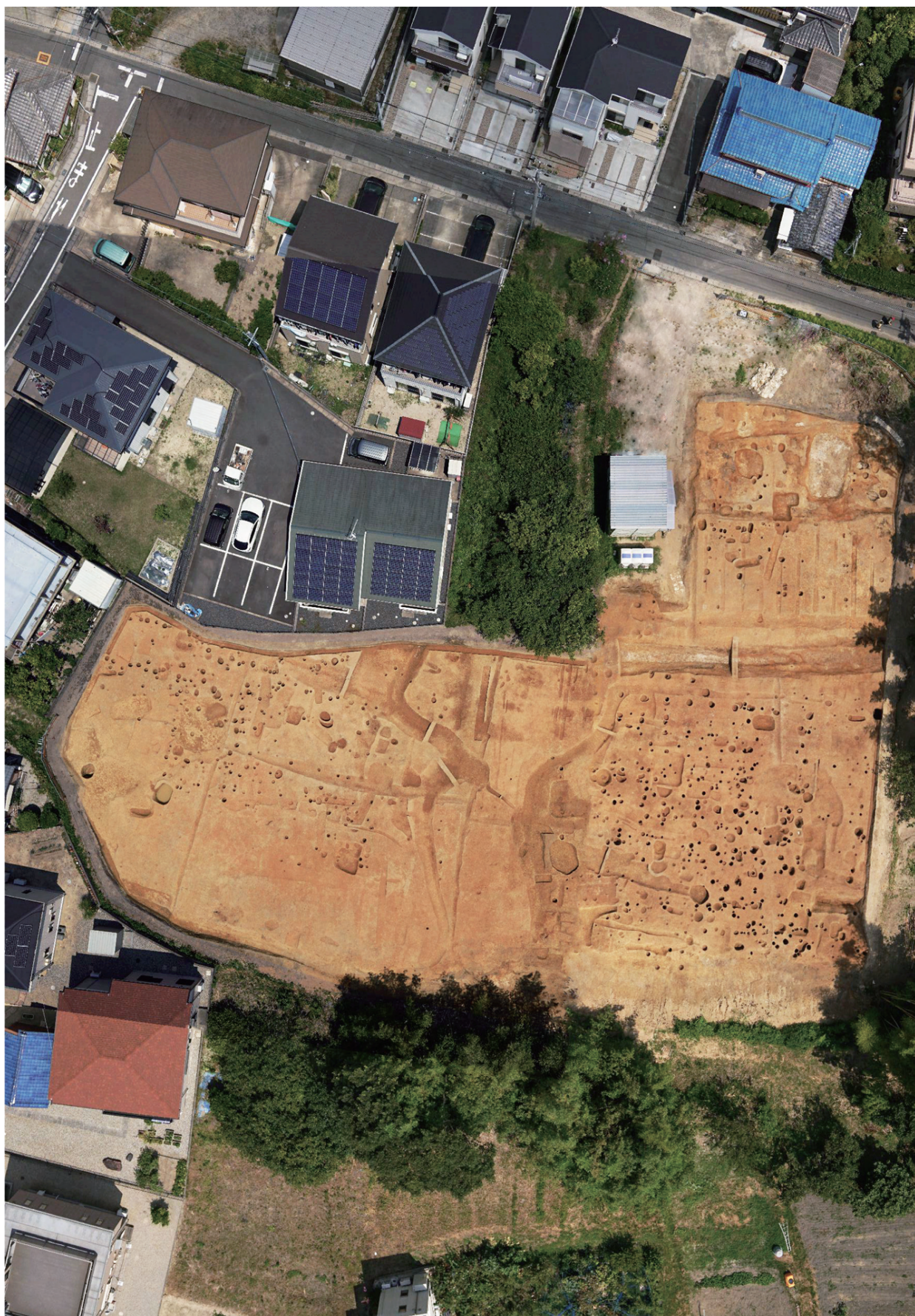
—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2022

大 府 市
株式会社アコード



石丸遺跡：白破線 境川の西が大府市域（旧尾張国）、東が刈谷市域（旧三河国）
国土地理院撮影：上方が北



調査区全景（写真上方が北：合成写真）



中国産の青磁碗（鎌倉時代）



土坑 SK092 から出土した土器・陶磁器類

例 言

1. 本書は、愛知県大府市北崎町城畑地内に所在する石丸遺跡（愛知県遺跡番号 440010）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、宅地造成工事に伴う発掘調査として、事業者であるアーレックス株式会社の委託を受けた株式会社アコード名古屋営業所が実施し、三者協定書に基づき大府市歴史民俗資料館が監督・指導を行った。調査面積は 2,200㎡ である。
3. 現地調査は、令和 3 年 4 月 12 日から 8 月 6 日、一次整理作業は 8 月 16 日から 10 月 1 日まで、その後の二次整理作業と報告書作成作業を令和 4 年 6 月 30 日までそれぞれ行った。
4. 調査体制は、以下の通りである。

監 督 員：田中城久（大府市歴史民俗資料館 / ～令和 4 年 3 月 31 日）

監 督 員：塚野真帆（ " / 令和 4 年 4 月 1 日～）

調 査 員：島軒 満（株式会社アコード）

測量技術員：北畠誠司（ " ）

 " : 尾崎裕司（ " ）

調査補助員：前野さゆり（ " ）

 " : 田邊 好（ " ）

発掘作業員：星野 朗 片岡 稔 成瀬秀夫 横山明男 板倉元一 野々山高司 庄屋新作 天野利信
 鈴木智恵 藤巻悦子 山崎久生 土橋六男 江川 守 榊原正二 山本清志

整理作業員：藤巻悦子 鈴木智恵 稲垣耕作 福井露子

5. 整理作業のうち、遺物実測の一部は株式会社シムネットに、土器胎土剥片分析は株式会社パレオ・ラボに、動物遺存体同定は一般社団法人文化財科学研究センターにそれぞれ委託した。
6. 本書の執筆は、第 2 章 第 1 節を田中城久、第 4 章 第 6 節の石器を上峯篤史（南山大学人文学部人類文化学科）、第 5 章 第 1 節を藤根 久、米田恭子（株式会社パレオ・ラボ）、第 5 章 第 2 節を金原裕美子（一般社団法人文化財科学研究センター）、付編を青木 修（公益財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター）が、その他を島軒が行った。本書の編集は、田中・塚野の指導のもと、島軒が行った。
7. 本書に掲載した遺構・遺物写真のうち、巻頭図版 3・4 の遺物集合写真は、内田真紀子氏（写房楠華堂）が撮影した。他の空中写真以外の遺構・遺物写真は島軒が撮影した。
8. 出土遺物の年代決定は、土師器を鈴木正貴氏（公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）、中世陶器・山茶碗を青木 修氏、河合君近氏（公益財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター）、石器を上峯篤史氏（南山大学人文学部人類文化学科）に御教示いただいた。また、現地調査、出土遺物の整理、報告書の刊行にあたって、下記の方々や諸団体、関係機関から多くの御協力、御指導、御教示を賜った。記して感謝を申し上げる。

鈴木正貴 武部真木 青木 修 河合君近 鈴木とよ江 三田敦司 浅岡 優 清水昭博 上峯篤史
宮澤浩司 早川由香里 楠美代子 鶴飼堅証 河野あすか 堀木真美子 平井義敏 佐藤亜聖

坂野俊哉 樋田泰之 三好美穂 菅原政徳 廣畑寧々 濱嶋裕行 太田輝夫 金原美奈子 高野夏姫
相木国男 相木 進 相木鐘三 相木俊光 濱島君代 濱島茂徳 濱島信好 谷藤幸子 川喜田妙子

小田原幸生 丹羽さつき 吉川裕幸 門田哲侍 西村匡広 中村 毅 白樫 淳 嘉納和之 後藤完二
アーレックス株式会社 大府市文化財保護審議委員 北尾自治会 南山大学 帝塚山大学・帝塚山大学
附属博物館 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 公益財団法人
瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 瀬戸市新世紀工芸館（順不同 敬称略）

9. 調査記録及び出土品は、全て大府市歴史民俗資料館で保管している。

凡 例

1. 本書に記載された測量成果は、世界測地系に基づいている。図中のX・Y座標は国土座標第Ⅶ系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。
2. 標高は、東京湾平均海面(T.P)に基づく。
3. 本書で使用した図面・写真のうち、巻頭図版1は、国土地理院撮影の空中写真画像データを使用・加筆したものである。第2図の大府市の遺跡分布は、国土地理院発行の電子地形図(1/25,000 地形図)と大府市教育委員会発行の「大府市遺跡等分布図」を使用・加筆したものである。第3図の石丸遺跡周辺の遺跡分布は、大府市発行の「大府市都市計画基本図」(1/5,000)と「大府市字図」(1/10,000)を使用・加筆したものである。第52図の知多郡北尾村絵図は、おおぶ文化交流の杜図書館・大府市郷土資料デジタルアーカイブの画像データを使用・加筆したものである。
4. 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖」(2020年版)に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定した。
5. 個別遺構平面図や断面図の縮尺は、1/60、1/100を基本とし、遺物出土状況図は1/20で掲載した。
6. 遺物実測図の縮尺は1/4を基本とし、金属製品・鍛冶関連遺物・石製品は1/3、石器・銭貨は1/1の縮尺で掲載した。
7. 遺構種別の略記号は、以下のとおりである。
SA：掘立柱柵列 SB：掘立柱建物 SD：溝・堀 SE：井戸 SK：竪穴状土坑・土坑
SP：柱穴・ピット SX：その他の遺構
8. 今回の調査で出土した遺物の型式や年代観は、基本的に以下の『愛知県史』に拠った。なお、註と参考文献は巻末に掲載した。

愛知県史編さん委員会編 2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
愛知県史編さん委員会編 2010『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』愛知県
愛知県史編さん委員会編 2012『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県
愛知県史編さん委員会編 2015『愛知県史 別編 窯業1 古代・猿投系』愛知県
愛知県史編さん委員会編 2017『愛知県史 資料編5 考古5 鎌倉～江戸』愛知県

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と経過	6
第1節 調査に至る経緯	6
第2節 調査の方法	7
第3節 調査の経過	8
第3章 遺 構	10
第1節 周辺の地形と基本土層	10
第2節 遺構の概要	13
第3節 掘立柱建物	13
第4節 掘立柱柵列	22
第5節 溝・堀	23
第6節 竪穴状土坑・土坑	37
第7節 井戸	51
第8節 柱穴・ピット	53
第9節 その他の遺構	54
第4章 遺 物	54
第1節 古代の土器・陶磁器	54
第2節 中世の土器・陶磁器	55
第3節 近世の土器・陶磁器	63
第4節 製塩土器	65
第5節 土製品・瓦	66
第6節 石器・石製品	66
第7節 金属製品・鍛冶関連遺物	68
第8節 木製品	69
第9節 自然遺物	69
第5章 自然科学分析	70
第1節 石丸遺跡出土土師器皿の胎土分析	70
第2節 井戸 SE003 における動物遺存体同定	81
第6章 遺構の変遷と総括	83
付編 土坑 SK092 出土遺物について	92
出土遺物一覧表	94

挿 図 目 次

- | | | | |
|--------|--|--------|--|
| 第 1 図 | 大府市の位置 | 第 28 図 | 土坑 SK043・050・052・057・058・061・063・069 平面図・断面図 |
| 第 2 図 | 大府市の遺跡分布 | 第 29 図 | 土坑 SK064・066・090・091・070・071・073・075・078・079・085・086 平面図・断面図 |
| 第 3 図 | 石丸遺跡周辺の遺跡分布 | 第 30 図 | 土坑 SK088・092・095・115・121・149・150 平面図・断面図 |
| 第 4 図 | 確認調査トレンチ配置図 | 第 31 図 | 土坑 SK140・152・154・155・156・159・166・168・177 平面図・断面図 |
| 第 5 図 | 調査区地区割図 | 第 32 図 | 土坑 SK076・083・094・153・162 平面図・断面図・遺物出土状況図 |
| 第 6 図 | 基本土層柱状図 | 第 33 図 | 井戸 SE001～003 平面図・断面図 |
| 第 7 図 | 調査区全体遺構平面図 | 第 34 図 | 出土遺物実測図① |
| 第 8 図 | 調査区西半部北壁土層断面図 | 第 35 図 | 出土遺物実測図② |
| 第 9 図 | 掘立柱建物 SB01・02 平面図・断面図 | 第 36 図 | 出土遺物実測図③ |
| 第 10 図 | 掘立柱建物 SB03・04 平面図・断面図 | 第 37 図 | 出土遺物実測図④ |
| 第 11 図 | 掘立柱建物 SB05 平面図・断面図 | 第 38 図 | 出土遺物実測図⑤ |
| 第 12 図 | 掘立柱建物 SB06・07 平面図・断面図 | 第 39 図 | 出土遺物実測図⑥ |
| 第 13 図 | 掘立柱建物 SB08 平面図・断面図 | 第 40 図 | 出土遺物実測図⑦ |
| 第 14 図 | 掘立柱建物 SB09 平面図・断面図 | 第 41 図 | 出土遺物実測図⑧ |
| 第 15 図 | 掘立柱建物 SB10 平面図・断面図 | 第 42 図 | 出土遺物実測図⑨ |
| 第 16 図 | 掘立柱柵列 SA01 平面図・断面図 | 第 43 図 | 出土遺物実測図⑩ |
| 第 17 図 | 掘立柱柵列 SA02・03 平面図・断面図 | 第 44 図 | 石丸遺跡と周辺の地質 |
| 第 18 図 | 溝 SD002・004・005・008・060 平面図・断面図 | 第 45 図 | 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真 (1) |
| 第 19 図 | 溝 SD011・012・020・022・024 平面図・断面図 | 第 46 図 | 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真 (2) |
| 第 20 図 | 溝 SD017・025・066・071 平面図・断面図 | 第 47 図 | 胎土の偏光顕微鏡写真 |
| 第 21 図 | 溝 SD079・080 平面図・断面図 | 第 48 図 | 動物遺存体 |
| 第 22 図 | 溝 SD084・085・090 平面図・断面図 | 第 49 図 | Ⅳ期：南北朝～室町時代前半 (14 世紀中葉～15 世紀前葉) の遺構分布 |
| 第 23 図 | 溝 SD101・119・121、堀 SD120 平面図・断面図 | 第 50 図 | Ⅴ期：室町時代後半～戦国時代 (15 世紀中葉～16 世紀代) の遺構分布 |
| 第 24 図 | 溝 SD110、堀 SD126 平面図・断面図 | 第 51 図 | Ⅵ期：江戸時代 (17 世紀～19 世紀代) の遺構分布 |
| 第 25 図 | 溝 SD127・130・131・138 平面図・断面図 | 第 52 図 | 知多郡北尾村絵図 天保十二年 (1841) |
| 第 26 図 | 土坑 SK001・006～008・010・011・013・015・017・018・041 平面図・断面図 | | |
| 第 27 図 | 土坑 SK025・027・028・034・035・036・037・042・045 平面図・断面図 | | |

挿 入 写 真 目 次

- | | | | |
|------|------------------|-------|---------------------------|
| 写真 1 | 「藤井宮大明神御酒瓶子」銘短頸壺 | 写真 7 | 遺構掘削作業状況 (東から) |
| 写真 2 | T2 確認調査状況 | 写真 8 | 現地説明会風景 (北から) |
| 写真 3 | T11 確認調査状況 | 写真 9 | 遺物整理作業 (南山大学人類文化学科考古学研究室) |
| 写真 4 | 樹木伐採作業状況 (北から) | 写真 10 | 遺物整理作業 (帝塚山大学附属博物館) |
| 写真 5 | 表土掘削作業状況 (西から) | 写真 11 | 現地調査参加者 |
| 写真 6 | 遺構掘削作業状況 (南西から) | | |

写真図版目次

写真図版 1	1 調査区西半部近景（南東から）	写真図版 12	1 屋敷地 A 溝 SD017・025・071・079（北から）
	2 調査区東半部近景（南から）		2 溝 SD025 D-D' 断面（北東から）
写真図版 2	1 調査区西半部全景（垂直写真）		3 溝 SD025 F-F' 断面（北から）
	2 調査区西半部全景（南東から）		4 溝 SD071（北西から）
写真図版 3	1 調査区東半部全景（南から）		5 溝 SD071 G-G' 断面（北西から）
	2 調査区東半部全景（垂直写真）	写真図版 13	1 屋敷地 B 溝 SD079、SK050 等（北から）
写真図版 4	1 調査区東半部中央～北（南西から）		2 溝 SD079（北から）
	2 調査区東半部中央～南（西から）		3 溝 SD079 A-A' 断面（南から）
写真図版 5	1 掘立柱建物 SB01・02（南西から）		4 溝 SD079 B-B' 断面（南西から）
	2 掘立柱建物 SB03・04（南西から）		5 溝 SD079 C-C' 断面（北から）
写真図版 6	1 SB01-SP0114 断面（北西から）	写真図版 14	1 屋敷地 B 堀 SD120、溝 SD101・119・121（西から）
	2 SB01-SP0287 断面（北東から）		2 堀 SD120、溝 SD121 B-B' 断面（西から）
	3 SB01-SP0044 断面（北西から）		3 堀 SD120、溝 SD121 A-A' 断面（東から）
	4 SB01-SP0142 断面（南東から）		4 溝 SD101 断面（東から）
	5 SB02-SP0097 根石（南西から）	写真図版 15	1 屋敷地 B 南東部 堀 SD126、溝 SD110、SK140 等（西から）
	6 SB02-SP0245 根石（南東から）		2 堀 SD126（北西から）
	7 SB02-SP0040 断面（北西から）		3 堀 SD126 断面（西から）
	8 SB03-SP0282 断面（南西から）		4 溝 SD110 断面（北西から）
写真図版 7	1 掘立柱建物 SB05（北から）		5 溝 SD127 断面（北西から）
	2 掘立柱建物 SB06・07（西から）	写真図版 16	1 屋敷地 B 全景 溝 SD127・130・131・138 等（西から）
写真図版 8	1 掘立柱建物 SB08（南から）		2 溝 SD138（西から）
	2 掘立柱建物 SB09・10（南から）		3 溝 SD138 断面（北西から）
写真図版 9	1 屋敷地 A 西半部 溝 SD005・060 等（南東から）		4 溝 SD129・130・131（北西から）
	2 溝 SD002・004 断面（南東から）		5 溝 SD131 断面（東から）
	3 溝 SD002・003・004（南東から）	写真図版 17	1 SK001・041（西から）
	4 溝 SD005 断面（南西から）		2 SK008（南西から）
	5 溝 SD060 断面（東から）		3 SK011（南から）
写真図版 10	1 屋敷地 A 中央部～西半部 溝 SD011・012 等（南東から）		4 SK017（南西から）
	2 溝 SD011・012（東から）		5 SK018 断面（南西から）
	3 溝 SD012 断面（北西から）		6 SK034・035・036（南西から）
	4 溝 SD024（北西から）		7 SK028 断面・遺物出土状況（西から）
	5 溝 SD024 遺物出土状況（北東から）		8 SK042 断面（南西から）
写真図版 11	1 屋敷地 A 溝 SD017・025・066・071（南東から）	写真図版 18	1 SK037・045・028（南から）
	2 溝 SD017 C-C' 断面（南西から）		2 SK037 遺物出土状況（南から）
	3 溝 SD017 B-B' 断面（南東から）		3 SK037 遺物出土状況（北西から）
	4 溝 SD066 A-A' 断面（南西から）		
	5 溝 SD017 遺物出土状況（北東から）		

	4 SK043・061 (南東から)		7 SK154・161・162 (北から)
	5 SK050 (西から)		8 SK156 断面 (西から)
	6 SK052・053 (西から)	写真図版 24	1 SK159 断面 (北から)
	7 SK057 (南西から)		2 SK162 断面・遺物出土状況 (南から)
写真図版 19	1 屋敷地 C 中央部 SK063・064・ 066・076・090・091 等 (南から)		3 SK166 断面 (西から)
	2 SK063、SD084 (南から)		4 SK168 断面 (南から)
	3 SK064 断面 (北東から)		5 SP0687 遺物出土状況 (南東から)
	4 SK076 断面、遺物出土状況(東から)		6 SP0949 遺物出土状況 (西から)
	5 SK064 (東から)		7 SP0825 遺物出土状況 (西から)
写真図版 20	1 屋敷地 C 北東部 SK078・079・ 081・083・085 等 (北から)		8 SP0674 遺物出土状況 (北から)
	2 SK083 断面 (北東から)	写真図版 25	1 井戸 SE001 断面 (南東から)
	3 SK083 (北東から)		2 井戸 SE001 (南東から)
	4 SK083 遺物出土状況 (西から)		3 井戸 SE001 断割り状況(南東から)
	5 SK083 貼粘土断面 (北東から)		4 井戸 SE002 (南から)
写真図版 21	1 SK069 (南から)		5 井戸 SE003 (西から)
	2 SK070 (北から)		6 井戸 SE003 断割り断面(西から)
	3 SK071 (西から)	写真図版 26	1 切通し SX013 (北西から)
	4 SK075 (北から)		2 調査区西半部北西壁土層断面 (南から)
	5 SK078 断面 (南西から)		3 調査区東半部東壁土層断面 (南西から)
	6 SK086 (東から)	写真図版 27	灰釉陶器・緑釉陶器・土師器①
	7 SK087 (南から)	写真図版 28	土師器②
	8 SK088 (南から)	写真図版 29	中世無釉陶器 (山茶碗等) ①
写真図版 22	1 SK092 (南東から)	写真図版 30	中世無釉陶器 (山茶碗等) ②
	2 SK092 断面、遺物出土状況(東から)	写真図版 31	瀬戸窯産陶器①
	3 SK094 (東から)	写真図版 32	瀬戸窯産陶器②
	4 SK095 (南から)	写真図版 33	瀬戸窯産陶器③
	5 SK104 断面 (南から)	写真図版 34	青磁・瓦質土器・常滑窯産陶器①
	6 SK115・128・180 (西から)	写真図版 35	常滑窯産陶器②
	7 SK121 断面 (北から)	写真図版 36	製塩土器・土製品・瓦
	8 SK114・117 (北から)	写真図版 37	石器・石製品・金属製品・炉壁等
写真図版 23	1 SK140 断面 (南から)	写真図版 38	木製品
	2 SK149 銭貨出土状況 (南東から)	写真図版 39	貝類
	3 SK150 断面 (北東から)		
	4 SK152・154・168・177 (北から)		
	5 SK153 遺物出土状況 (北東から)		
	6 SK153 遺物出土状況 (南から)		

表 目 次

表 1	大府市内の遺跡一覧	表 5	岩石片の起源と組合せ
表 2	分析試料とその詳細	表 6	井戸 SE003 における動物遺存体同定結果
表 3	試料の粘土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載	表 7	横根に関する事項年表
表 4	胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表	表 8	出土遺物一覧表

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

石丸遺跡は、大府市北崎町城畑から横根町石丸にかけて所在し、市域東縁を北東から南西に向けて流れる境川の右岸、標高10～13mの台地縁辺部に立地する。

遺跡の立地する大府市は、知多半島の基部に位置し、北は名古屋市、西は東海市、北東は豊明市、東は刈谷市、南は知多郡東浦町に隣接する。面積は33.66km²である。市域は主に丘陵からなり、北部の尾張丘陵と南部の大府丘陵に分かれる。丘陵を分ける谷地形の低地部には、水主ヶ池（名古屋市緑区）を分水嶺として、天白川水系の大高川、境川水系の鞍流瀬川が流れる。

市域東部は、標高10～20mの河岸段丘と境川・逢妻川の支流が造り上げた低地が見られる。境川はその名が示すとおり、尾張国と三河国の国境を示す歴史的に重要な河川であり、みよし市、日進市、豊田市3市境の三峯峠付近を源とし、豊明市、本市を南流して、刈谷市、東浦町付近で逢妻川と並流しつつ知多湾最奥部の衣ヶ浦湾に流れる。

知多半島の丘陵部は、主に砂・シルト・粘土および砂礫層からなる第三紀鮮新世の常滑層群により構成され、このような地質的条件は本遺跡近くにも分布する山茶碗窯をはじめとした窯業生産の成立基盤となっている。

第2節 歴史的環境

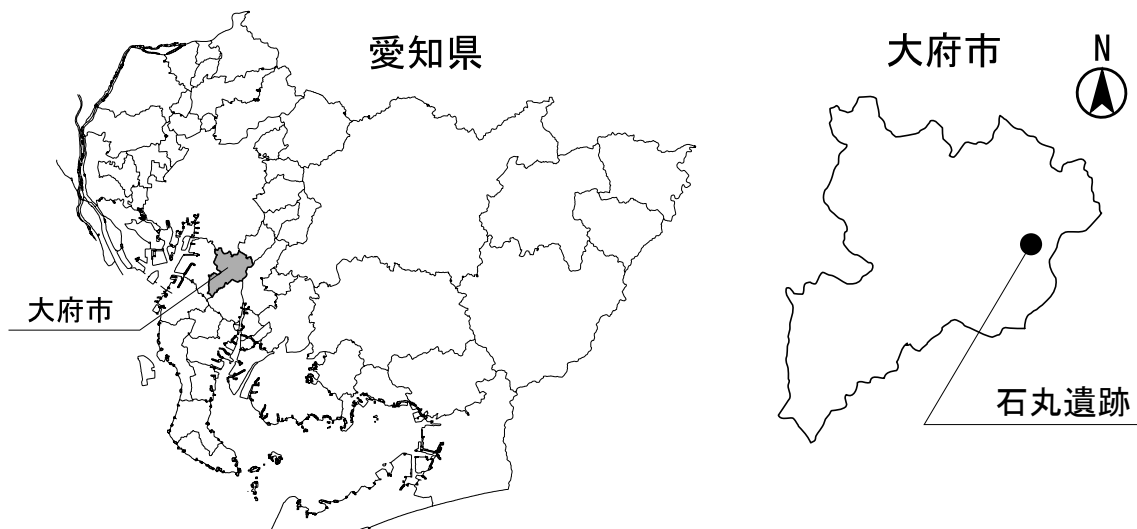
市域では、現在までに180箇所の遺跡を確認しているが、そのうちの約9割が丘陵上に展開する窯跡である。ここでは、石丸遺跡周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、後期旧石器時代のナイフ形石器や角錐状石器などが採集された共栄町の共栄遺跡がある。

縄文時代 縄文時代の遺跡は、朝日町の棧敷貝塚、共栄町の共栄遺跡がある。棧敷貝塚では近年の調査で、縄文時代晩期の条痕文土器や黒曜石の剥片などが出土している。共栄遺跡では縄文時代の石鏃が採集されている。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、共和町の子安神社遺跡、朝日町の棧敷貝塚、横根町の惣作遺跡などがある。子安神社遺跡は弥生時代後期から終末期にかけての溝が検出され、環壕の可能性が指摘されている。棧敷貝塚では欠山式期の竪穴住居が検出されている。惣作遺跡では弥生時代中期前葉の土器が出土しているほか、古代の須恵器、土師器、灰釉陶器、製塩土器が多量に出土しており、知多湾北部の旧衣ヶ浦湾西岸域では最奥部に位置した製塩遺跡として知られている。

古墳時代 古墳時代の遺跡は、土師器が採集された森岡町の源吾遺跡や中央町の高山古墳がある。高山古墳は横穴式石室を埋葬施設に持つ円墳と推定されている。



第1図 大府市の位置

古代～中世 愛知県は古代以降、窯業地帯としての性格を帯び始める。特に尾張東部から三河西部に展開する古窯址群である「猿投窯」と、知多半島に展開する「常滑窯」は、日本有数の窯業地帯として知られており、大府市はこれら2つの古窯址群が重複する地域でもある。

現在確認されている市内最古の窯跡は、平安時代中期初頭の灰釉陶器を生産した高根山C古窯群で、市域北東部の北崎町に所在する。市域南西部の宮内町には、平安時代中期の灰釉陶器を焼成した野々宮古窯がある。

12世紀から13世紀にかけての中世の窯跡には、山茶碗類と瓦類を併焼した吉田町の吉田第1・2号窯があり、生産された瓦は京都・鳥羽離宮東殿へ供給されたことが判明している⁽¹⁾。その他、発掘調査が行われた窯跡は、大府丘陵では、ハンヤ古窯、神明古窯群、海陸庵古窯群、深廻間A古窯群、深廻間B古窯群、深廻間C古窯群、砂原古窯、瀬戸B古窯群、奥谷古窯、瀬戸C古窯群、久分古窯群、別岨古窯群、森岡第1号窯、鴨池東古窯群、川池西古窯、石亀戸古窯群、上入道古窯がある。一方、尾張丘陵では、ガンジ山A古窯群、羽根山古窯群、立合池西A・B古窯群がある。上記の古窯群では、いずれも山茶碗・小碗・小皿を主要器種とするが、海陸庵古窯群・深廻間A古窯群・深廻間B古窯群・深廻間C古窯群では片口鉢I類が、神明古窯群・森岡第1号窯・瀬戸B古窯群・羽根山古窯群では片口鉢I類の他に壺類が出土している。また、瀬戸B古窯群からは陶硯が出土している。深廻間A古窯群・深廻間B古窯群・ガンジ山A古窯群では片口山茶碗の出土が確認されている。石丸遺跡に近接した山茶碗窯には、横根町の平子B古窯・平子古窯、北崎町の山之神社北古窯がある。

市域での窯業は、平安時代末期から鎌倉時代の約200年間にその生産活動が集中する傾向が見られ、13世紀後葉以降になると山茶碗窯は廃絶し、丘陵部一帯は遺跡の希薄な場所となる。したがって、窯跡以外の中世の遺跡は少ない。

朝日町の棧敷貝塚では、近年の調査で、戦国期の溝状遺構や山茶碗、古瀬戸の天目茶碗等が出土している⁽²⁾。北崎町城畑・横根町石丸に所在する

石丸遺跡では、確認調査で鎌倉時代から室町時代を中心とした遺構・遺物が発見されているほか、石丸遺跡の北に位置する賢聖院貝塚では、ハイガイ、シジミなどの貝層とともに、戦国時代の土師器内耳鍋や天目茶碗などが採集されている⁽³⁾。また、石丸遺跡の南に位置する普門寺境内では、石丸遺跡と同時期中世の遺物が散布しており、普門寺遺跡として登録されている。普門寺の創建は、寺伝によれば白鳳元年(672)とされ、大府市指定文化財である平安時代初期の木造十一面観音菩薩立像を本尊としている。

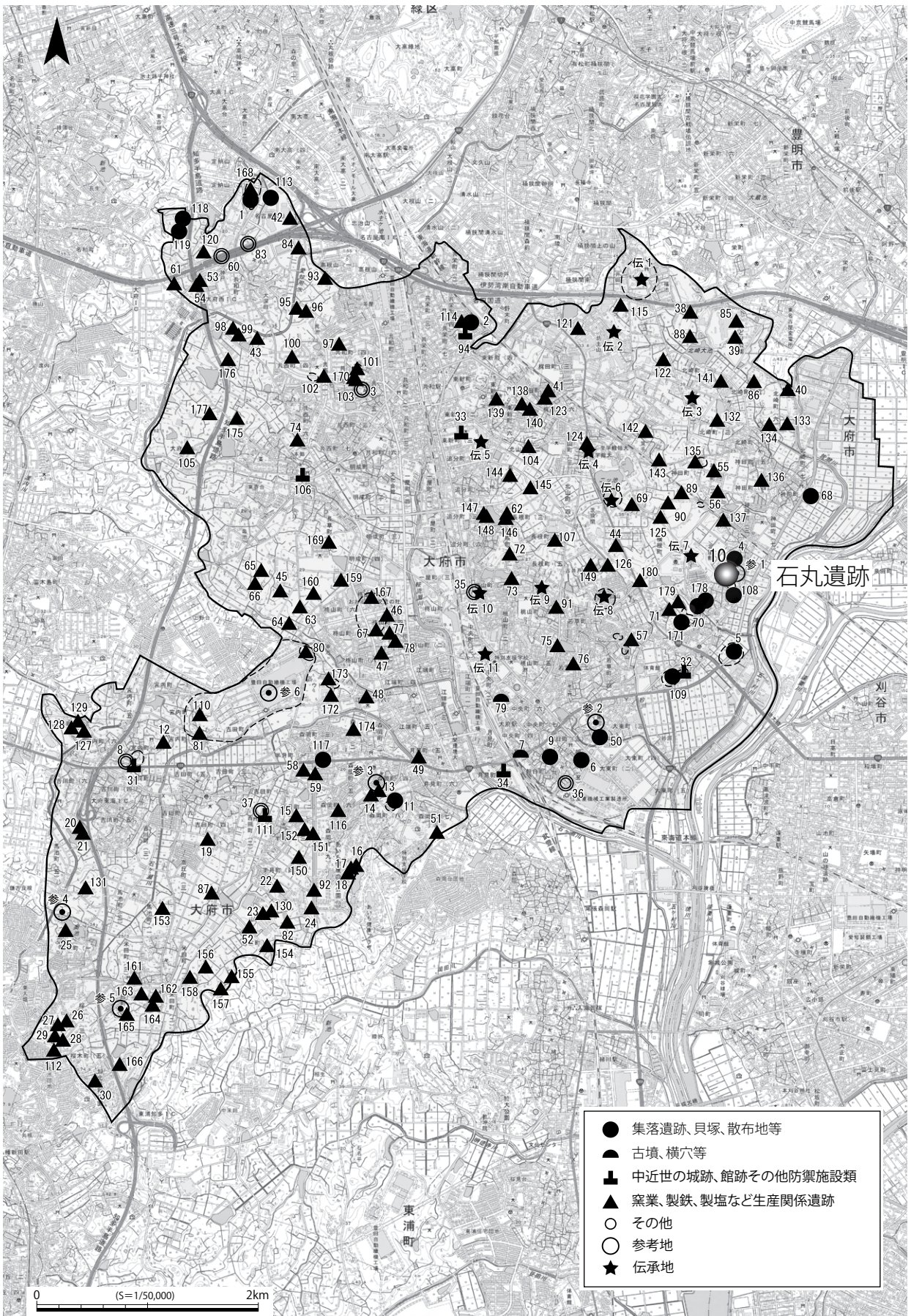
特筆すべきは、横根町中村から「藤井宮大明神御酒瓶子」とヘラ書きされた13世紀初頭の短頸壺(写真1)が出土していることで、愛知県指定文化財になっている。藤井宮大明神は、現在の横根町惣作に鎮座する藤井神社で、「社伝」によれば、建久二年(1191)の源頼朝による勧請と伝えられる。

室町時代末期の戦乱期の遺跡には、市域東部に横根城跡、南西部に吉川城跡、中央部には追分城跡が認められ、周辺でも多くの砦や城館が確認できる。名古屋市に近接した市域北部では、大高城跡、鷲津砦跡、丸根砦跡など、永禄3年(1560)の桶狭間合戦で知られる城砦が隣接する。

近世 近世の遺跡は、共和町の円通寺古墓と円通寺経塚がある。前者は円通寺に関連した近世墓地であり、後者は享保5年(1720)銘の経碑に近い場所から『大般若経』の經典に見立てた墨書の礫石が多数出土している。また、同じく共和町に所在する東光寺でも東光寺経塚が確認されており、墨書の礫石が約4万点出土している。



写真1 「藤井宮大明神御酒瓶子」銘短頸壺



第2図 大府市の遺跡分布

表1 大府市内の遺跡一覧

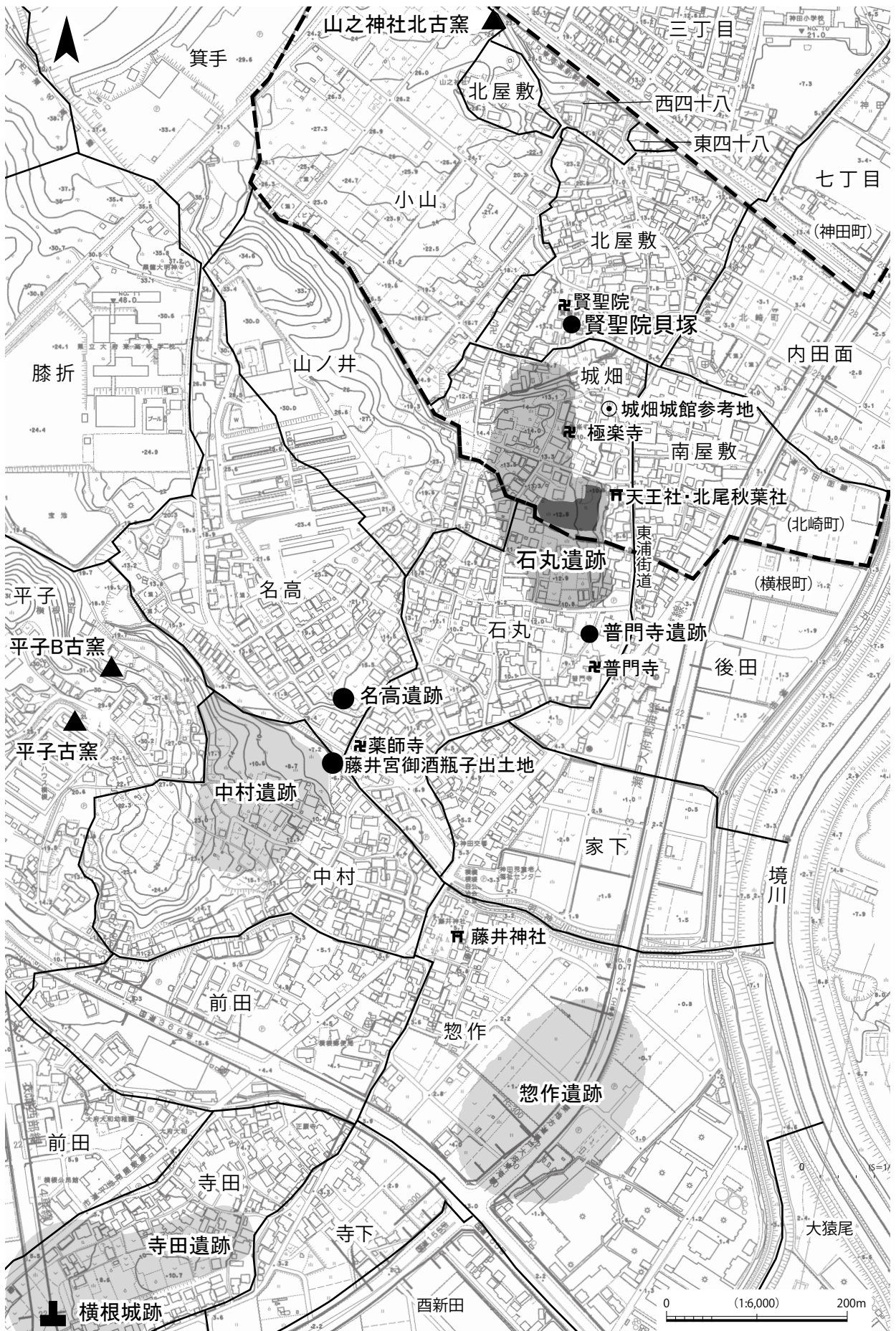
遺跡番号	遺跡番号	時代
1	子安神社遺跡	弥生～中世
2	共栄遺跡	旧石器・縄文
3	東光寺経塚	江戸
3	賢聖院貝塚	中世
4	惣作遺跡	弥生～鎌倉
5	棧敷貝塚	縄文晩期
6	高山古墳	古墳後期
7	正官墳	中世
8	南島貝塚	不明
10	石丸遺跡	中世
11	源吾遺跡	古墳
12	野々宮古窯	平安中期
13	森岡第1号窯群	12世紀中
14	森岡第2号窯	13世紀
15	北向古窯	13世紀
16	旧中部病院第1号窯	12世紀
17	旧中部病院第2号窯	不明
18	旧中部病院第3号窯	不明
19	ハンヤ古窯	13世紀
20	吉田第1号窯	12世紀
21	吉田第2号窯	12世紀
22	律粉古窯	13世紀
23	籠染第1号窯	13世紀
24	籠染第2号窯	不明
25	大日古窯	不明
26	外輪第1号窯	不明
27	外輪第2号窯	不明
28	外輪第3号窯	不明
29	外輪第4号窯	不明
30	骨田末古窯	12世紀
31	吉川城跡	中世
32	横根城跡	中世
33	追分城跡	中世
34	石ヶ瀬古戦場跡	中世
35	大清水井戸跡	中世
36	おしも井戸跡	不明
37	芦沢井戸跡	中世
38	福池古窯	中世
39	大根古窯	中世
40	高根山古窯群	古代～中世
41	梶田古窯	中世
42	別岨古窯群	中世
43	権兵衛池古窯	中世
44	名高山古窯群	中世
45	立根A古窯群	中世
46	深廻間A古窯群	中世
47	柵山A古窯群	中世
48	石ヶ瀬古窯	中世
49	江端古窯	中世
50	延命寺貝塚	不明
51	割木A古窯群	中世
52	東端古窯	中世
53	才田A古窯	中世
54	才田B古窯	中世
55	山手A古窯	不明
56	山手B古窯	不明
57	羽根山古窯群	中世
58	神明古窯群	平安末期
59	海陸庵古窯群	鎌倉中期
60	円通寺古墓	近世
61	上入道古窯	中世
62	長根山A古窯群	中世
63	立根B古窯群	中世
64	立根C古窯群	中世
65	立根D古窯群	中世
66	立根E古窯	中世
67	深廻間B古窯群	中世
68	西浜田遺跡	不明
69	二ッ池東古窯	中世
70	藤井宮御酒瓶子出土地	中世

遺跡番号	遺跡番号	時代
71	平子古窯	中世
72	鴨池北古窯群	中世
73	鴨池東古窯群	中世
74	下北山古窯群	中世
75	川池西古窯	中世
76	石亀土古窯	不明
77	柵山B古窯	不明
78	柵山C古窯	中世
79	雨兼池西古墳	古墳
80	山口古窯群	不明
81	大高山古窯	不明
82	籠染第3号窯	中世
83	円通寺経塚	江戸中期
84	大廻間古窯	中世
85	みどり公園古窯	中世
86	高根山西古窯	中世
87	口無池西古窯	中世
88	北崎大池北古窯	平安
89	箕手A古窯	中世
90	箕手B古窯	中世
91	ガンジ山A古窯群	13世紀
92	律粉東古窯	中世
93	上徳古窯群	中世
94	丸根城跡	不明
95	大深田古窯	12世紀
96	荒池古窯群	中世
97	砂原古窯	中世
98	木根A古窯群	中世
99	木根B古窯群	中世
100	久分古窯群	中世
101	瀬戸B古窯群	中世
102	奥谷古窯	中世
103	瀬戸A古窯	中世
104	北山古窯	中世
105	石原古窯群	中世
106	長草城跡	不明
107	長根山B古窯	中世
108	普門寺遺跡	中世
109	寺田遺跡	中世
110	大高山西古窯群	中世
111	景清屋敷跡	不明
112	外輪南古窯	中世
113	炭焼遺跡	弥生～中世
114	上り戸古窯	中世
115	井田古窯群	中世
116	池之分古窯	不明
117	山中遺跡	古代～中世
118	兒子廻間A遺跡	古代～中世
119	兒子廻間B遺跡	古代～中世
120	下入道古窯	中世
121	坊主山A古窯群	中世
122	井田B古窯	中世
123	梶田B古窯群	中世
124	石亀戸古窯群	中世
125	箕手C古窯群	中世
126	古井戸A古窯	中世
127	長峰北A古窯	中世
128	長峰北B古窯	中世
129	長峰北C古窯群	中世
130	籠染西古窯	古代
131	井戸場古窯群	中世
132	西定保根A古窯群	中世
133	高根山B古窯群	古代～中世
134	高根山C古窯群	古代
135	山手C古窯群	中世
136	上り坂古窯	中世
137	山之神社北古窯	中世
138	八代山A古窯	中世
139	八代山B古窯	中世
140	八代山C古窯	中世

遺跡番号	遺跡番号	時代
141	西定保根B古窯群	古代～中世
142	箕手D古窯	中世
143	箕手E古窯群	中世
144	上東山A古窯	中世
145	上東山B古窯	中世
146	立合池東古窯群	中世
147	立合池西A古窯群	中世
148	立合池西B古窯群	中世
149	古井戸B古窯	中世
150	脇ノ畑A古窯	中世
151	脇ノ畑B古窯	中世
152	脇ノ畑C古窯	中世
153	馬池東古窯	中世
154	東端B古窯	中世
155	毛分田A古窯	中世
156	毛分田B古窯	中世
157	家下古窯	中世
158	上家下古窯	中世
159	車池A古窯	中世
160	車池B古窯	中世
161	森東古窯	中世
162	前田A古窯	中世
163	前田B古窯	中世
164	前田C古窯	中世
165	森前古窯	中世
166	骨田池南古窯	中世
167	深廻間C古窯群	中世
168	子安古窯	古代～中世
169	上田ノ松古窯	中世
170	瀬戸C古窯群	中世
171	中村遺跡	古代～中世
172	ウドA古窯	古代
173	ウドB古窯	古代
174	森岡平子古窯	中世
175	笹山古窯	中世
176	木根C古窯	中世
177	西忍場古窯	中世
178	名高遺跡	古代～中世
179	平子B古窯	中世
180	牛池東古窯	中世

参考地・伝承地一覧

番号	名称
参1	城畑城館参考地
参2	延命寺城館類似遺構
参3	猪伏村城館参考地
参4	尾張藩吉田屯所
参5	米田古城参考地
参6	大府飛行場跡
伝1	井田地区古窯跡群伝承地
伝2	鉄工団地内古窯跡群伝承地
伝3	西定保根地区古窯跡群伝承地
伝4	至学館大学内古窯跡群伝承地
伝5	阿部屋敷
伝6	二ッ池地区古窯跡群伝承地
伝7	沢井丹後屋敷
伝8	いきいきタウン内古窯跡群伝承地
伝9	ガンジ山地区古窯跡群伝承地
伝10	大清水館伝承地
伝11	七津大夫屋敷伝承地



第3図 石丸遺跡周辺の遺跡分布

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、アーレックス株式会社（以下、事業者）が大府市北崎町城畑地内で計画する宅地造成工事に伴う案件であり、当該地に所在する石丸遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）が対象となった。

石丸遺跡（愛知県遺跡番号 440010）は、昭和32年に発見され、平成9年の大府市教育委員会（以下、大府市）による現地踏査では、横根町石丸から北崎町城畑地内にかけて中近世の遺物が採集されたため、比較的広範囲に及ぶ遺跡と考えられてきた。平成23・25年には、大府市により個人住宅建設に伴う確認調査を実施したところ、山茶碗、片口鉢Ⅰ類、土師器内耳鍋などの遺物を伴う土坑や溝を検出し、鎌倉時代から室町時代に帰属する周知の遺跡として登録されるに至った。

令和元年11月7日、事業者より宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の有無に関する照会文書が提出され、翌日、大府市からの回答に従い、事業対象域での範囲確認調査による遺構・遺物の残存状況と調査対象面積の確定が必要となった。そこで、調査の実施に先立ち、12月6日までは地権者からの承諾書の受け取りを完了し、本調査へ向けての準備を進めることとした。

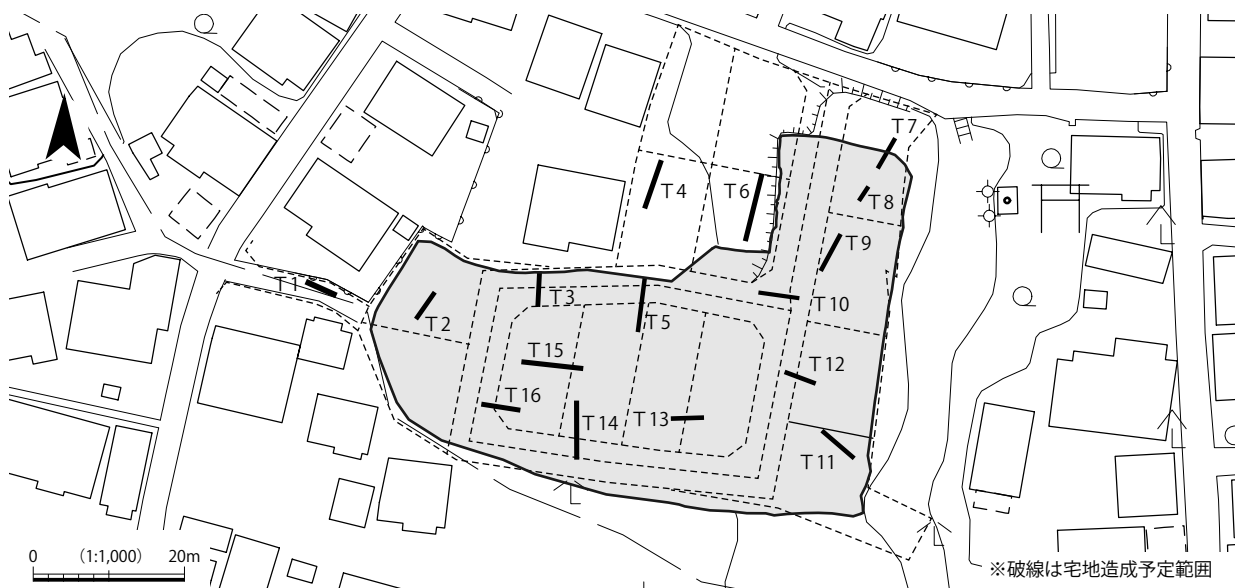
まず、範囲確認調査は、令和2年2月12日から2月14日までの期間、大府市が実施した。事業対象



写真2 T2確認調査状況 写真3 T11確認調査状況

域には、16カ所のトレンチ（第4図）を設定して掘削を行い、そのうち、T2・T3・T8・T11・T12・T13・T15の7カ所で遺構・遺物を検出することができた。調査の結果を踏まえ、事業者、仲介業者、地権者と大府市の四者で協議を行った結果、事業対象域の内、2,200㎡について記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨を伝達した。

現地調査は、事業者から大府市を通じて民間調査会社である株式会社アコード名古屋営業所（以下、アコード）が委託を受け、大府市の管理・監督のもと実施することとなり、令和3年1月18日付で契約の締結を行った。そして、2月24日付、文化財保護法92条第1項に基づく発掘届がアコードから大府市教育委員会へ提出され、合わせて愛知県への進達を行った。現地での調査は、令和3年4月12日から開始することとした。



第4図 確認調査トレンチ配置図

※破線は宅地造成予定範囲

第2節 調査の方法

現地調査は先述の確認調査の結果をもとに、2,200m²の範囲で実施した。調査を進めるに際して、調査区域内に十分な残土置場を確保できなかったため、調査区を西半部と東半部の2つに分けて、いわゆる打って返して調査を進めることにした。表土掘削には0.4m²級バックホウを使用し、表土以下の遺物包含層の掘削は基本的に人力で行った。

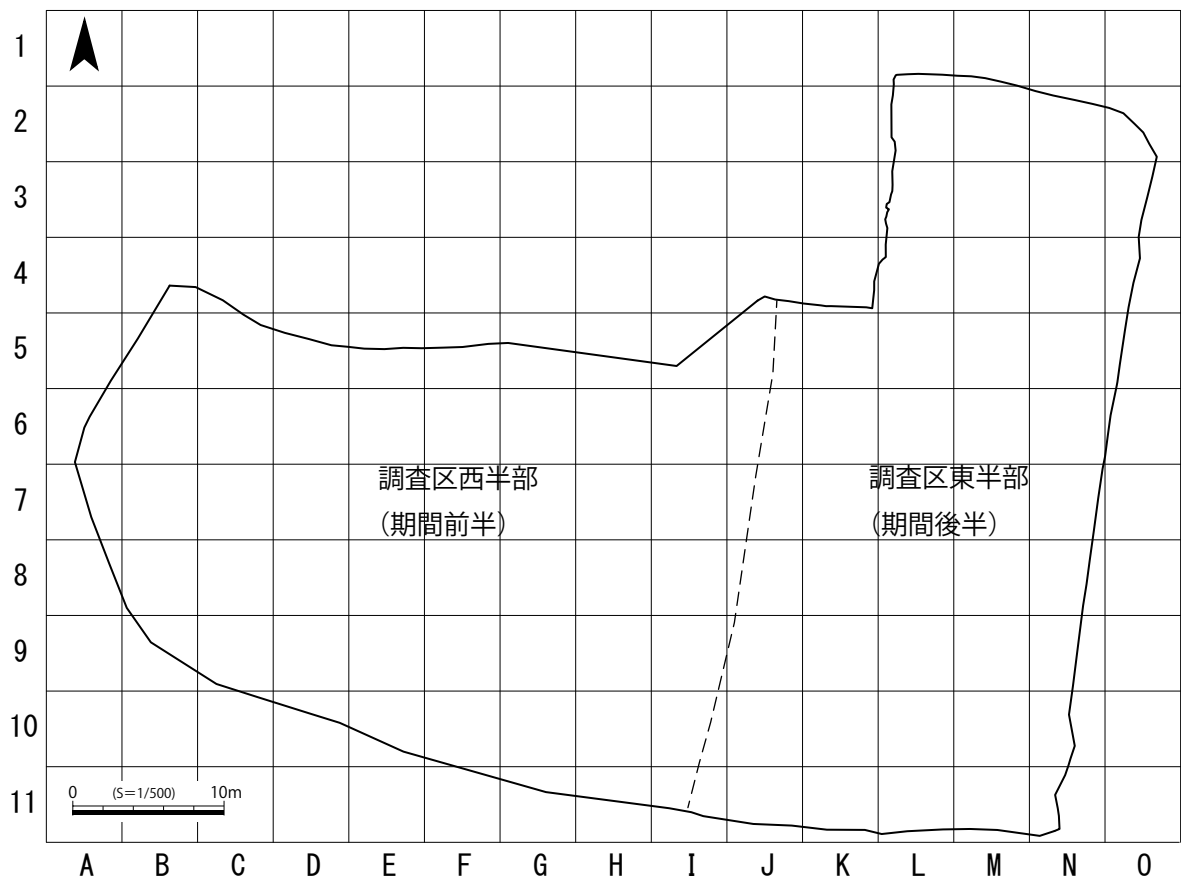
調査における測量は2級基準点を基点とし、世界測地系座標を用いた。水準は東京湾平均海面(TP)を用いた。遺構の記録や出土遺物の取り上げは、平面直角座標系第Ⅶ系に即した最小グリッドを5mに設定して実施した。グリッド名については調査区全体を網羅できる範囲で、北西隅を起点に、東西方向にA～O、南北方向に1～11で示し、アルファベットとアラビア数字の組み合わせでB5、C5というように表示した(第5図)。

遺跡の略記号は石丸遺跡の2021年度調査として「ISHM21」とした。遺構の略記号は、SA(掘立柱柵列)、SB(掘立柱建物)、SP(柱穴・ピット)、

SK(竪穴状土坑・土坑)、SD(溝・堀)、SE(井戸)、SX(その他の遺構)を使用した。番号は、SA・SBは01からの2桁、SPは遺構数が多くなることが予想されたため、0001からの4桁、他を001からの3桁で表記した。

遺構の図面記録は測量機械であるトータルステーションと電子平板を使用したデジタル測量を基本とし、写真測量を併用して行った。良好な出土状況を示すものについては、出土状況図の作成や出土地点の観測を行った。遺物の収納は耐水性ユポ紙に遺跡略記号、グリッド、遺構、層位、日付を記載して、チャック付袋や収穫ネットに収納した。出土遺物は調査後に遺物登録番号を追加し、遺物登録台帳と対応させた。

遺構の写真撮影はフルサイズデジタル一眼レフカメラを基本とし、重要遺構や全景写真撮影には、6×7フィルムサイズ相当のフルサイズデジタル一眼レフカメラを使用した。空中写真撮影はフルサイズデジタルカメラを搭載したドローンにより、西半部、東半部の遺構完掘後に全景撮影を行った。



第5図 調査区地区割図

第3節 調査の経過

調査地の現況は、雑木・竹などが繁茂する荒蕪地、畑、果樹園であった。調査を開始するにあたり、事前準備として、調査区域内の雑木・竹の伐採と搬出作業を開始した。伐採・搬出作業は2週間程で終了し、その後に基準点測量と現況測量、調査区設定を行った。

事前準備終了後、現地調査を4月12日から開始した。表土掘削（重機）は調査区西半部から開始し、これに併行して人力による壁面整形と土層観察用のトレンチ掘削を行った。表土掘削に際しては、調査区域内に十分な残土置場を確保できなかったため、調査区を西半部と東半部の2つに分けて、いわゆる打って返して調査を行うこととした。また、周辺の道路事情によりベルトコンベアが搬入できなかったため、人力掘削で生じた残土は一輪車で搬出した。この間、仮設事務所・トイレの設置、電気の敷設などを行った。

表土掘削と壁面整形終了後、4月19日から遺構検出を開始した。表土掘削の段階では、遺構・遺物ともに少ない印象を持っていたが、検出を進めるにつれて遺構・遺物ともに増加し、最終的には当初の予想以上に遺構密度の高い遺跡であることが判明した。検出した遺構は室町時代を中心とした掘立柱建物、掘立柱柵列、井戸、竪穴状土坑・土坑、溝などで、これらの遺構は、溝で区画された屋敷地内に配置されていることが分かった。

大府市域で本格的な中世集落が発掘されるのは初めてのことであり、地元住民や周辺自治体からも非常に注目を集めた。この時点で現地説明会の開催を望む声も多かったが、調査期間も限られており、また、県下に新型コロナウイルス緊急事態宣言が発令されていたことから、全ての調査が終了するのを待って判断することにした。

調査区西半部の遺構掘削は6月9日までに終了し、翌10日にドローンによる空中写真撮影を行った。写真撮影後、調査区西半部の埋戻しと東半部の表土掘削作業を同時併行で行った。7月に入ると連日の猛暑で遺構面の乾燥が進んだため、常時散水しながら遺構検出と掘削を繰り返した。遺構掘削に際しては、深さが40cmを超える規模の柱穴



写真4 樹木伐採作業状況（北から）



写真5 表土掘削作業状況（西から）

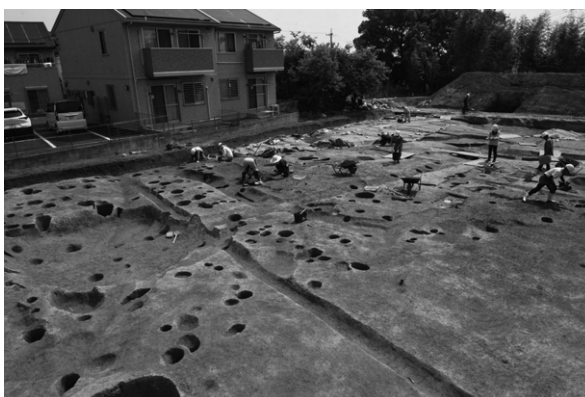


写真6 遺構掘削作業状況（南西から）



写真7 遺構掘削作業状況（東から）

が多かったことや、埋土が締りの強い粘質土であったため、非常に掘りにくく、完掘までに相当な時間を要した。

調査区東半部の遺構掘削は7月29日までに終了した。調査の結果、長さ23m、幅3mを超える戦国時代の堀、室町時代の大型の掘立柱建物、掘立柱柵列、素掘りの井戸、方形竪穴状土坑・土坑、溝、柱穴などが多数検出され、調査区西半部と同様、溝で区画された複数の屋敷地内に掘立柱建物、井戸、竪穴状土坑等が配置された中世集落であることが判明した。最終的な遺構総数は1,141基となった。

遺構完掘後の7月30日にドローンによる空中写真撮影を行い、撮影結果を確認後、同日午後から現地説明会の会場設営を行った。

現地説明会当日は猛暑にも関わらず、地元住民の方々をはじめ、県内外から210名の参加者があり、埋蔵文化財に対する地域住民の関心の高さがうかがえた。その後は、井戸の断割り調査などの補足調査、東半部の埋戻し作業、仮設事務所や資材類の撤去・搬出を終え、8月6日に全ての現地作業を終了した。

出土遺物の洗浄・注記などの一次整理作業は、現地調査終了後に当社施設で行い、その後に出土遺物の実測、遺構図面・写真の編集作業を行った。出土遺物の接合・実測作業に際しては、南山大学の上峰篤史氏（南山大学人文学部人類文化学科准教授）、帝塚山大学の清水昭博氏（帝塚山大学文学部日本文化学科教授）のご厚意により、両大学の学生諸氏に御協力頂いた。また令和4年1月21日には、帝塚山大学にて「石丸遺跡の調査成果と埋蔵文化財の現状など」について講演する機会を得た。

その後は、自然科学分析と報告書原稿執筆、報告書編集作業を開始し、同年7月15日に調査報告書を刊行、同月中に成果品の納品と検査を終え、本業務を終了した。



写真8 現地説明会風景（北から）



写真9 遺物整理作業（南山大学人類文化学科考古学研究室）



写真10 遺物整理作業（帝塚山大学附属博物館）



写真11 現地調査参加者

第3章 遺構

第1節 周辺の地形と基本層序

石丸遺跡は、尾張・三河の国境とされた境川右岸の台地縁辺部、旧衣ヶ浦湾を望む標高約10～13mに立地する。遺跡の南方約500mには古代の製塩土器が多量に出土した惣作遺跡があり、知多湾奥の旧衣ヶ浦湾西岸では最も内陸部に位置した土器製塩遺跡として知られている。現在は境川と逢妻川が形成した沖積地が広がるが、江戸時代以前は旧衣ヶ浦湾頭が遺跡周辺まで入り込む海浜地であった。

調査地周辺の地形は、概ね南西から北東に向けて降る緩斜面が連続しており、調査地東側に位置する天王社・北尾秋葉社（第3図）付近は境川の開析による段丘崖となっている。調査区南辺には旧街道（東浦街道）に繋がる東西方向の大規模な切通し（古道）がみられ、天保12年（1841）の「知多郡北尾村絵図」（第52図）に横根村・北尾村の村境として描かれていることから、遅くとも幕末頃には開削され利用されていたと考えられる。

調査区西半部の南側に遺構が希薄な箇所があるが、これは周辺が耕地化される際に斜面上部側が大きく削平されたことに起因したものであろう。

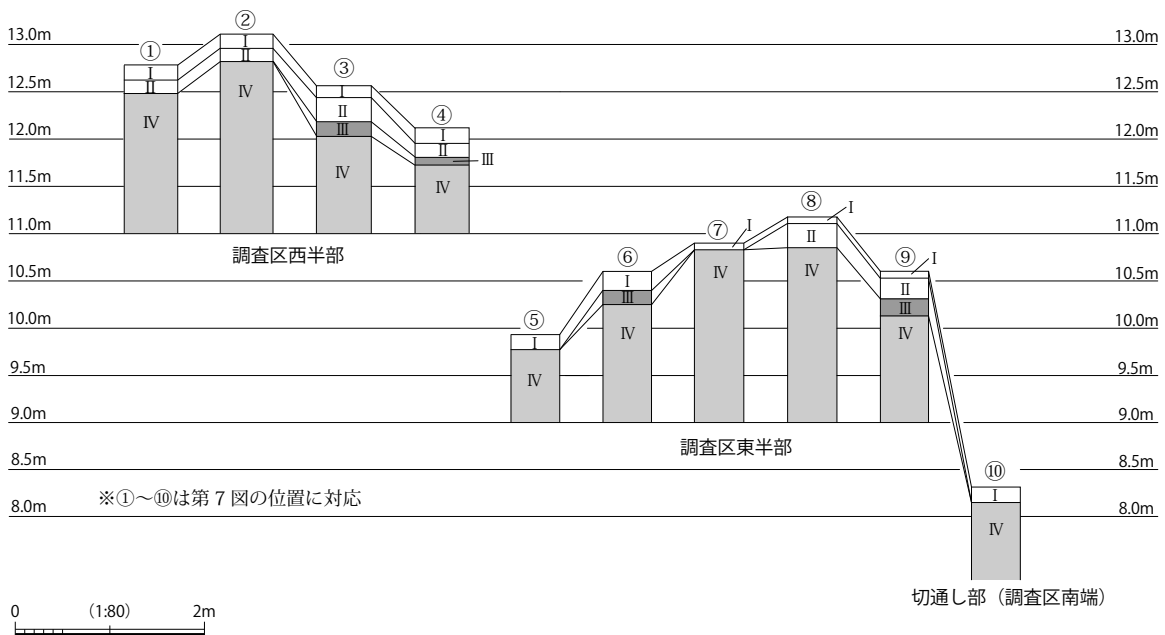
調査区内の基本層序は、概ね以下の4層に大別できる（第6～8図）。

- 第Ⅰ層：表土・現耕作土（近・現代）
- 第Ⅱ層：旧耕作土（近世）
- 第Ⅲ層：中世遺物包含層
- 第Ⅳ層：地山

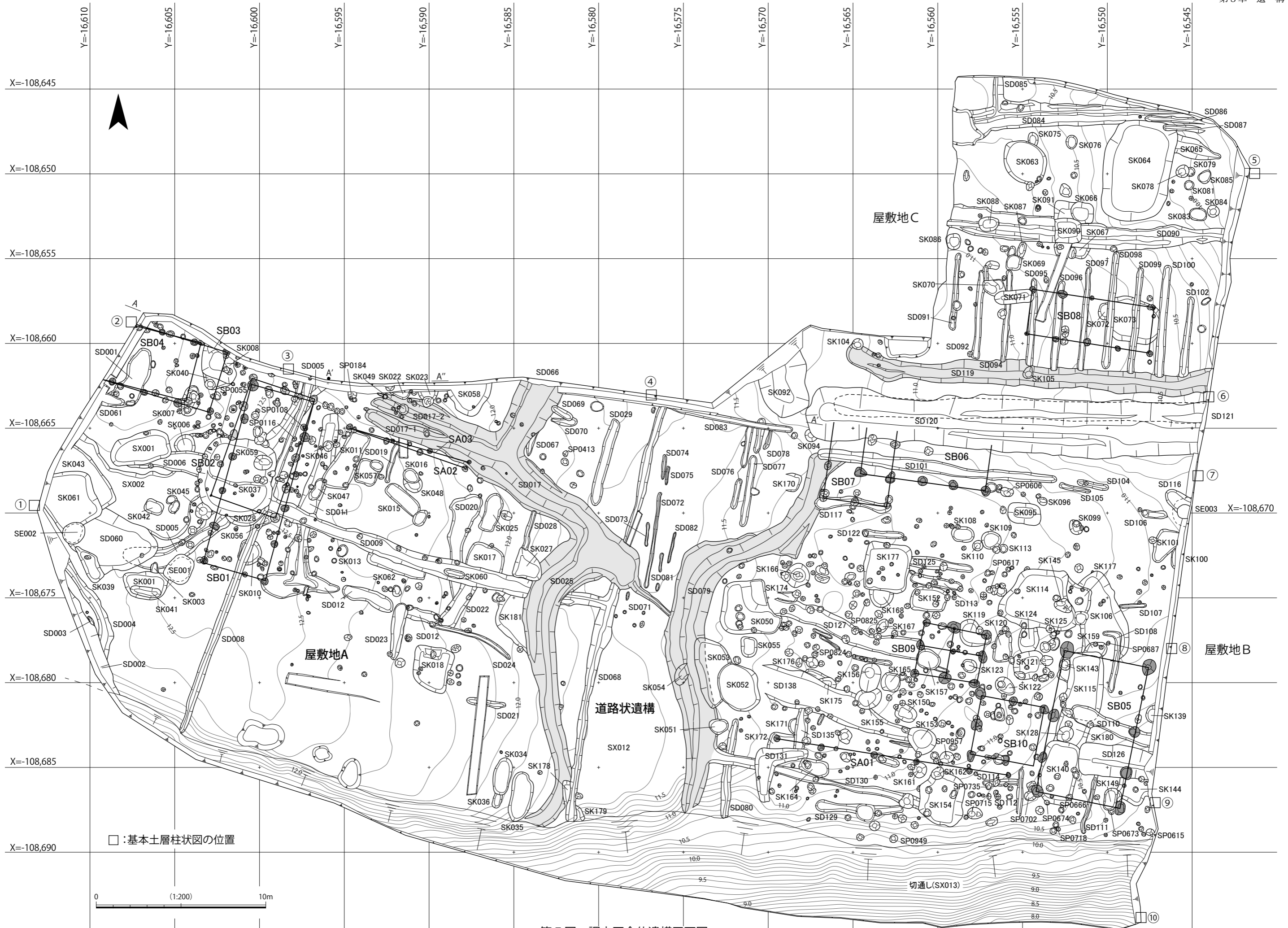
江戸時代以降、調査区のほぼ全域が耕地化され、標高の高い場所を中心に大きく削平されているため、基本的に第Ⅰ層の表土・現耕作土、第Ⅱ層の旧耕作土直下で橙黄褐色粘質土の地山が露出する（第6図-①・②・⑤・⑦・⑧）。一方、調査区西半部の北壁沿い（第6図-③・④）や調査区東半部の標高の低い箇所（⑥・⑨）においては、部分的に第Ⅲ層の遺物包含層が残存する。遺物包含層は暗褐色を基調とした粘質土層で、層厚は約10～20cmを測る。出土遺物からみて中世の遺物包含層と考えられる。

第Ⅳ層は赤みの強い橙黄褐色粘質土の地山で、調査区のほぼ全域に分布するが、標高の低い調査区東半部の北側（第6図-⑤）や南東側（第6図-⑩）では、橙黄褐色粘質土下部の黄褐色砂礫混粘質土や黄灰色砂礫層が基盤層となっている（常滑層群）。

地山面の標高は、調査区西半部の高台部で12.7m、調査区東半部の北東端で9.7mを測り、東西の比高差は約3mを測る。



第6図 基本土層柱状図



第7図 調査区全体遺構平面図

第2節 遺構の概要

遺構は全て地山上面で検出した。検出した遺構は、掘立柱建物 10 棟、掘立柱柵列 3 条、溝 115 条、堀 2 条、素掘り式の井戸 3 基、竪穴状土坑・土坑 129 基、建物に復元された柱穴以外の柱穴・ピット 783 基、他に道路状遺構・その他の遺構が 4 基ある。

遺構の総数は 1,141 基にのぼるが、その大半が鎌倉時代から室町・戦国時代にかけての中世の遺構である。

中世の遺構は、縦横に走るややいびつな溝で区画された屋敷地内に配されており、屋敷地 A～C の 3 つの屋敷地を確認した（第 7 図）。屋敷地 A の北側にも別の区画が見られるため、さらに屋敷地が展開している可能性が高い。屋敷地 A・B の南側は切通し（SX013）で破壊されているが、切通し箇所はちょうど地形の傾斜変換点に位置しており、屋敷地南端の位置をある程度推定することが可能である。屋敷地は地形に制約を受けつつも、方形区画を意識した屋敷地割りが行われたと考えられる。

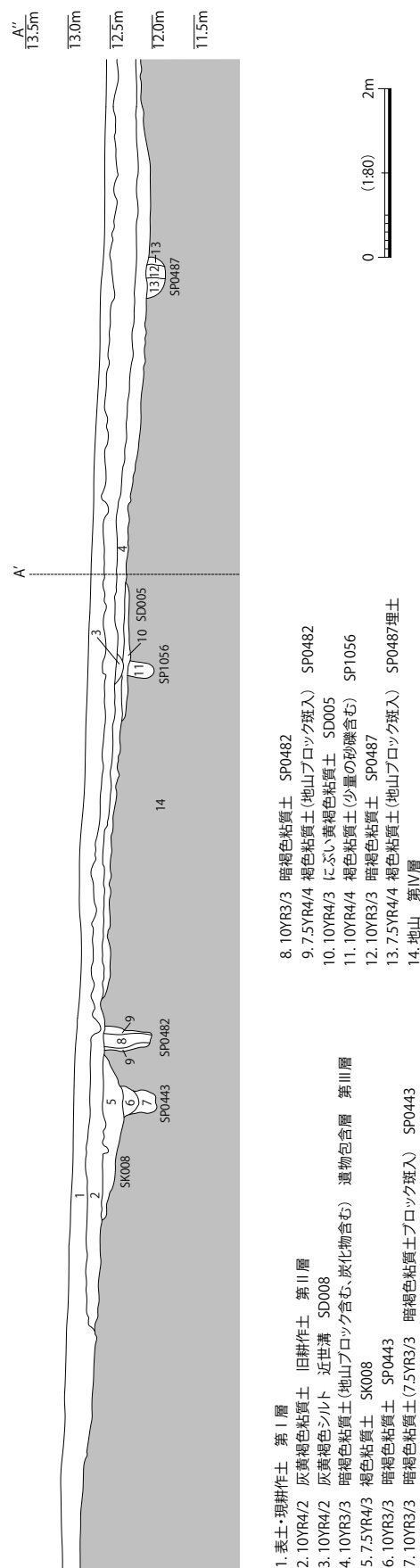
各屋敷地の検出規模は、屋敷地 A が東西 32 m、南北 21 m（推定 25m）、屋敷地 B が東西 27 m（推定 30m）、南北 28 m（推定 30m）、屋敷地 C が東西 22 m、南北 17 m を測る。屋敷地 A と屋敷地 B の間には、並行する 2 本の区画溝に挟まれた南北方向の空閑地が延びており、道路状遺構（SX012）と考えられる。なお、火葬施設や墓と認識できる遺構は検出されなかった。

出土遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、山茶碗、瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、中国産磁器、瓦質土器、近世陶磁器、墨書土器、製塩土器、土製品、瓦、金属製品・鍛冶関連遺物、石器・石製品、木製品、貝類などの動物遺体がある。時期的には中世を中心としつつ、縄文時代から近世に至るまで、実に様々な時期の遺物が含まれる。

以下、検出した遺構について遺構種別ごとに述べる。

第3節 掘立柱建物

掘立柱建物は、屋敷地 A で 4 棟、屋敷地 B で 5 棟、屋敷地 C で 1 棟の計 10 棟検出した。これ以外にも柱穴・ピットを 783 基検出しており、さらに多くの建物が存在したと考えられるが、現段階で復元できた建物は 10 棟にとどまる。いずれも中世の掘立柱建物で、平面構造は長方形のものが 7 棟、正方形に近いものが 2 棟、全体構造が不明なものが 1 棟ある。



第 8 図 調査区西半部北壁土層断面図

SB01 (第9図) 屋敷地Aの北西部で検出した桁行5間(10.9m)、梁行1間(3.8m)の南北棟の大型側柱建物である。北東隅柱は後述の掘立柱建物SB02の柱穴に破壊されているため検出されなかった。建物の主軸方位はN-15°-Eで、床面積は約41㎡である。

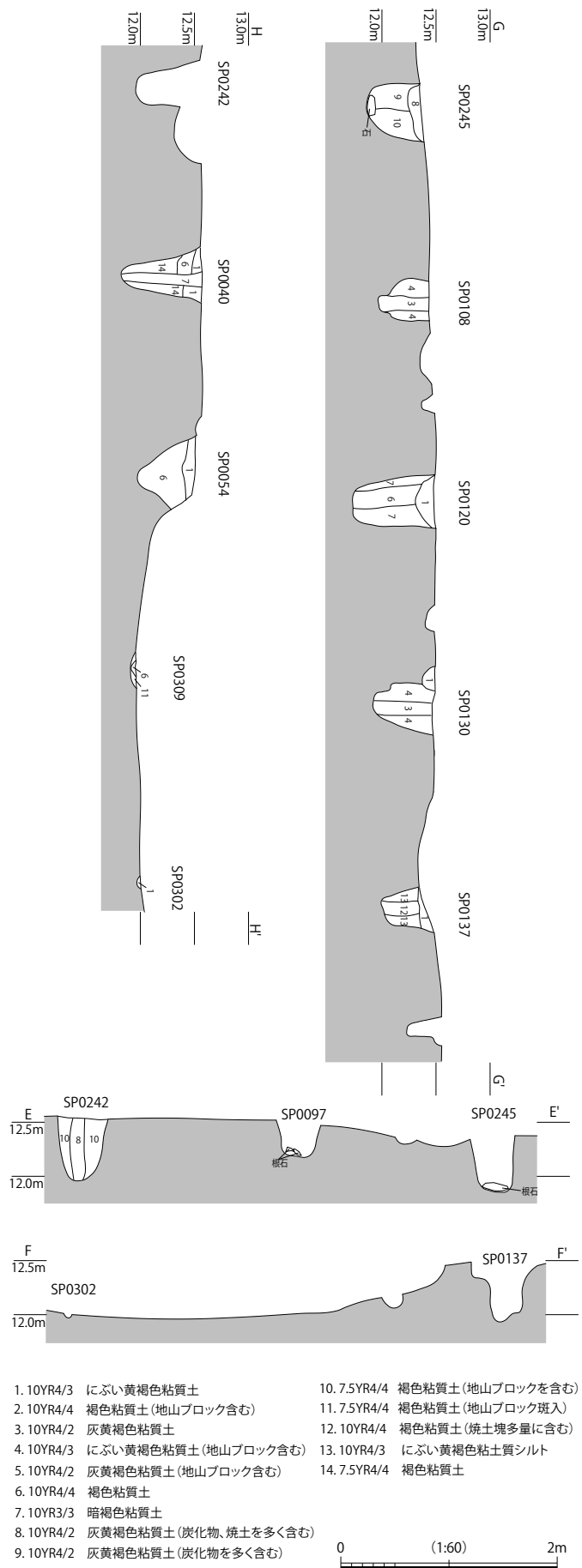
柱間寸法は、北西辺の桁行が北から2.1m・2.3m・2.1m・2.2m・2.2m、南東辺の桁行が北から2.2m・2.2m・2.1m・2.1m・2.3mを測る。梁行は南西辺が3.7mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は0.35～0.6m、検出面からの深さは0.35～0.8mを測る。深さにややばらつきが見られる。柱痕跡はSP0114・0126・0266・0142・0294・0322の6基で検出した。柱痕跡はいずれも平面形が円形で、直径は13～20cmを測り、丸柱と考えられる。断面観察では柱の抜取り痕は確認できなかった。

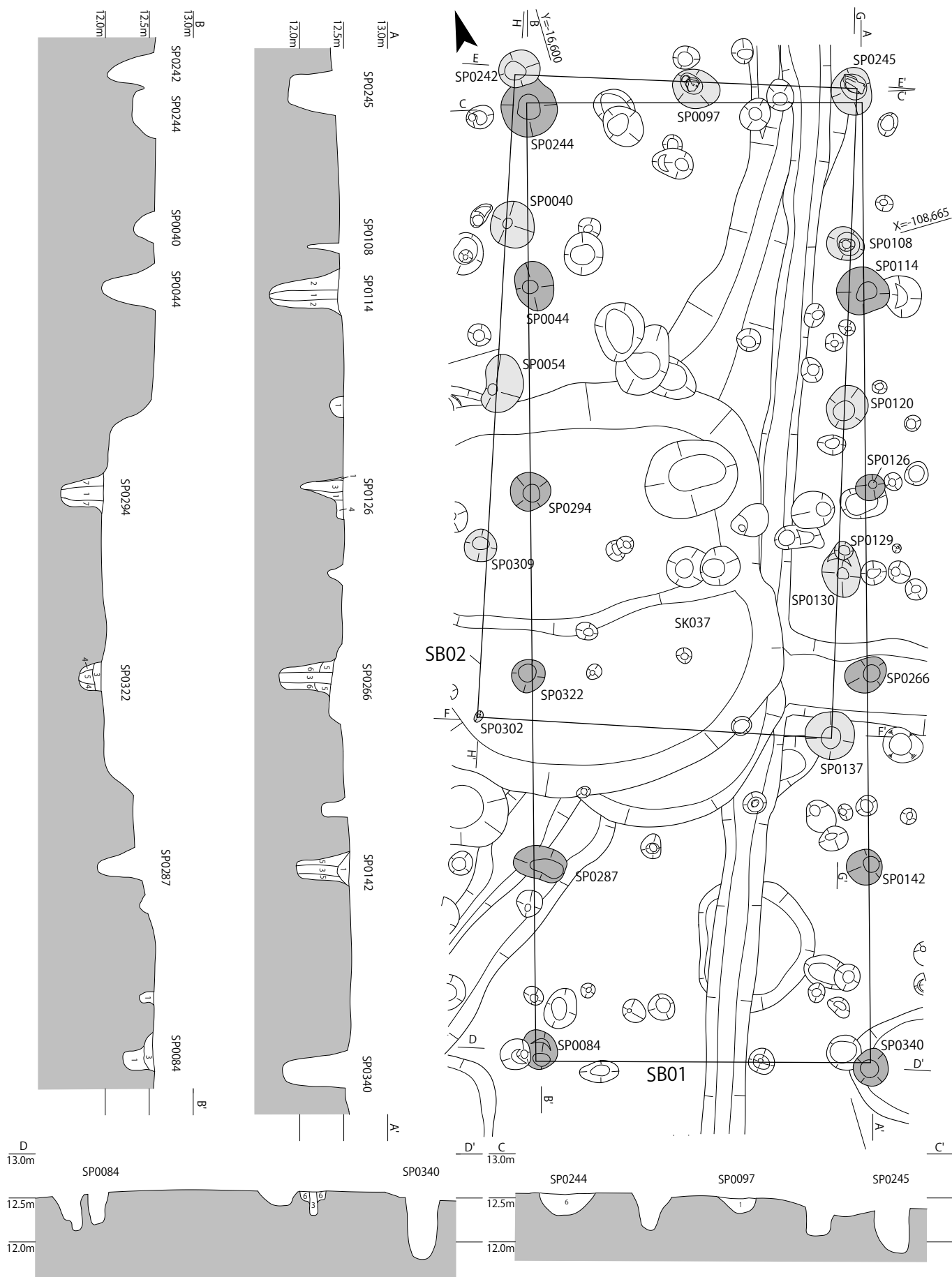
柱穴埋土から、土師器羽釜、山茶碗・小型壺、古瀬戸の天目茶碗・緑釉小皿、常滑窯産の甕などが出土した。最も新しい時期の遺物として、古瀬戸後IV期新段階の緑釉小皿があり、15世紀中葉から後葉に位置付けられる。

掘形規模が大きく掘削深度も深いこと、また、細長い建物で居住性を重視した建物とは考えにくいことなどから、倉庫等の特別な建物になる可能性が高い⁽⁴⁾。重複関係から掘立柱建物SB02に先行する。建物の主軸方位は後述のSB04・SA03に一致しており、これらの建物は同時期あるいは近接した時期の可能性が高い。

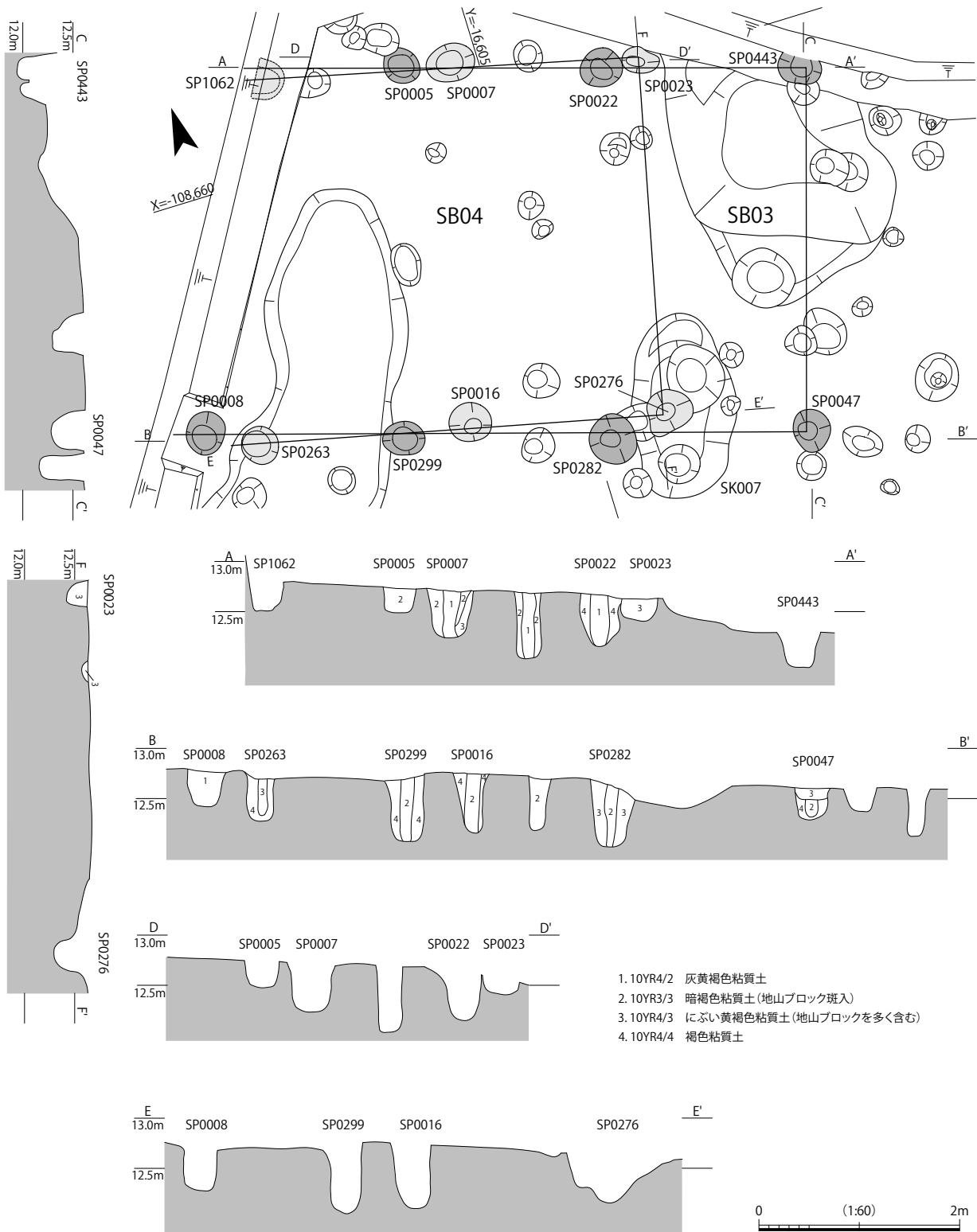
SB02 (第9図) 掘立柱建物SB01に後出する掘立柱建物で、桁行4間(7.3m)、梁行2間(3.9～4.0m)の南北棟の側柱建物である。南西隅柱のSP0302は、方形竪穴状土坑SK037に破壊されて掘形底面を残すのみである。また、南西辺のSP0302とSP0137間の柱穴も同じくSK037に破壊されて検出されなかった。建物の主軸方位はN-19°-E、床面積は約29㎡である。

柱間寸法は、南東辺の桁行が北から1.9m・1.8m・1.9m・1.8m、北西辺の桁行は北から





第9図 掘立柱建物 SB01・02 平面図・断面図



第10図 掘立柱建物 SB03・04 平面図・断面図

1.8m・1.8m・1.8m・1.9m、梁行は北東辺が西から、2.0m・1.9mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は0.4～0.6m、検出面からの深さは0.5～0.7mを測る。SP0097とSP0245の底面で根石を検出した。根石はいずれも扁平な河原石で、SP0245の根石は長さ約30cm、幅15cm、厚さ5～8cm、SP0245の根石は長さと同幅が共に15cm、厚さは3～5cmを測る。柱痕跡はSP0040・0108・0120・0130・0137・0242・0245の7基で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、直径は12～23cmを測り、丸柱と考えられる。断面観察では柱の抜き取り痕は確認できなかった。

柱穴埋土から古瀬戸の平碗・縁釉小皿、土師器皿（灯明皿）、中国産青磁蓮弁文碗、銭貨（銭文不明）、炉壁などが出土した。細片化して図化できなかったが、古瀬戸後Ⅳ期新段階の縁釉小皿があり、15世紀中葉から後葉に位置付けられる。重複関係から掘立柱建物SB01に後出するため、遺構の帰属時期は15世紀末から16世紀代に下る可能性が高い。後述する掘立柱柵列SA02と建物の主軸方位が一致するため、これと同時期あるいは近接した時期の建物になると考えられる。

SB03（第10図） 屋敷地Aの北西で検出した掘立柱建物である。建物西側が調査区外に位置するため詳細な構造は不明だが、桁行3間（6m）以上、梁行1間（3.6m）の東西棟の側柱建物になると考えられる。建物の主軸方位はN-73°-W、床面積は約22㎡である。

柱間寸法は、北東辺・南西辺ともに桁行が2.0m等間、梁行は南東辺が3.6mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は0.4～0.5m、検出面からの深さは0.3～0.7mを測る。柱穴の深さはややばらつきがある。柱痕跡はSP0022・0047・0282・0299の4基で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、直径は13～20cmを測り、丸柱と考えられる。断面観察では柱の抜き取り痕は確認できなかった。

柱穴埋土から土師器羽釜、山茶碗、常滑窯産の甕、古瀬戸の平碗などが出土した。最も新しい時期の遺物として尾張型山茶碗第9型式の山茶碗があり、14世紀中頃に位置付けられる。

SB04（第10図） 掘立柱建物SB03とほぼ同じ位置で検出した掘立柱建物で、建物西側が調査区外に位置するため詳細な規模・構造は不明だが、桁行2間（4.1m）以上、梁行1間（3.6m）の東西棟の側柱建物と考えられる。建物主軸方位はN-75°-Wで、床面積は約15㎡である。

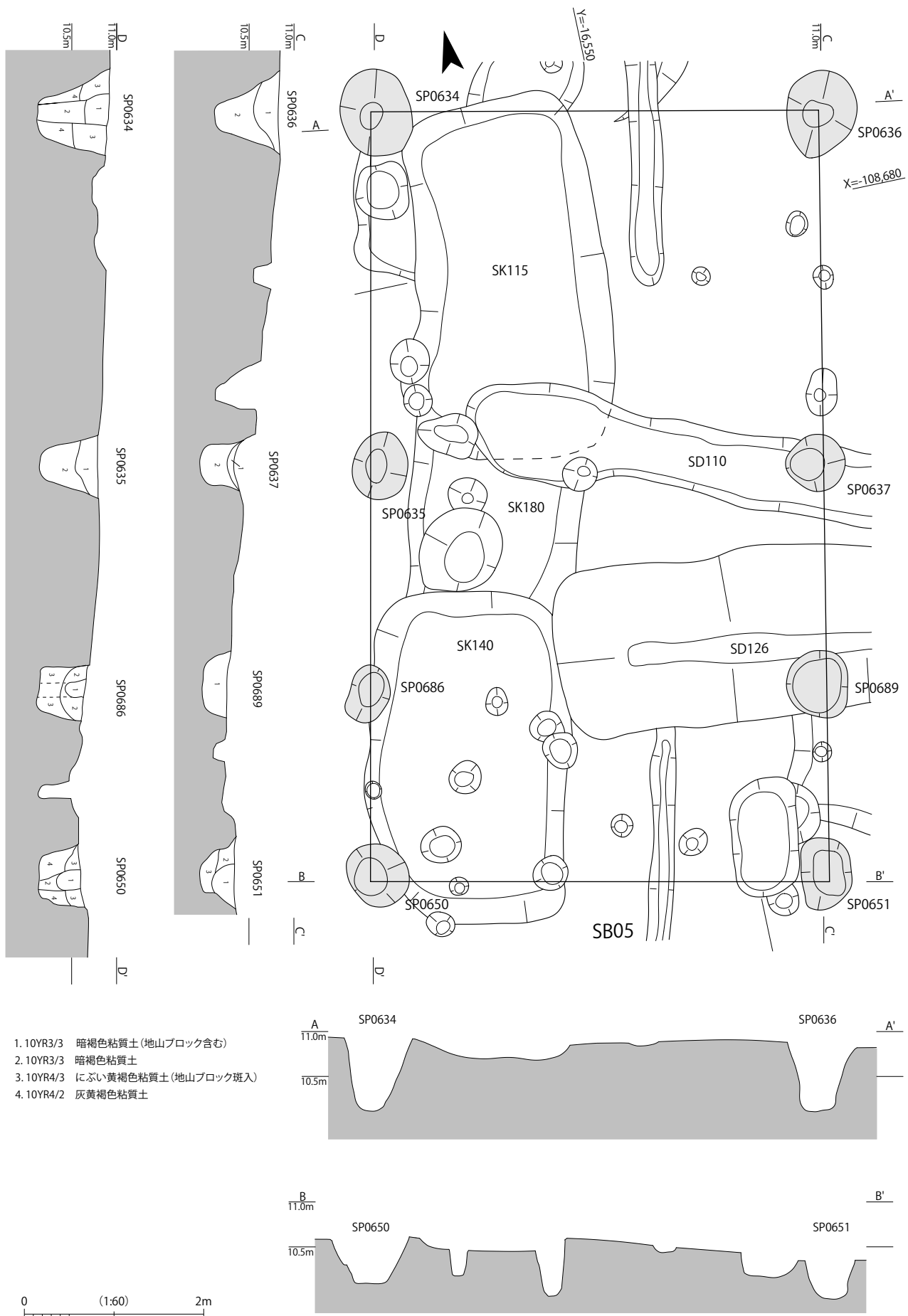
柱間寸法は、北東辺の桁行が西から1.9m等間、南西辺の桁行が西から2.1m・2.0m、南東辺の梁行が3.6mを測る。柱穴掘形の平面形は円形あるいは楕円形で、規模は0.4～0.5m、検出面からの深さは0.3～0.7mを測る。柱痕跡はSP0007・0016・0263の3基で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、直径は10～15cmを測り、丸柱と考えられる。断面観察では柱の抜き取り痕は確認できなかった。

柱穴埋土から山茶碗、常滑窯産の甕などが出土したが、いずれも細片化しており、詳細な時期は不明である。先述の掘立柱建物SB01と建物の主軸方位が一致することから、SB01と同時期あるいは近接した時期の建物の可能性が高い。

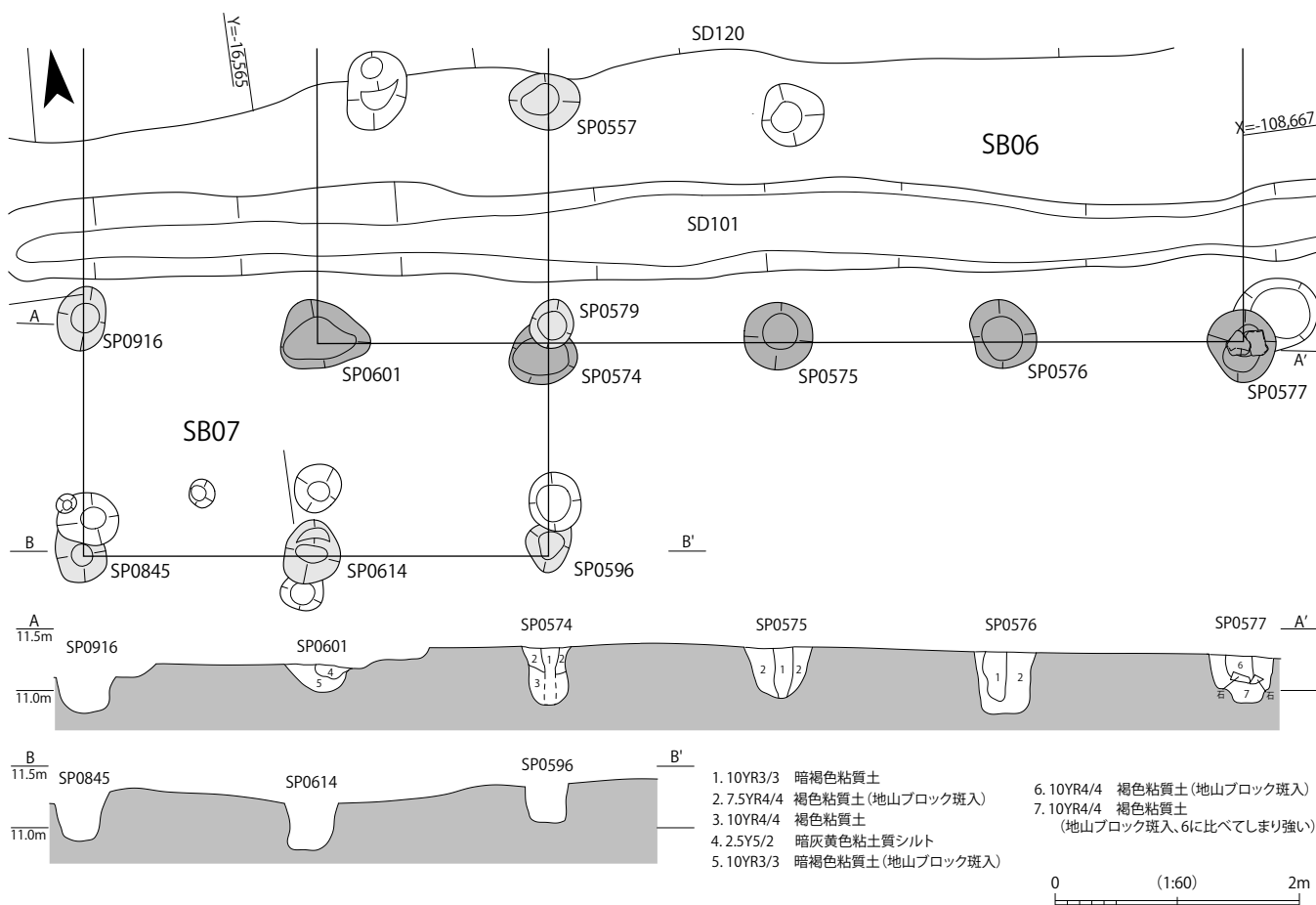
SB05（第11図） 屋敷地Bの南東部で検出した大型の掘立柱建物で、桁行3間（8.6m）、梁行1間（5.0～5.1m）の南北棟の側柱建物になると考えられる。建物の主軸方位はN-11°-E、床面積は約44㎡である。

柱間寸法は、北西辺・南東辺の桁行が北から3.9m・2.5m・2.2m、北東辺の梁行が5.0m、南西辺の梁行が5.1mを測る。柱間寸法にばらつきがある。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は0.6～1.0mと大型である。検出面からの深さは0.3～0.8mを測る。柱痕跡はSP0634・0650・0686の3基で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、直径20～25cmを測り、丸柱と考えられる。断面観察では柱の抜き取り痕は確認できなかった。

柱穴埋土から山茶碗、常滑窯産の甕、古瀬戸の天目茶碗などが出土した。天目茶碗は古瀬戸後期末の製品で15世紀後葉に位置付けられる。掘形規模が大きく掘削深度も深いことから、倉庫や工房などの特別な建物になると想定される。なお、堀SD126は古瀬戸後Ⅳ期に埋められており、掘立柱建物SB05の構築を機に埋められた可能性が高い。



第11図 掘立柱建物 SB05 平面図・断面図



第12図 掘立柱建物 SB06・07 平面図・断面図

SB06 (第12図) 屋敷地Bの北西で検出した東西4間(7.5m)の建物で、掘形規模が大きいことから柵列ではなく掘立柱建物と考えられる。建物北側がSD120に破壊されているため、詳細な規模・構造は不明だが、SD120の北側に連続しないことから、梁行1間もしくは2間の東西棟の側柱建物になると思われる。

柱間寸法は、桁行が西から1.9m・1.9m・1.7m・2.0mを測る。柱穴掘形の平面形は円形あるいは楕円形で、規模は0.5～0.7m、検出面からの深さは0.3～0.5mを測る。南東隅柱のSP0577のみ根石(砥石転用)を伴う。柱痕跡はSP0601を除く全ての柱穴で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、直径は15～20cmを測り、丸柱と考えられる。断面観察では柱の抜き取り痕は確認できなかった。

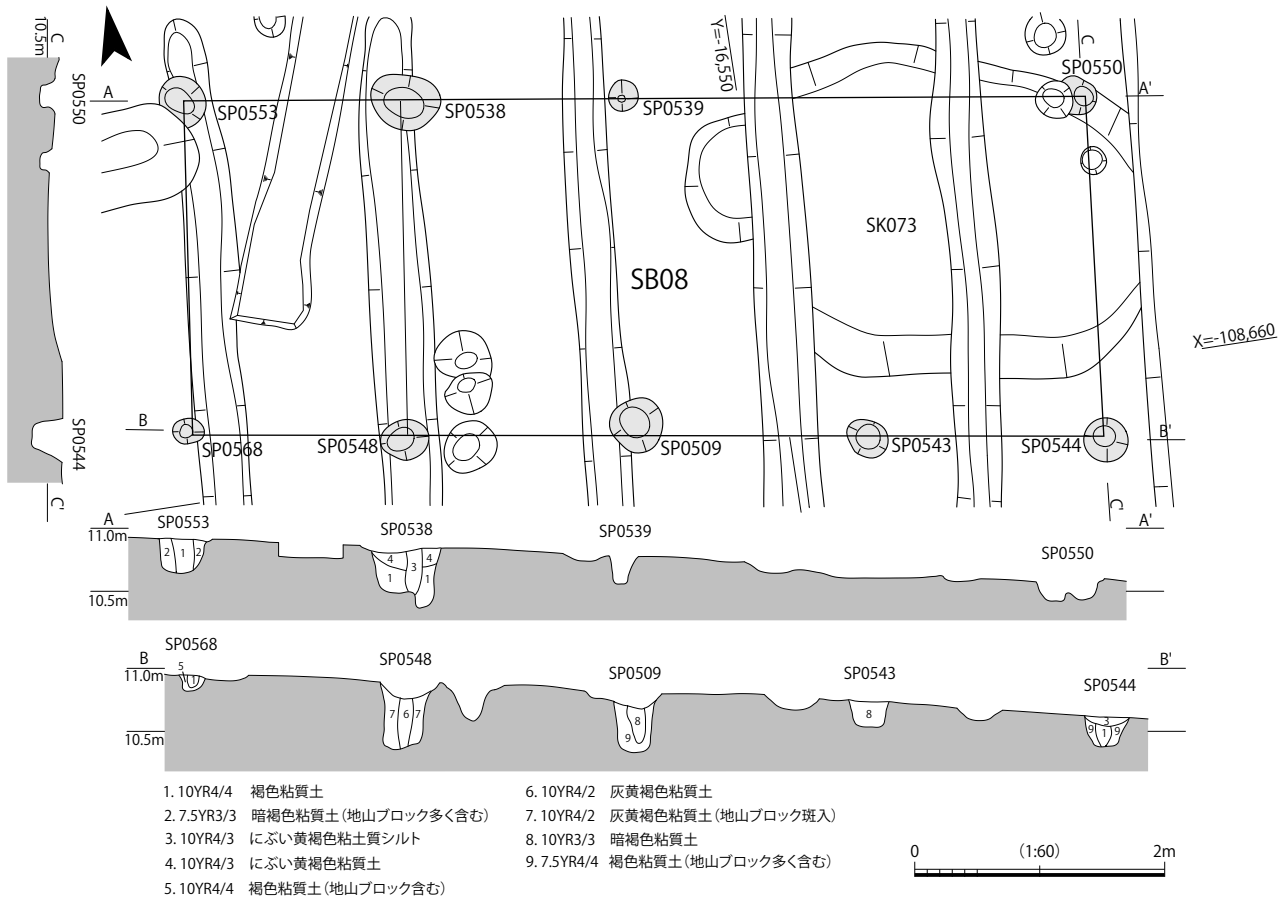
柱穴埋土から土師器鍋、山茶碗、常滑窯産陶器、砥石などが出土した。土器・陶器類はいずれも細片のため詳細な時期は不明である。重複関係からSD120に先行するため、帰属時期は15世紀末か

ら16世紀前葉頃と思われる。重複関係からSB07に先行するが、建物の主軸方位が一致するため、SB07に近接した時期の建物と考えられる。

SB07 (第12図) 掘立柱建物SB06に重複した掘立柱建物である。建物北側がSD120に破壊されているため、詳細な規模・構造は不明だが、SD120の北側で柱穴が検出されなかったため、東西2間(東西3.8m)、南北は2間(南北3.7m)もしくは3間の側柱建物になると思われる。建物の主軸方位はN-82°-W、床面積は約14㎡である。

柱間寸法は、南辺が西から1.9m・2.0m、東辺が1.9m等間、西辺は1.9mを測る。柱穴掘形の平面形は円形あるいは楕円形で、規模は0.4～0.5m、検出面からの深さは0.3～0.4mを測る。断面観察では柱の抜き取り痕は確認できなかった。

柱穴埋土から古瀬戸後期の平碗が出土した。重複関係からSB06に後出し、他の16世紀代の遺構と主軸方位が一致することから、SD120掘削前の16世紀前葉頃の建物と考えられる。建物の主軸方



第13図 掘立柱建物 SB08 平面図・断面図

位は SB06・08 にほぼ一致する。

SB08 (第13図) 屋敷地Cの南端で検出した桁行4間(7.1~7.2m)、梁行1間(2.7m)の東西棟の側柱建物である。SP0539とSP0550間の柱穴はSK073に破壊されて検出されなかった。西側柱筋の柱穴がやや小規模であることから、桁行3間、梁行1間の身舎に西側底を伴う建物になる可能性もある。建物の主軸方位はN-83°-Wで、床面積は約19㎡である。

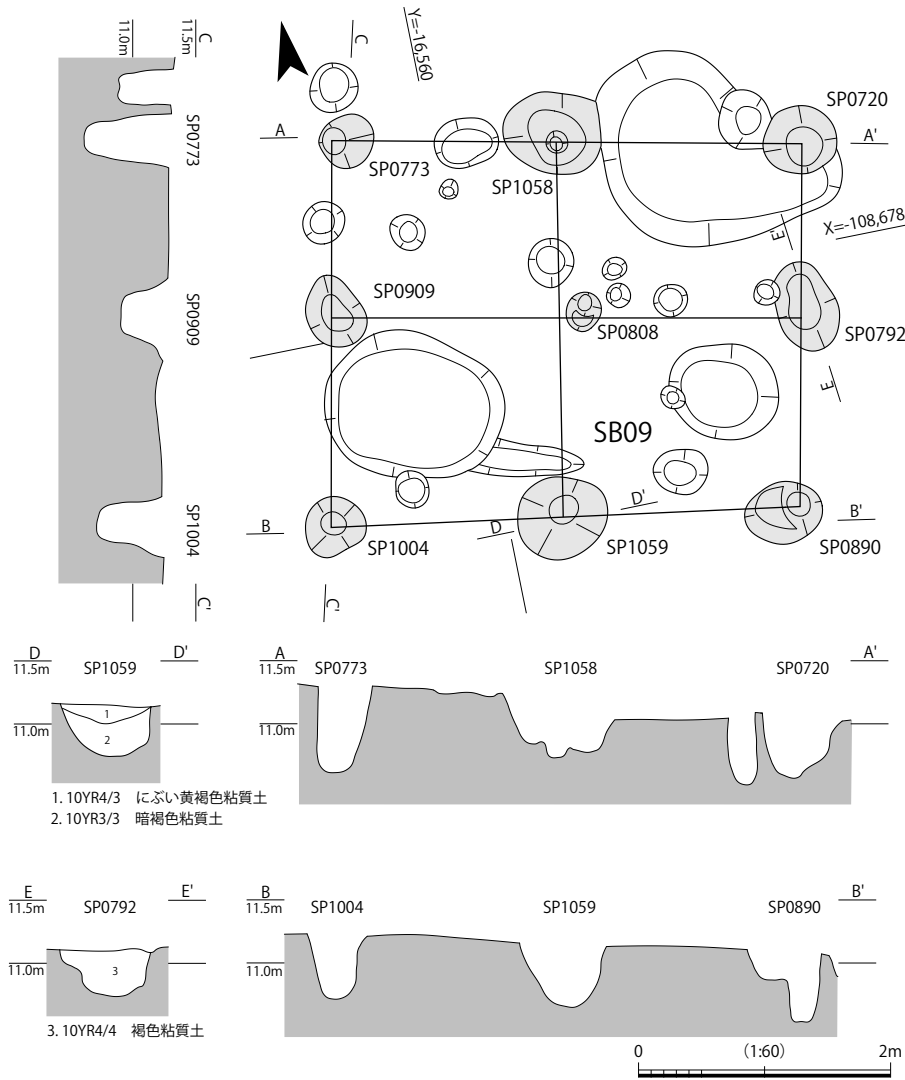
柱間寸法は、南辺の桁行が西から1.7m・1.8m・1.9m・1.9m、北辺の桁行が西から1.8m・1.7mを測る。梁行は西辺・東辺ともに2.7mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は0.25~0.55m、検出面からの深さは0.15~0.5mを測る。深さにややばらつきがある。柱痕跡はSP0553・0538・0568・0548・0509・0544の6基で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、直径は10~15cmを測り、丸柱と考えられる。断面観察では柱の抜取り痕は確認できなかった。

柱穴埋土から土師器鍋が出土したが、細片のため時期を特定するには至らなかった。屋敷地Cの16世紀代の遺構群と主軸方位が一致することや、建物の主軸方位がSB06・07にほぼ一致することから、16世紀代の建物と考えられる。

SB09 (第14図) 屋敷地Bの中央南寄りで見出した桁行2間(3.7m)、梁行2間(2.9~3.1m)の掘立柱建物である。建物中央の柱穴SP0808は深さが約0.3mとやや規模が小さいが、これを束柱と考えて、平面方形の総柱建物に復元した。建物の主軸方位はN-12°-Eで、床面積は約11㎡である。

柱間寸法は、北辺・南辺の桁行が西から1.8m・1.9m、西辺の梁行が北から1.4m・1.7m、東辺の梁行が北から1.4m・1.5mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は0.4~0.7m、深さは0.4~0.7mと大型である。

柱穴埋土から土師器羽釜、山茶碗が出土した。細片のため時期を特定できなかったが、古瀬戸後IV期の遺物を含むSD127に後出するため、15世紀



第14図 掘立柱建物 SB09 平面図・断面図

後葉頃の建物になると考えられる。

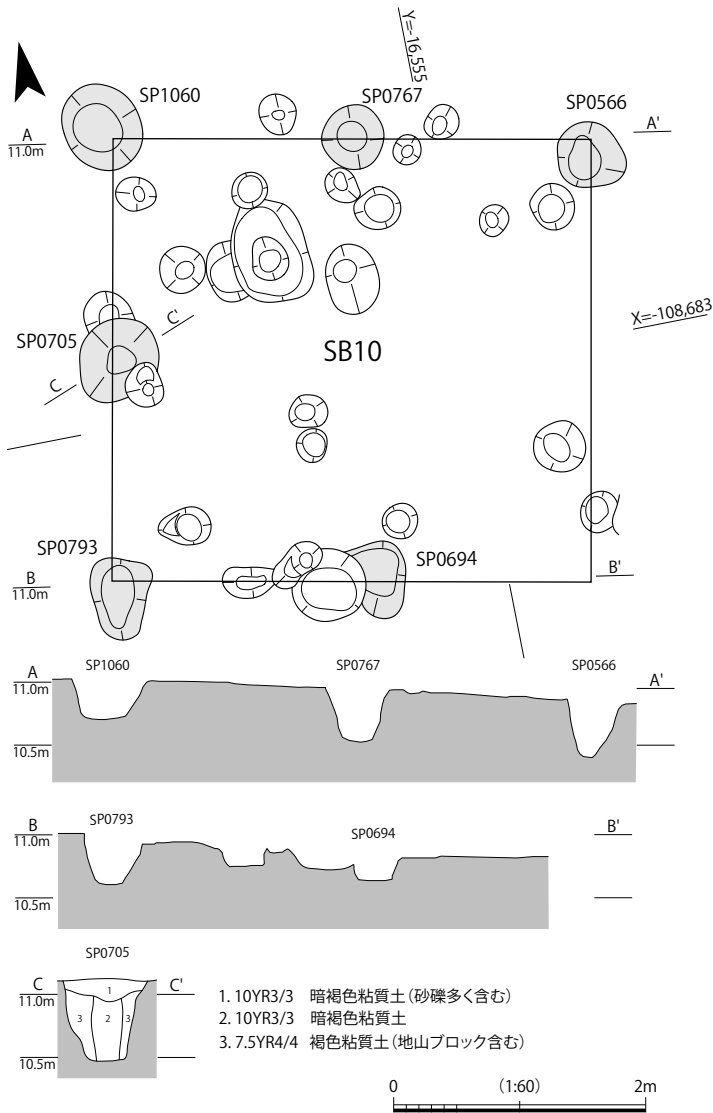
平面形が方形の総柱建物で、掘形規模も大きく掘削深度も深いことから、倉庫状の建物になると考えられる。建物の主軸方位はSB05・10、SA01にほぼ一致する。

SB10（第15図）屋敷地Bの南東側で検出した掘立柱建物で、南東隅柱とその北側の柱穴は検出されなかったが、桁行2間（3.8m）、梁行2間（3.5m）のほぼ正方形の掘立柱建物になると思われる。建物規模は先述のSB09に似るが、中央部で柱穴が検出されなかったため、総柱建物としては復元していない。建物の主軸方位はN -11° -Eで、床面積は約13㎡である。

柱間寸法は北辺の桁行が1.9m等間、南辺の桁行

が2.1m、梁行は西辺が北から1.7m・1.8mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は0.5～0.7mと大型である。検出面からの深さは0.4～0.7mを測る。柱痕跡はSP0705で確認した。柱痕跡の平面形は円形で、直径は約25cmを測る。丸柱と考えられる。SP0705の断面観察では柱の抜き取り痕は確認できなかった。

柱穴埋土から山茶碗・小皿、古瀬戸の卸皿、常滑窯産陶器、陶丸、鉄釘などが出土した。古瀬戸中期の卸皿が出土しており、14世紀前葉から中葉に位置付けられるが、建物の主軸方位はSB05・09にほぼ一致するため、帰属時期は15世紀代まで下る可能性が高い。



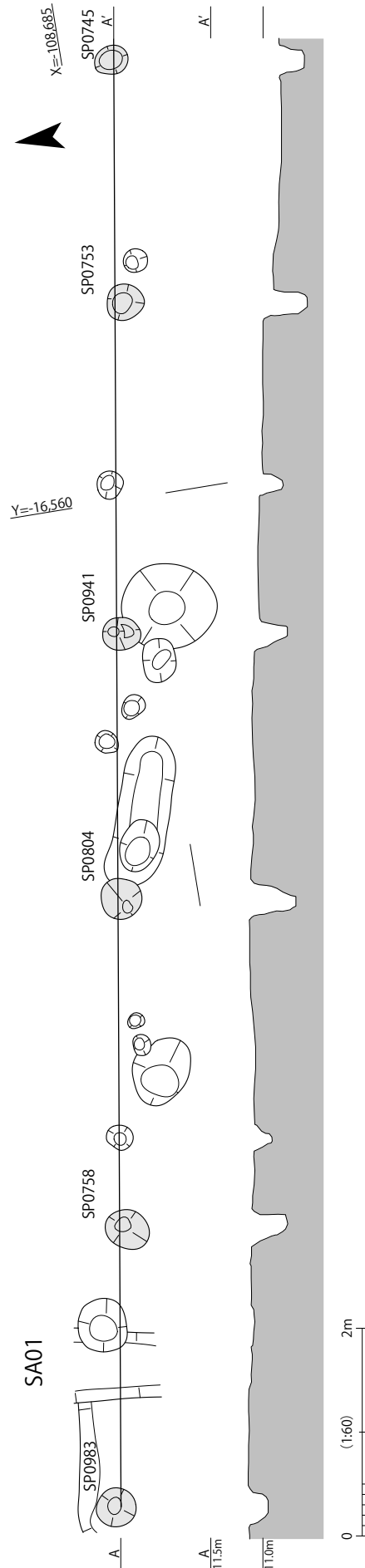
第15図 掘立柱建物 SB10 平面図・断面図

第4節 掘立柱柵列

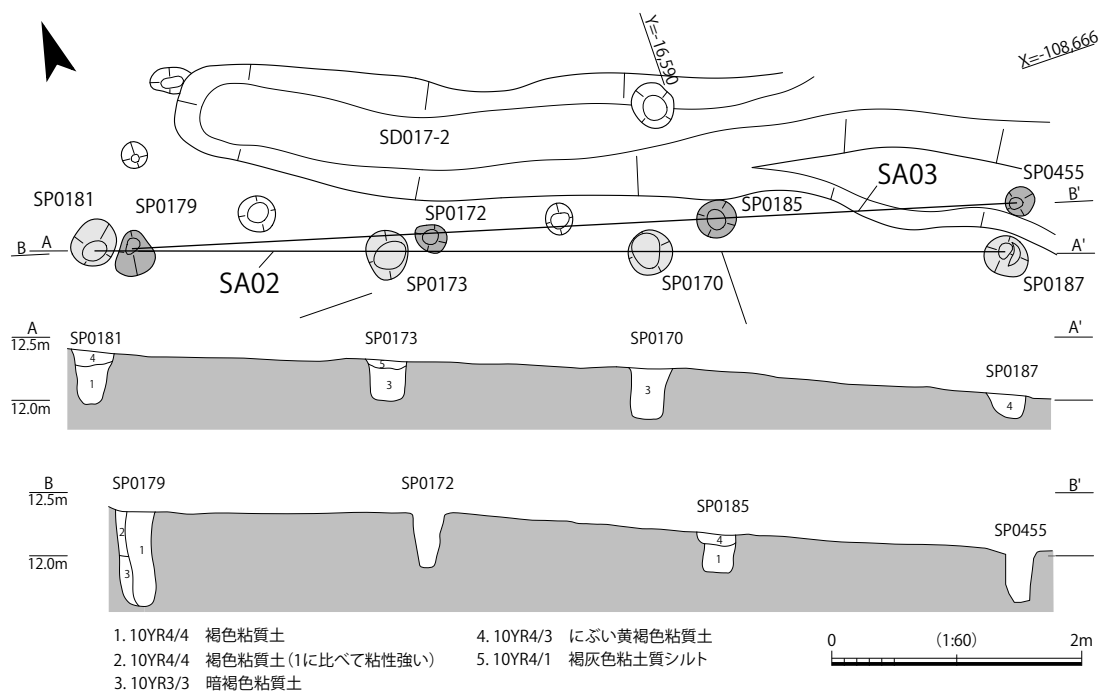
掘立柱柵列は、屋敷地 A で 2 条、屋敷地 B で 1 条の計 3 条検出した。

SA01 (第16図) 屋敷地 B の南側で検出した掘立柱柵列で、東西方向に 5 間分 (約 13.8m) 検出した。柱間寸法は、西から 2.7m・3.0m・2.6m・3.2m・2.3m を測る。柱穴掘形の平面形は円形あるいは楕円形で、規模は 0.4～0.5m、検出面からの深さは 0.2～0.4m を測る。建物主軸方位は N -81° -W である。

柱穴埋土から山茶碗、常滑窯産の陶器片が出土した。いずれも細片のため、時期を特定するには至らなかった。建物の主軸方位は先述の掘立柱建物 SB05・09・10 にほぼ一致しており、これらの建物群と近接した時期の柵列になると考えられる。



第16図 掘立柱柵列 SA01 平面図・断面図



第17図 掘立柱柵列 SA02・03 平面図・断面図

SA02 (第17図) 屋敷地Aの区画溝SD017にほぼ平行する掘立柱柵列で、東西方向に3間分(7.2m)検出した。建物の主軸方位は、N-72°-Wである。柱間寸法は、西から2.3m・2.1m・2.8mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は約0.4m、検出面からの深さは0.2～0.5mを測る。

柱穴埋土から土師器羽釜、山茶碗が出土した。細片のため時期を特定するには至らなかったが、主軸方位は掘立柱建物SB02に一致しており、これと同時期か近接した時期の柵列と考えられる。後述の掘立柱柵列SA03を建替えた際の柵列であろう。

SA03 (第17図) 掘立柱柵列SA02にほぼ重複する位置で検出した掘立柱柵列で、東西方向に3間分(7.0m)検出した。柱間寸法は、西から2.3m・2.3m・2.4mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は0.2～0.4m、検出面からの深さは0.3～0.75mとややばらつきがある。建物の主軸方位はN-74°-Wである。

柱穴埋土から山茶碗と土師器の細片が出土した。いずれも細片のため時期を特定するには至らなかったが、建物の主軸方位は掘立柱建物SB01に一

致しており、SB01と同時期あるいは近接した時期の柵列になると考えられる。

第5節 溝・堀

溝は全部で115条、堀は2条検出した。いずれも護岸施設などを持たない素掘りの溝、堀である。溝には幅が1.5m以上で、屋敷地を囲む区画溝(SD017・025・066・079・119)、屋敷地内の空間を分ける区画溝(SD005・011・012)、近世以降の耕作関連の溝(SD008・009・068・084・085・090・121)、同じく耕作関連の小溝状遺構群などがある。堀には屋敷地Bで検出したSD120とSD126がある。

以下では、特徴的な溝・堀について報告する。

SD002 (第18図) 屋敷地Aの南西隅で検出した北西-南東方向の溝状遺構である。切通しに破壊されているため、詳細な規模は不明だが、検出長7m、幅0.8m以上、深さは0.3mを測る。

埋土は地山ブロックを斑状に含むにぶい黄褐色粘質土で、人為的に埋められたと考えられる。溝底面から近世陶磁器、近世瓦が出土しており、帰属時期は近世と考えられる。溝の性格は不明である。

SD004 (第18図) 屋敷地Aの南西隅で検出した北西-南東方向の溝で、北西部は調査区外に連続し、南半部は湾曲しながら南に延びてSD002に切られる。規模は検出長6.4m、幅0.4～0.9m、深さは0.1～0.3mを測る。断面形は逆台形を呈する。溝底のレベルに顕著な高低差はみられない。

埋土から山茶碗が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。出土遺物と埋土の特徴から中世の遺構と考えられる。溝の性格は不明である。

SD005 (第18図) 屋敷地Aの西側で検出した緩やかに湾曲しつつ南西から北東方向に延びる溝である。北東側は調査区外に連続し、南側はSD060付近で収束する。規模は検出長15.2m、幅0.8～1.4m、深さは0.1～0.2mを測る。溝底のレベルに顕著な高低差はみられない。断面形は浅い碗状を呈する。重複関係からSE001、SK037に先行し、SK028、SD060に後出する。

埋土から山茶碗、古瀬戸後Ⅱ期の盤類、古瀬戸後期の播鉢などが出土した。遺構の帰属時期は14世紀中葉から後葉と考えられる。屋敷地内の小区画溝の可能性が考えられるが、性格は不明である。

SD006 (第18図) 屋敷地Aの西側で検出した東西方向の直線的な溝状遺構で、規模は検出長4.2m、幅1.1～1.4m、深さは約0.05mを測る。溝底のレベルに顕著な高低差はみられない。断面形は皿状を呈する。重複関係からSK037に先行する。埋土から古瀬戸後期の盤類などが出土した。遺構の帰属時期は15世紀代と考えられる。溝の性格は不明である。

SD008・009 (第7・18・19図) 屋敷地Aの中央部で検出した溝で、北東-南西方向の溝SD008と、これにT字状に接続するSD009の二つの溝で構成される。SD008の規模は、検出長22m、幅0.4～0.6m、深さは0.1～0.2mを測る。断面形は碗状を呈する。溝底のレベルは南西側がわずかに低い。SD009の規模は、検出長20.5m、幅0.7～1.1m、深さは0.1～0.2mで、断面形は碗状を呈する。溝底のレベルは東側が約0.8m低い。

SD009下層から江戸時代の瀬戸窯産の播鉢が出土しており、遺構の帰属時期は江戸時代と考えられる。

調査前の耕地段差(畑地)と同じ位置に掘削されていることから、耕作関連の排水溝と考えられる。SD009に直交する南北方向の溝SD068、屋敷地Cで検出した溝SD084・085・090・121も同様な時期・性格の溝と考えられる。

SD011・012 (第19図) 屋敷地Aの中央部で検出した平面L字状を呈する溝で、南西-北東方向のSD011と、これに直交する北西-南東方向のSD012の二つの溝で構成される。両溝に重複関係はみられず、接続部の溝底レベルや埋土も酷似するため、一連の溝と判断した。

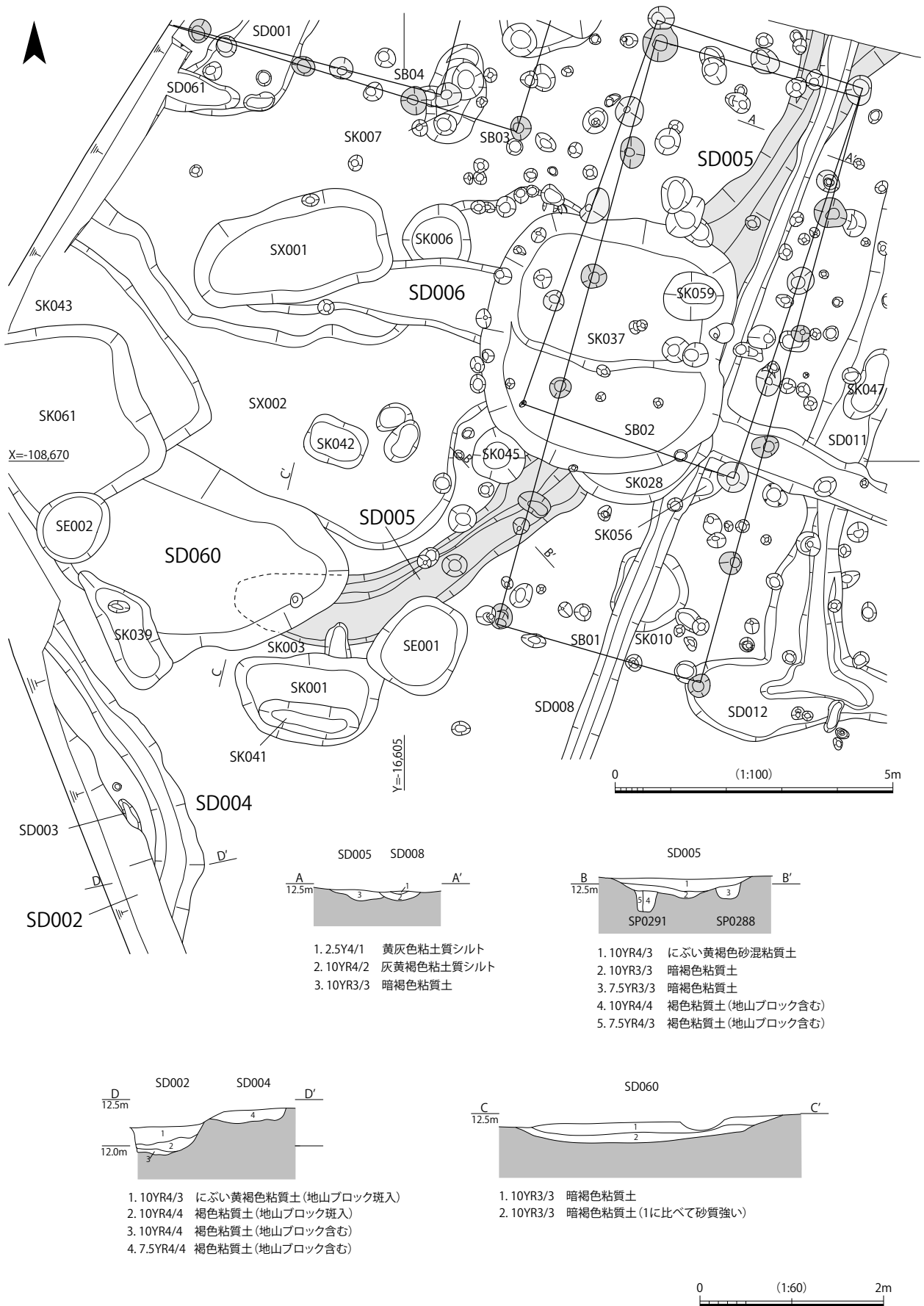
規模は南北11.0m、東西10.8m、幅0.6～1.5m、深さは0.1～0.3mを測る。SD011の溝底レベルは北側に比べて南側が15cm程低く、SD012の溝底レベルは西側に比べて東側が約30cm低いことから、雨水・汚水などは、北→南→東に向けて排水されたと考えられる。断面形は碗状あるいは皿状を呈する。SD011の主軸方位はN-14°-Eである。

埋土から山茶碗の細片の他、常滑窯産の甕、古瀬戸の縁釉小皿などが出土した。縁釉小皿は古瀬戸後Ⅲ期の15世紀前葉に位置付けられるが、掘立柱建物SB01に伴う溝と考えられるため、遺構の帰属時期は15世紀後葉まで下る可能性が高い。

溝の性格としては、SD011が掘立柱建物SB01の東側柱筋に平行するため、SB01に伴う雨落溝、もしくは排水溝の可能性が高い。また、SD011を境に溝の東側で柱穴などの遺構が希薄になることから、屋敷地Aの空間を分ける小区画溝の性格も併せ持つと考えられる。溝の東側は居住域とは異なる空間利用が行われたのであろう。畑などの耕作地や庭などに利用されたのかもしれない。

溝は一度掘り直されており、SB02の構築を機に掘り直された可能性がある。なおSD012西端とSB01南東隅柱に重複した箇所がみられるが、SD012西端は明確な掘り込みが確認できず緩やかに収束することから、この部分は溝の溢れと考えておきたい。

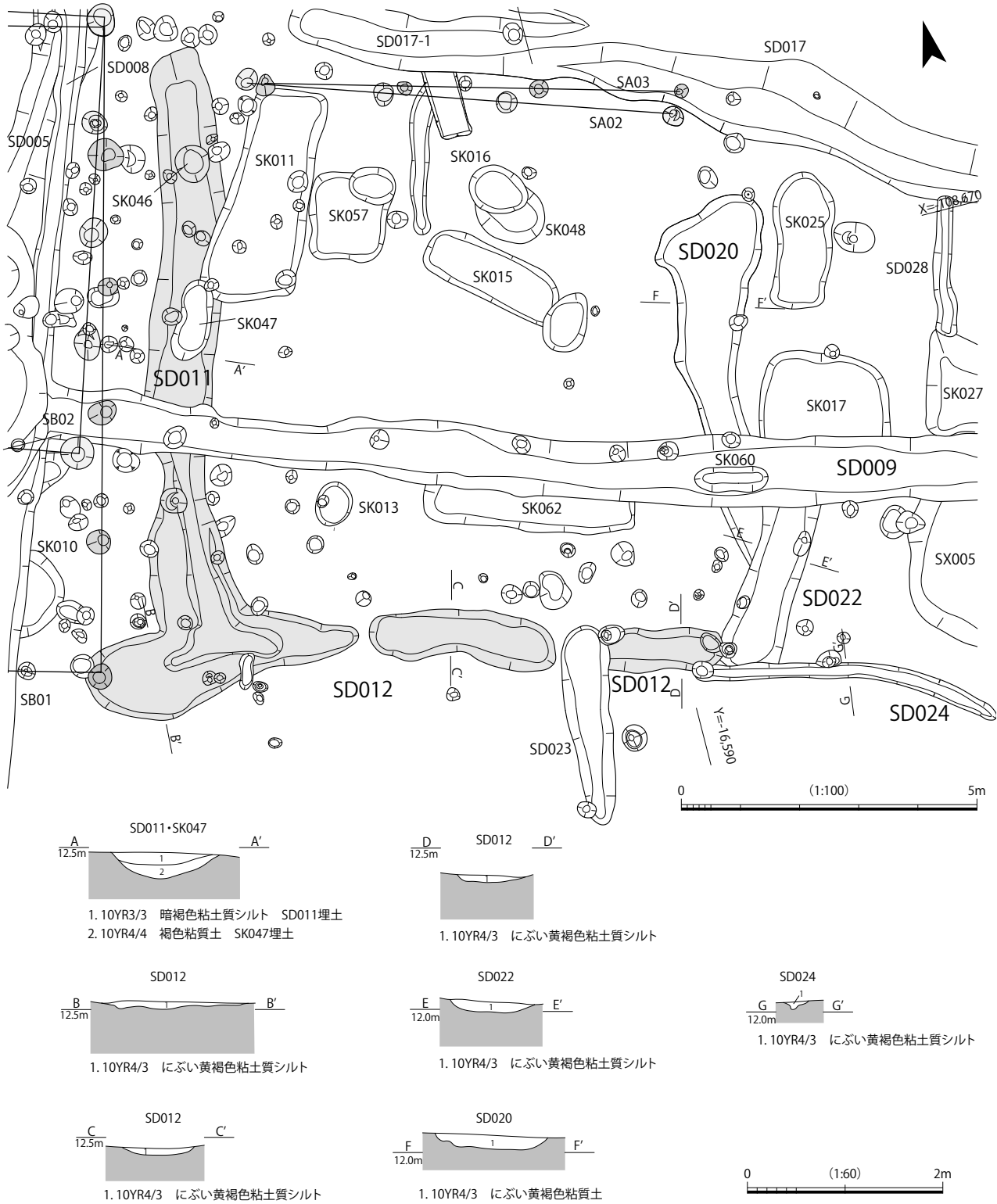
SD017・025・066 (第7・20図) 屋敷地Aの北辺と東辺を画する区画溝で、北西-南東方向のSD017と、SD017の南東から蛇行しつつ南北方向に延びるSD025、またSD017の中程から北に



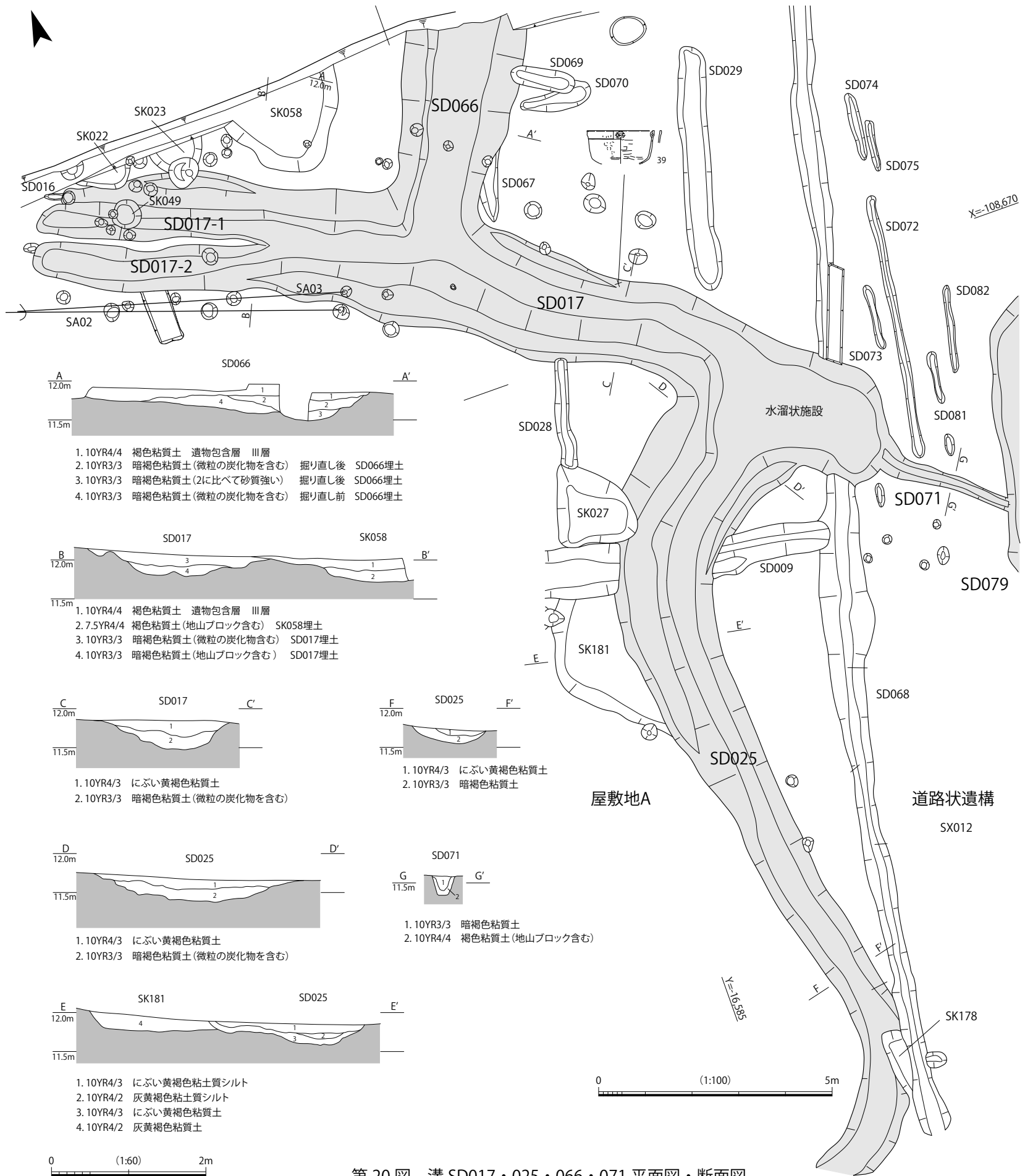
第 18 図 溝 SD002・004・005・008・060 平面図・断面図

延びる SD066 の三つの溝で構成される。SD025 が蛇行するのは、後述する SD079 と同様、地形に沿って掘削されたことに起因するのであろう。溝同士で明確な切り合い関係は認められず、接続部の溝

底レベルや埋土も酷似するため一連の溝と判断した。なお、土橋は確認できなかったが、SD017 の北西端部で溝が途切れる箇所があるため、ここが屋敷地 A の出入口の可能性が高い。



第19図 溝 SD 011・012・020・022・024 平面図・断面図



第20図 溝SD017・025・066・071平面図・断面図

SD017の規模は検出長18.6m、幅1.8～2.4m、深さ0.2～0.4m、SD025の規模は検出長17.4m、幅0.9～3.0m、深さ0.2～0.4m、SD066の規模は検出長4.5m、幅1.8～2.6m、深さ約0.4mを測る。断面形は碗状、あるいは片側が浅い碗状を呈する。

溝底のレベルは概ね地形に沿って傾斜しており、雨水などはSD017では西から東、SD025とSD066では南から北に流れたと考えられる。溝底のレベルからみて、SD017とSD025の雨水・汚水はSD017の南東端に集中すると考えられるが、この南東端の底面レベルは周囲に比べて15cm程深く掘られて土坑状を呈しているため、水溜り施設を兼ねていた可能性が高い。また、この東側には、水溜り施設と区画溝SD079を繋ぐ形で、溝SD071が接続しており、溝底レベルが水溜り施設より約10cm高いことから、一定水量を超えた雨水・汚水はSD071を介してSD079側に流れたと考えられる。

各溝は少なくとも一度掘り直されており、SD017の北西端で掘り直し前後の溝を検出した(SD017-1・2)。埋土の識別が難しく、断面観察でも新旧関係を明確に区別できなかったが、検出時の印象としては、南側のSD017-2が掘り直し前、北側のSD017-1が掘り直し後の溝の可能性が高い。ただし、出土遺物に大きな時期差は認められなかった。SD025においても掘り直し前後の溝を区別できなかったが、溝の北半部と南半部で明らかに溝幅が異なることや、溝の北西部で再掘削時に掘り残された溝がテラス状に残存することから、溝の東縁を中心に掘り直されたと考えられる。SD066では断面観察において溝の東縁を中心に掘り直されていることが分かった。

出土遺物として、SD017から土師器皿、土師器半球形内耳鍋、山茶碗・小皿、常滑窯産の片口鉢Ⅱ類、鉄滓などが出土した。SD025からは土師器皿、灰釉陶器の椀、猿投窯産の山茶碗・広口壺、常滑窯産の片口鉢Ⅱ類、古瀬戸の平碗・瓶子・播鉢、SD066からは土師器鍋・羽釜、山茶碗、古瀬戸の卸皿・縁釉小皿などが出土した。

時期的には10世紀前葉から16世紀後半までの幅広い時期の遺物を含むが、溝が機能していた時期の遺物としては、古瀬戸後Ⅰ期の平碗、同Ⅳ期

の瓶子、同Ⅳ期新段階の平碗・播鉢、15世紀後葉の半球形内耳鍋・常滑窯産の片口鉢Ⅱ類などがあり、出土点数や出土割合からみてその中心は15世紀代にある。最も新しい時期の遺物として、16世紀後半の土師器皿がある。以上の出土遺物から、これらの区画溝は概ね14世紀中頃に掘削され、掘り直しを含めて16世紀前葉頃まで機能したと考えられ、16世紀後半頃に埋没したと思われる。

SD020 (第19図) 屋敷地Aの中央部で検出したややいびつな南北方向の溝で、規模は検出長6.2m、幅0.7～1.8m、深さは0.05～0.2mを測る。溝底のレベルに顕著な高低差はみられず、断面形は皿状を呈する。重複関係からSD022・SD009に先行する。

埋土から山茶碗が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。出土遺物や埋土の特徴から中世の遺構と考えられる。溝の性格は不明である。

SD022 (第19図) 屋敷地Aの中央部で検出した南西-北東方向の直線的な溝で、規模は検出長3.0m、幅0.9～1.0m、深さは約0.1mを測る。溝底のレベルに顕著な高低差はみられず、断面形は皿状を呈する。重複関係からSD024に後出する。

埋土から山茶碗の他、15世紀代の土師器内彎形羽釜が出土した。溝の性格は不明である。

SD024 (第19図) 屋敷地Aの中央部で検出した北西-南東方向の溝で、東半部は緩やかに彎曲しつつ南東方向に延びる。規模は検出長5.1m、幅0.3m、深さは0.1mを測る。溝底のレベルは南東側が10cm低い。断面形は碗状を呈する。

溝の西端から内面に漆が付着した山茶碗が出土した。尾張型山茶碗第8型式期に相当する製品で、13世紀後葉から14世紀前葉に位置付けられる。重複関係からSD022・012に先行する。溝の性格は不明である。

SD060 (第18図) 屋敷地Aの南西隅で検出した溝状遺構で、不整形な土坑になる可能性もあるが、底面のレベルが東側に向けて低くなることから、溝状遺構と判断した。規模は検出長5.3m、最大幅3.2m、深さは最大で約0.2mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土から製塩土器、古瀬戸後Ⅰ期の平碗が出土した。

遺構の帰属時期は14世紀中葉と考えられる。重複関係からSD005に先行する。溝の性格は不明である。

SD071 (第20図) 道路状遺構SX012の北側で検出した北西-南東方向の溝で、SD017南東部の水溜状施設と区画溝SD079に接続する。規模は検出長2.9m、幅0.3～0.75m、深さは約0.2mを測る。断面形は逆台形を呈する。

溝底のレベルに顕著な高低差はみられないが、水溜状施設の底面より約10cm高いことから、水溜状施設で溢れた雨水・汚水などは、SD071を介してSD079側に排水されたと考えられる。

埋土から尾張型山茶碗第7型式の山茶碗、常滑窯産の甕が出土した。溝の規模からして長期間機能したとは考えにくく、水捌けを良くするために一時的に掘削された溝の可能性もあるが、断面観察で掘り直しの痕を確認した。帰属時期はSD025・079の機能した時期と同様、14世紀中頃から16世紀前葉の間と考えられる。

道路状遺構SX012が南北に見られるため、上部に蓋板を設置するなどして、暗渠溝として利用されたと推測する。

SD079 (第21図) 屋敷地Bの西辺を画す区画溝である。蛇行しつつ南北方向に延びる溝で、溝の北端はSD101付近で途切れており、南側は切通しSX013に切られるためその先の行方は不明である。平面形が蛇行するのは、SD025と同様、地形に沿って掘削したことに起因するであろう。SD079北端とSD119西端の間には幅5m程の空閑地がみられ、屋敷地Bの出入口の可能性が高い。

規模は検出長22.7m、幅は1.0～2.6mを測る。溝は西側斜面を掘り込んで平坦面を造出した後に掘削されており、検出面からの深さは最大で0.8mを測る。溝底のレベルに顕著な高低差はみられない。断面形は逆台形状もしくは片側が傾斜の緩い碗状を呈する。

溝は少なくとも一度掘り直されており、溝の南半部では西縁に、溝の北東部では東縁にテラス状を呈する箇所がみられるが、これは掘り直し後の溝の一部と考えられる。埋土の識別が難しく、重複関係が把握できたのはA-A'断面のみである。このため他の断面図では、掘り直し後の溝の立ち上

がりを図として記録できていない。

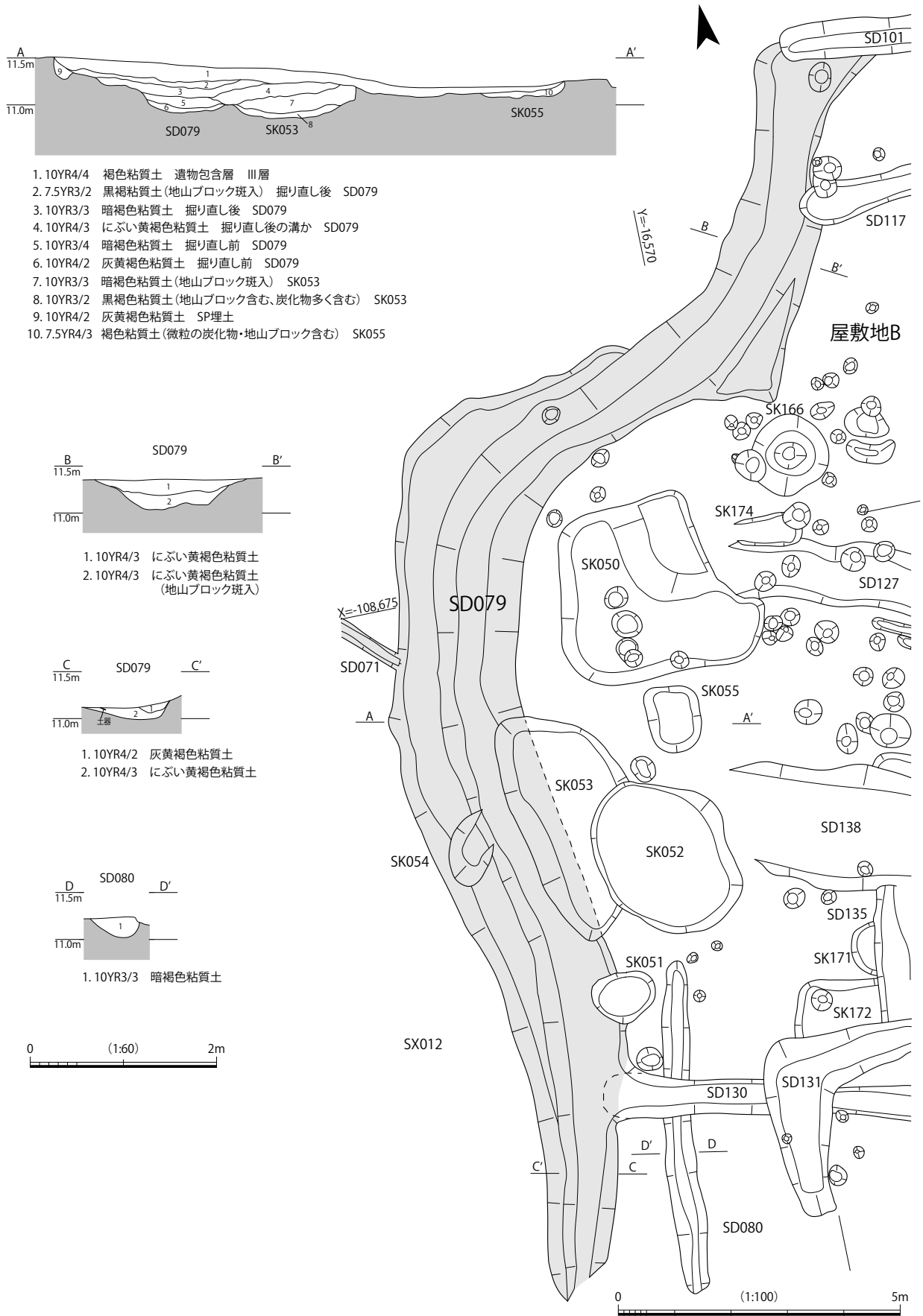
出土遺物には土師器皿、土師器羽釜・内耳鍋・伊勢型鍋、山茶碗・小皿・小碗・片口鉢I類・四耳壺、常滑窯産の甕・羽釜、古瀬戸の平碗・小鉢・瓶子・卸目付大皿、瓦質土器の風炉、中国産青磁蓮弁文碗、大窯期の播鉢、加工円盤、製塩土器などがある。実に様々な時期の遺物が含まれており、溝の機能した時期を想定するのは難しいが、掘り直し前の溝の遺物には、瓦質土器の風炉、古瀬戸後期の小鉢、古瀬戸後IV期新段階の平碗などがあり、14世紀中葉から15世紀末までの遺物が多く含まれる。一方、掘り直し後の溝からは、大窯第1段階の播鉢、16世紀代の土師器内耳鍋などが出土しており、その中心は16世紀代にある。

以上から、掘り直し前のSD079は概ね14世紀中葉から15世紀代に機能していたと思われ、その後何度か掘り直しが行われ、16世紀前葉頃まで機能したと思われる。掘り直し後の溝の最上層から近世初頭の土師器灯明皿が出土していることから、この頃には完全に埋没したと考えられる。

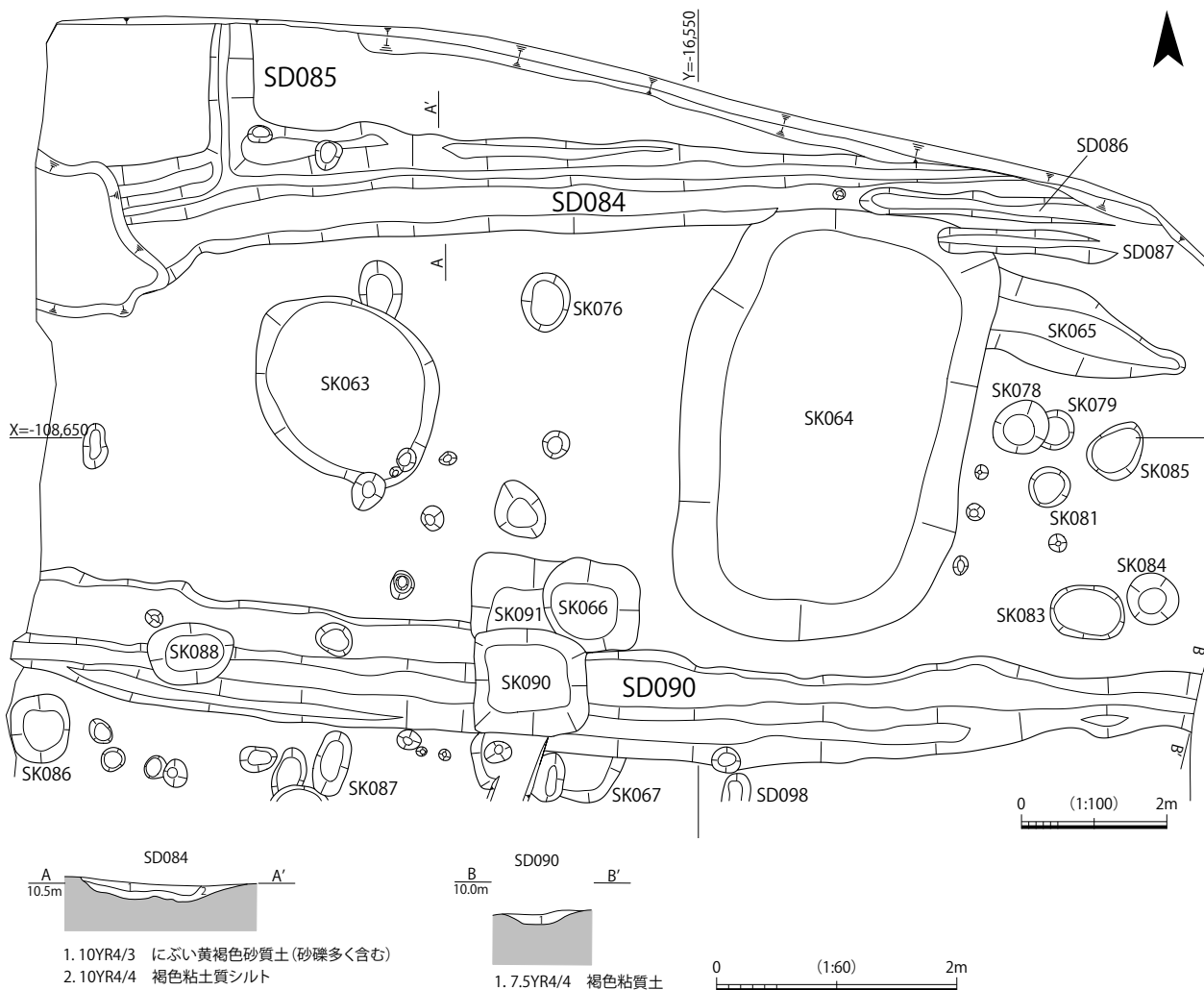
なお、溝全体を通して、平安時代末から鎌倉時代にかけての遺物も一定量出土しており、この状況は屋敷地Aの区画溝SD017・025・066とも似た状況を呈している。これについて現段階で明確な説明は思いつかないが、室町時代の区画溝が開削される以前に、前段階の区画溝が存在した可能性も考えられよう。

SD084・085 (第22図) 屋敷地Cの北側で検出した直線的な溝で、東西方向のSD084と、これにT字状に接続する南北方向のSD085の二つの溝で構成される。SD084の東西端は調査区外に位置するため、その先の行方は不明である。

SD084の規模は、検出長12.6m、幅0.9～1.7m、深さ約0.3m、SD085の規模は検出長1.7m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。SD084の溝底のレベルは概ね地形に沿っており、雨水などは西から東に流れたと考えられる。SD085の溝底レベルは南側に比べて北側が低いことから、雨水などは南から北に流れたと考えられる。断面形はいずれも逆台形状もしくは碗状を呈する。SD085の主軸方位はN-88°-Wである。



第21図 溝SD079・080 平面図・断面図



第 22 図 溝 SD084・085・090 平面図・断面図

SD084 から 18 世紀代の瀬戸登窯期の陶器が出土した。帰属時期は江戸時代中期と考えられる。調査前の耕地段差（畑地）とほぼ同じ位置に掘削されていることから、耕作関連の排水溝と考えられる。

SD090（第 22 図） 屋敷地 C の中央部で検出した東西方向の直線的な溝で、東西端が調査区外に位置するため、その先の行方は不明である。

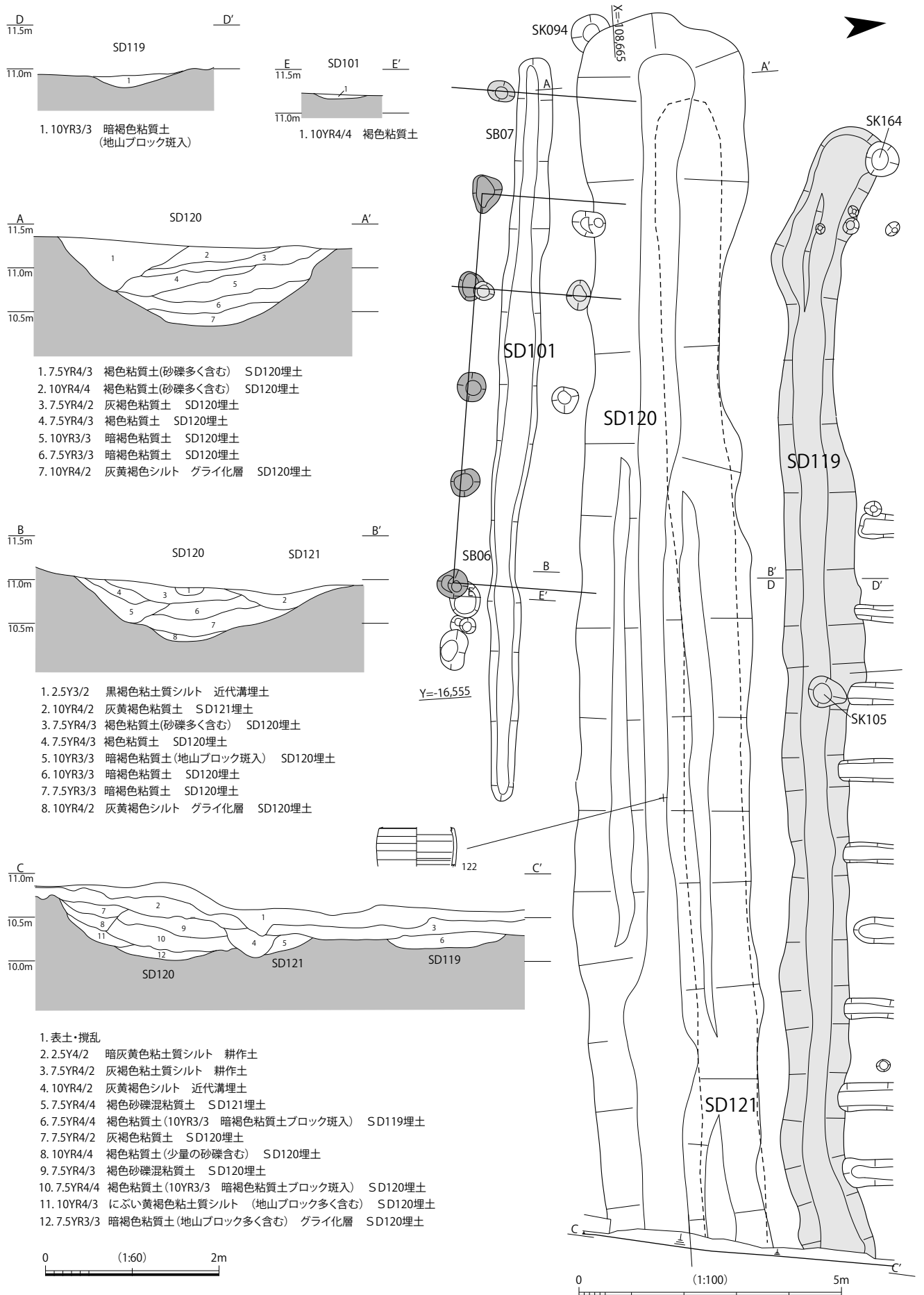
規模は検出長 16.4m、最大幅 1.7m、深さは最大で約 0.3m 測る。溝底のレベルは東側が約 1m 低く、雨水などは西から東に流れたと考えられる。断面形は碗状もしくは皿状を呈する。断面観察で掘り直しの痕を確認した。主軸方位は N-88° -W で、先述の SD084 と一致する。

溝底から 16 世紀代の瓦質土器の鍋、18 世紀代

の瀬戸登窯期の播鉢が出土した。出土遺物から帰属時期は江戸時代中期と考えられる。調査前の耕地段差（畑地）とほぼ同じに位置に掘削されていることから、先述の SD084・085 と同様、耕作関連の排水溝と考えられる。

SD101（第 23 図） 屋敷地 B の北側で検出した東西方向の直線的な溝である。規模は検出長 14.1m、幅 0.4～0.8m、深さは約 0.2m を測る。溝底のレベルは西側に比べて東側が約 20cm 低い。断面形は皿状を呈する。主軸方位は N-84° -W である。

埋土から古瀬戸後期後半の小皿が出土したが、重複関係から SD079 に後出し、近世の小溝状遺構群と主軸方位が近似することから、帰属時期は近世の可能性が高い。耕作関連の溝であろう。



第23図 溝SD101・119・121、堀SD120 平面図・断面図

SD110 (第24図) 屋敷地Bの南東部で検出した北西-南東方向の溝である。溝の北西端はSK115付近で途切れて、南東端は調査区外に連続するためその先の行方は不明である。規模は検出長5.1m、幅0.7～1.1m、深さは最大で0.2mを測る。溝底のレベルは西側に比べて東側が約20cm低く、断面形は皿状を呈する。

埋土から山茶碗、常滑窯産陶器などが出土したが、いずれも細片のため詳細な時期は不明である。重複関係から15世紀前葉の遺物を含むSK115に後出し、15世紀後葉の掘立柱建物SB05に先行する。溝の性格は不明である。

SD119 (第23図) 屋敷地Bの北端で検出した東西方向の直線的な溝で、屋敷地Bの北辺を画す区画溝と考えられる。溝の西端は北西側に延びた後に緩やかに収束し、東端は調査区外に位置するためその先の行方は不明である。SD119西端とSD079北端との間に幅5m程の空地がみられ、屋敷地Bの出入口の可能性が高い。

規模は検出長21.5m、幅0.9～1.5m、深さは最大で約0.3mを測る。溝底のレベルは西側に比べて東側が約1m低く、雨水などは東側に流れたと考えられる。断面形は浅い碗状を呈する。断面観察では明確な掘り直しの痕は確認できなかったが、溝の上部が削平されているため確認できない可能性もある。主軸方位はN-87°-Wである。

埋土から古瀬戸後期の平碗、常滑窯産の陶器片などが出土した。出土遺物から帰属時期は14世紀中葉から15世紀代と考えられる。

SD120 (第23図) 屋敷地Bの北側で検出した東西方向の直線的な堀である。堀の西端部はSK092付近で収束し、東側は調査区外に連続するためその先の行方は不明である。規模は検出長23.5m、幅2.4～3.3m、深さは最大で約1.1mを測る。溝底のレベルは西側に比べて東側が約40cm低く、雨水・汚水などは西から東に向けて流れたと考えられる。断面形は碗状を呈する。断面観察で複数回の掘り直しの痕を確認したが、掘り直し前後の埋土が酷似しており、平面的には認識できなかった。

埋土は暗褐色あるいは褐色を主体とした粘質土で、堀底部分のみ粘性の強い暗褐色粘質土と灰黄褐

色シルトのグライ化層が認められ、一時期滞水環境にあったことが窺える。これより上位の層に滞水した状況は認められないため、空堀と考えられる。検出した範囲内で土塁は確認できなかった。重複関係から掘立柱建物SB06・07に後出し、後述する近世の溝SD121に先行する。主軸方位はN-85°-Wである。

出土遺物には土師器皿・羽釜・内耳鍋、山茶碗・小皿、中国産青磁蓮弁文碗、古瀬戸の天目茶碗・丸皿、古瀬戸後期末から大窯第1段階の桶、常滑窯産の甕などがあり、13世紀中頃から16世紀代まで幅広い時期の遺物が含まれるが、その中心は16世紀代である。

以上の出土遺物のうち、古瀬戸後期末から大窯第1段階の桶が堀底から出土したこと、最上層で16世紀後葉の土師器皿が出土したこと、また、重複関係から掘立柱建物SB06・07に後出することなどを踏まえると、SD120は概ね16世紀前葉頃に掘削され、その後何度か掘り直しが行われつつ、16世紀後葉頃まで機能したと考えられる。

SD121 (第23図) SD120に重複する東西方向の直線的な溝で、SD120埋没後に主軸を約3度西に偏して掘削されている。溝の西端はSD120の西端にほぼ一致し、東端は調査区外に連続するためその先の行方は不明である。

規模は検出長21.8m、最大幅1.5m、深さは最大で0.3mを測る。溝底のレベルは西側に比べて東側が約50cm低く、雨水などは西から東に向けて流れたと考えられる。断面形は碗状を呈する。断面観察では掘り直しの痕は確認できなかった。主軸方位はN-88°-Wで、先述の江戸時代の溝SD084・090にほぼ一致する。なお、SD120の埋土に非常に酷似しており、平面的に認識するのが困難だったため、図では破線で表示した。

埋土から古代の緑釉陶器、土師器羽釜、大窯第2段階の播鉢、瀬戸登窯期の片口などが出土した。遺構の帰属時期は江戸時代中期から後期と考えられる。

調査前の耕地段差とほぼ同じ位置に掘削されていることから、耕作関連の排水溝と考えられる。

SD126 (第24図) 屋敷地Bの南東で検出した東西方向の直線的な溝状遺構で、規模・断面形から堀と判断した。堀の西端はSK140付近で途切れており、東側は調査区外に連続するためその先の行方は不明である。土塁は確認できなかった。

検出長は4.5m、上部最大幅1.9m、底部最大幅0.3m、深さは約1.0mを測る。堀底のレベルは西側に比べて東側が約15cm低く、雨水などは西から東に向けて流れたと考えられる。断面形はV字状を呈する。主軸方位はN-82°-Wである。

埋土は暗褐色粘質土と黒褐色粘質土で、滞水を示す層は認められなかったため空堀と考えられる。堀底から遺物は出土しなかったが、埋土から14世紀後半から15世紀代の常滑窯産の片口鉢Ⅱ類、古瀬戸後Ⅳ期の播鉢、管状土錘などが出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は14世紀後半から15世紀代と思われる。堀上部から古瀬戸後Ⅳ期の播鉢が出土していることから、15世紀中葉以降に埋没したと考えられる。重複関係から掘立柱建物SB05より古い。

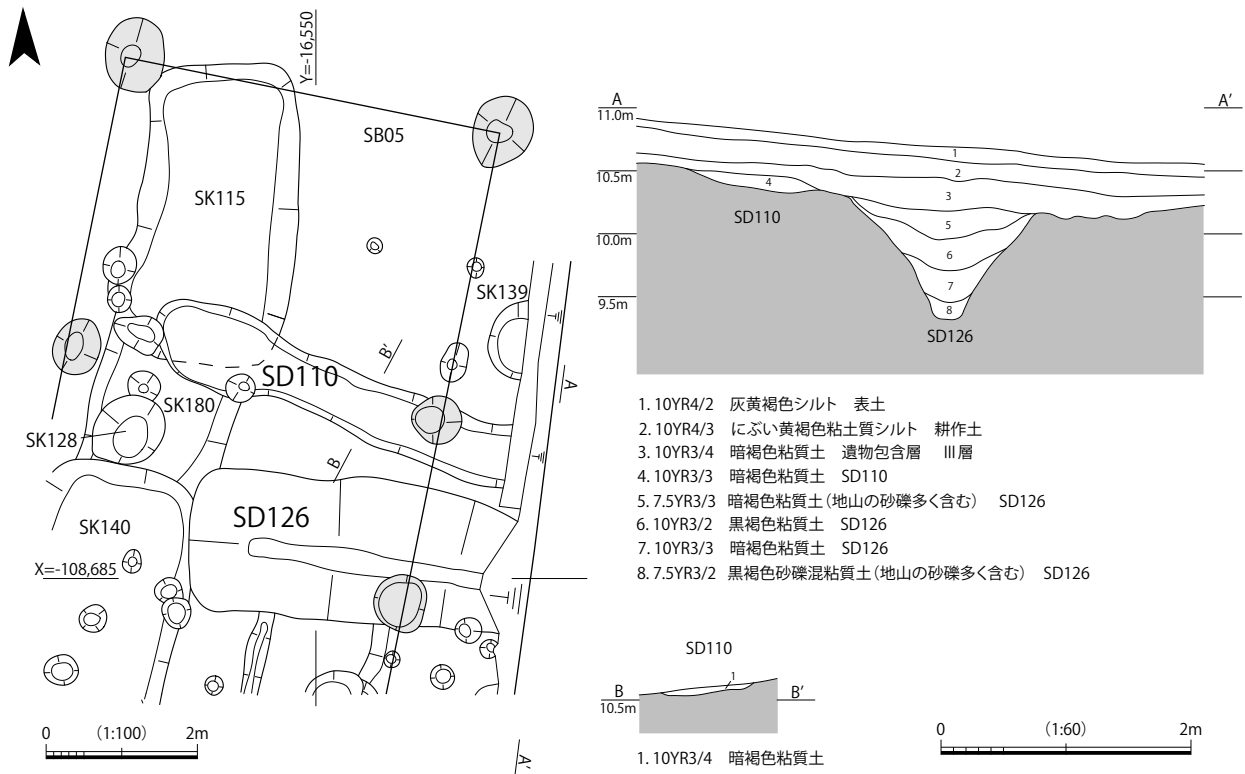
検出範囲が限られており、現段階でどのような性格の堀になるのか不明である。

SD127 (第25図) 屋敷地Bの西側で検出した北西-南東方向の直線的な溝で、北西端は徐々に深さを減じつつSK050付近で収束し、南東端はSK157に切られている。規模は検出長9.3m、幅0.9~1.2m、深さは約0.1mを測る。溝底のレベルは西側に比べて東側が約10cm低い。断面形は皿状を呈する。主軸方位はN-71°-Wである。

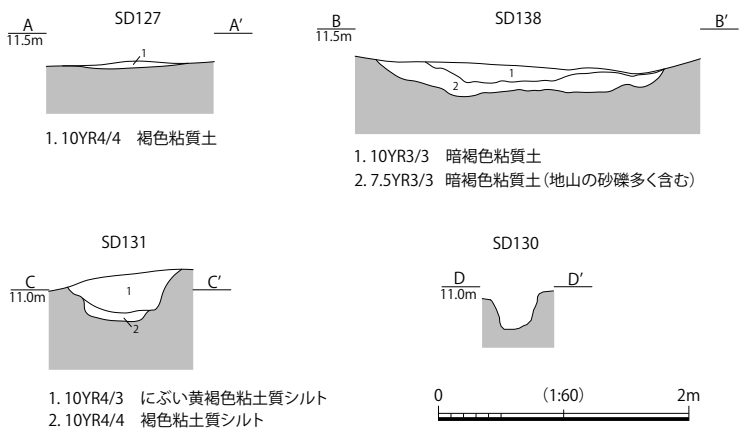
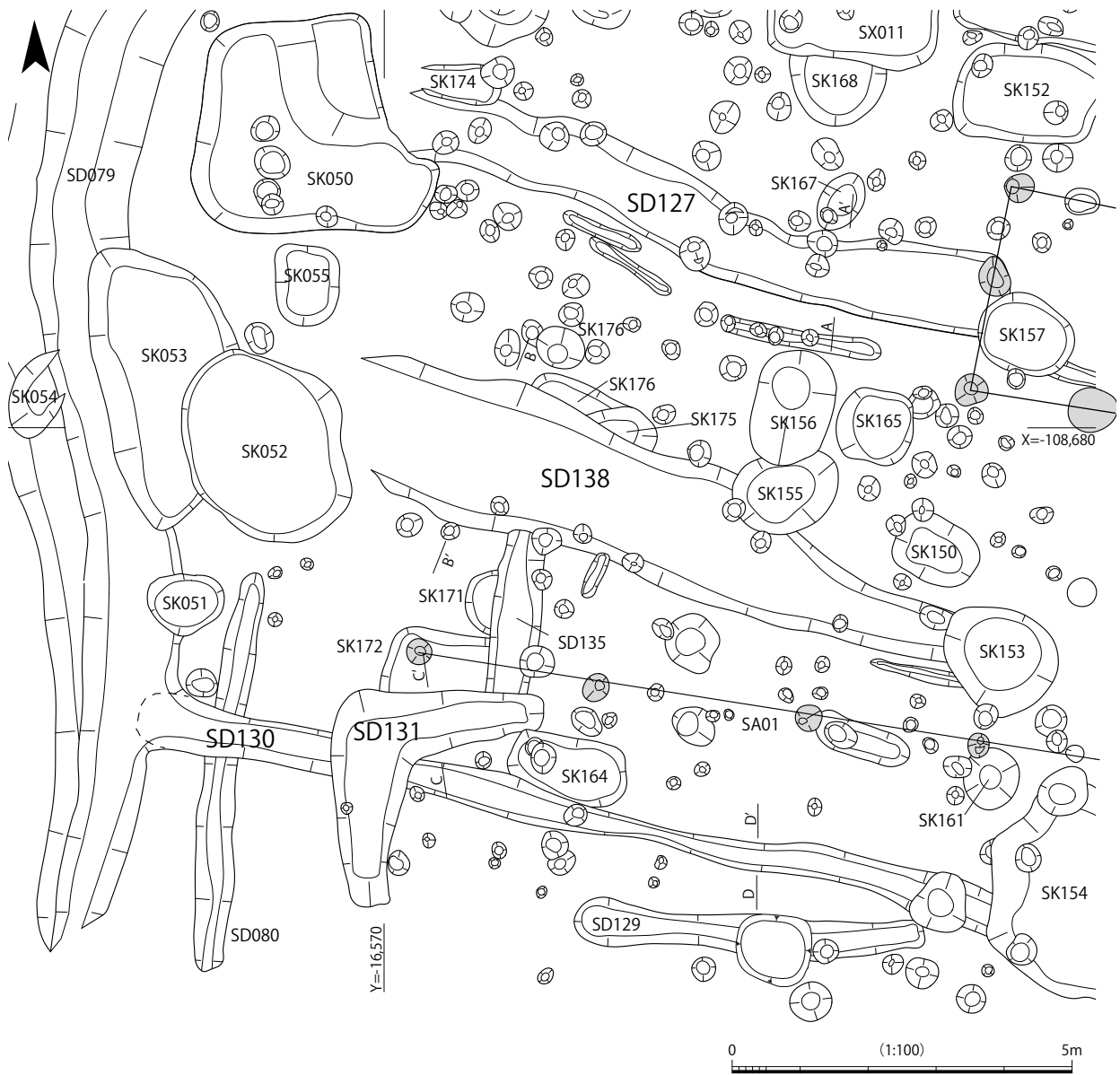
埋土は褐色粘質土で、古瀬戸後Ⅳ期の緑釉小皿、中国産青磁などが出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は15世紀中葉から後葉と考えられる。後述するSD138同様、屋敷地内では区画溝に続いて大きな溝だが、性格は不明である。

SD130 (第25図) 屋敷地Bの南西で検出した北西-南東方向の直線的な溝である。北西端は区画溝SD079付近で途切れ、南東端はSK154に切られている。規模は検出長12.6m、最大幅約0.9m、深さは最大で約0.3mを測る。溝底のレベルは西側に比べて東側が約30cm低い。断面形はU字状を呈する。主軸方位はN-77°-Wである。

埋土は暗褐色粘質土で、詳細な時期は不明だが細片化した山茶碗が出土した。SD079との新旧関係は明確でないが、検出時の印象としては、SD130が先行する可能性が高い。溝の性格は不明である。



第24図 溝SD110、堀SD126 平面図・断面図



第25図 溝SD127・130・131・138 平面図・断面図

SD131 (第25図) 屋敷地Bの南西端で検出した溝状遺構で、重複した二つの溝を一つの溝と誤認した可能性もあるが、底面のレベルが一致し、埋土も酷似するため、一連の溝状遺構と判断した。規模は東西3.1m、南北3.2m、幅は0.6～1.3m、深さは最大で0.45mを測る。断面形は逆台形を呈する。溝底のレベルに顕著な違いは認められない。重複関係からSD130に後出する。

埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトと褐色粘土質シルトの2層で、埋土から古瀬戸後IV期の播鉢が出土した。出土遺物からみて、帰属時期は15世紀中葉から後葉と考えられる。溝の性格は不明である。

SD138 (第25図) 屋敷地Bの南西部で検出した北西-南東方向の直線的な溝で、北西端は徐々に深さを減じつつSK052付近で収束し、南東端はSK153に切られている。規模は検出長9.5m、最大幅2.3m、深さは最大で約0.3mを測る。溝底のレベルに顕著な違いは認められない。断面形は皿状を呈する。主軸方位はN-70°-Wで、先述のSD127にほぼ一致する。

埋土は暗褐色粘質土で、山茶碗の細片が出土した。詳細な時期は不明だが、出土遺物から中世の遺構と考えられる。屋敷地内では区画溝に続いて大きな溝だが、性格は不明である。

小溝状遺構群 (第7図) 主に屋敷地Cの南側と道路状遺構SX012北側の区画で検出した小溝状遺構群である。規模は幅0.2～0.6m、深さは0.05～0.15mを測る。断面形は碗状あるいは皿状を呈する。小溝状遺構群には、溝幅が20cm前後のもの(SD072～074・075・081など)と溝幅が40～60cm前後の幅広いもの(SD076・077・083・091・092・094～100)があり、前者は水田耕作などの耕作痕、後者は等間隔で同一方向に連続することから、畑の耕作痕の可能性が高い。

小溝状遺構群の主軸方位は、近世の溝SD068・090・101などに一致しており、中世遺構にみられない締まりの弱い黒褐色土を埋土にすること、また、SD072から江戸時代の瀬戸窯産の陶器が出土していることなどから、帰属時期は概ね江戸時代と考えられる。江戸時代以降に周辺が耕地化していった際に掘られた小溝群であろう。

第6節 竪穴状土坑・土坑

竪穴状土坑・土坑は129基検出した。大小様々な規模・性格の土坑があり、これらの中には、竪穴状土坑と考えられる遺構が13基(SK018・037・043・050・052・061・063・064・115・140・154・177・181)含まれる。いずれも底面に柱穴を伴わないタイプの竪穴状土坑である。これ以外にも竪穴状土坑が含まれる可能性があるが、その判断は今後の分析に委ねることとして、以下では、今回検出した竪穴状土坑・土坑を遺構番号順に述べる。

SK001 (第26図) 屋敷地Aの南西部で検出した平面隅丸長方形の土坑で、規模は長辺2.6m、短辺1.7m、深さは約0.2mを測る。断面形は片側が傾斜の緩い逆台形を呈する。重複関係からSK041に後出する。

埋土から山茶碗の細片、古瀬戸の盤類が出土した。盤類は古瀬戸後III期の製品で、遺構の帰属時期は15世紀前葉と考えられる。

SK006 (第26図) 屋敷地Aの北西部で検出した平面円形もしくは楕円形の浅い土坑で、規模は直径1.2m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土はにぶい黄褐色粘質土である。重複関係から古瀬戸後期のSD006に先行する。遺物は出土しておらず帰属時期は不明である。

SK007 (第26図) 屋敷地Aの北西部で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長辺1.8m、短辺1.0m、深さは0.2mを測る。断面形は片側が傾斜の緩い碗状を呈する。

埋土は暗褐色粘質土で、山茶碗、常滑窯産の甕が出土した。いずれも細片のため詳細な時期は不明だが、重複関係から掘立柱建物SB04に後出するため、帰属時期は15世紀後半以降と思われる。

SK008 (第26図) 屋敷地Aの北西部で検出した平面不整形な土坑で、規模は長辺2.2m、短辺1.5m以上、深さは約0.4mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は暗褐色粘質土で山茶碗の細片、陶丸などが出土した。重複関係から掘立柱建物SB03に後出する。帰属時期は14世紀中頃以降と考えられる。

SK010 (第26図) 屋敷地Aの中央部で検出した平面楕円形の浅い土坑で、規模は長辺1.5m、短辺1.4m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土はにぶい黄褐色粘質土である。山茶碗の細片が出土したが詳細な時期は不明である。出土遺物から帰属時期は中世と考えられる。

SK011 (第26図) 屋敷地Aの中央北寄りで検出した平面長方形の土坑で、規模は長辺3.7m、短辺1.6m、深さは約0.2mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、山茶碗の細片の他、常滑窯産の片口鉢Ⅱ類が出土した。片口鉢Ⅱ類は常滑窯編年第10型式から11型式期に相当する製品で、帰属時期は16世紀前葉頃と考えられる。遺構の性格は不明である。

SK013 (第26図) 屋敷地Aの中央部で検出した平面円形の土坑で、規模は長辺0.7m、短辺0.6m、深さは約0.2mを測る。断面形はU字状を呈する。

埋土はにぶい黄褐色粘質土で、尾張型山茶碗第5型式期の山茶碗が出土した。帰属時期は12世紀後葉から13世紀前葉と考えられる。

SK015 (第26図) 屋敷地Aの中央北寄りで検出した平面隅丸長方形の土坑で、規模は長辺2.4m、短辺0.9m、深さは約0.2mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、山茶碗の細片が出土した。詳細な時期は不明だが、中世の遺構と考えられる。遺構の性格は不明である。

SK017 (第26図) 屋敷地Aの東側で検出した平面隅丸方形の土坑で、規模は長辺2.2m、短辺1.5m以上、深さは約0.2mを測る。断面形は皿状を呈する。重複関係から溝SD009に先行する。

埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、山茶碗の細片の他、古瀬戸後Ⅲ期の小鉢が出土した。帰属時期は15世紀前葉と考えられる。性格は不明である。

SK018 (第26図) 屋敷地Aの東側で検出した方形竪穴状土坑で、長辺2.6m、短辺2.3m、深さは約0.4mを測る。土坑の北辺中央に階段状のテラスが設けられる。断面形は逆台形状を呈する。底

面は平坦である。底面でピットを2基検出したが、この土坑に伴うものとは考えにくい。

埋土はにぶい黄褐色粘質土と褐色粘質土で、埋土から棒状土製品、尾張型山茶碗第8型式の山茶碗、同第7型式の小皿などが出土した。遺構の帰属時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

SK025 (第27図) 屋敷地Aの北東部で検出した平面長方形の土坑で、規模は長辺2.3m、短辺1.0m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土は褐色粘質土で、山茶碗、古瀬戸の天目茶碗が出土した。いずれも細片のため詳細な時期は不明だが、出土遺物から帰属時期は中世と考えられる。遺構の性格は不明である。

SK027 (第27図) 屋敷地Aの北東部で検出した平面不整形な土坑で、規模は長辺1.8m、短辺1.7m、深さは約0.3mを測る。断面形は逆台形状を呈する。重複関係からSD025に後出する。

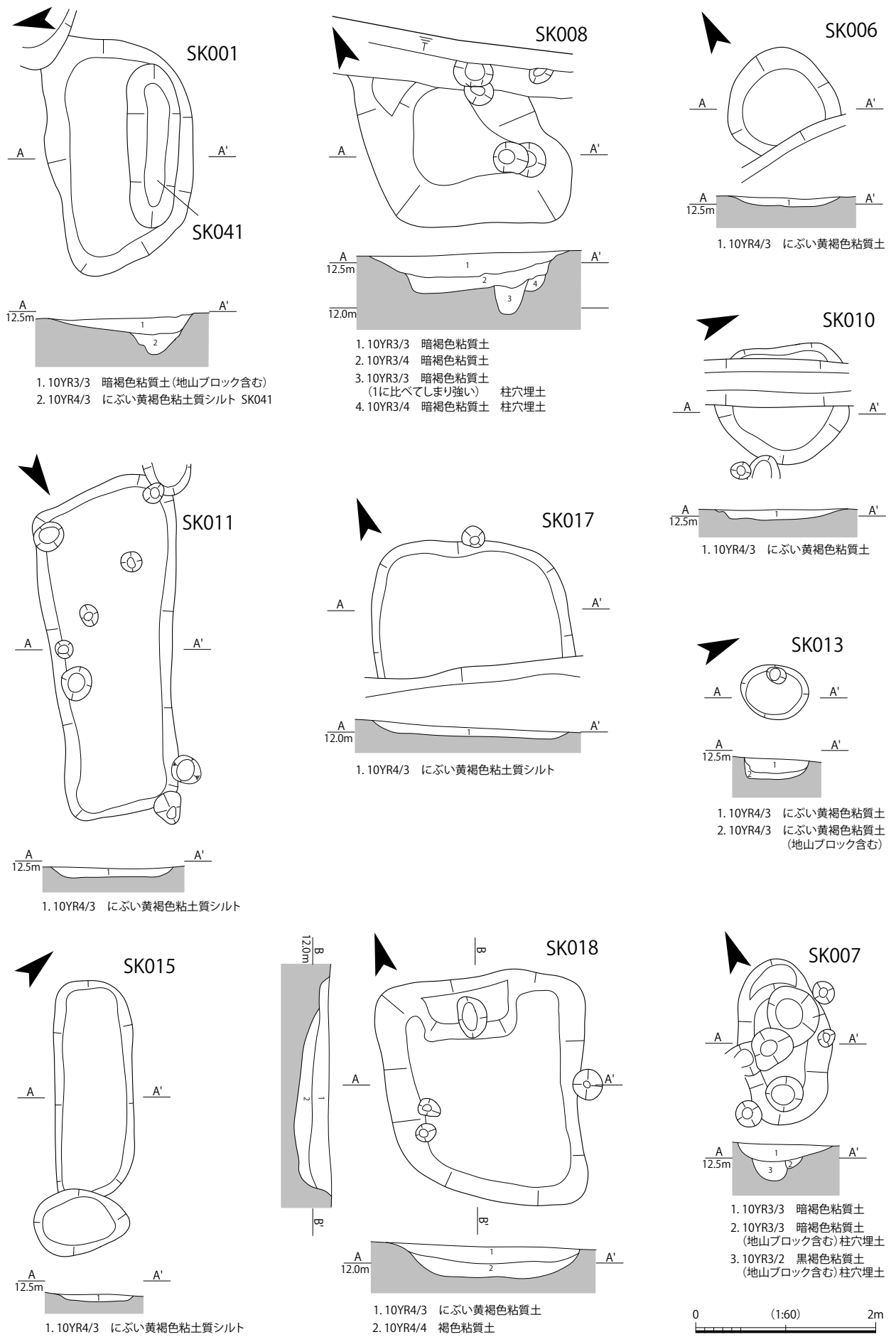
埋土は暗褐色粘質土で、土師器内耳鍋が出土した。細片のため詳細な時期は不明である。SD025に後出することから、遺構の帰属時期は16世紀後葉頃と思われる。

SK028 (第27図) 屋敷地Aの中央西寄りで検出したSK037・SD005に切られる土坑で、規模は長辺2.6m、短辺0.6m以上、深さは約0.3mを測る。埋土は暗褐色粘質土で、底面付近から尾張型山茶碗第9型式の山茶碗が出土した。遺構の帰属時期は14世紀中葉と考えられる。

SK034 (第27図) 屋敷地Aの南東端で検出した平面長楕円形の土坑で、規模は長辺2.2m、短辺1.0m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。重複関係からSK036に後出する。

埋土は褐色粘質土で、古瀬戸後期の合子蓋、山茶碗が出土した。遺構の帰属時期は14世紀後半から15世紀後半頃と考えられる。性格は不明である。

SK035 (第27図) SK034の東側で検出した平面長楕円形の土坑で、規模は長辺3.0m、短辺1.3m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は褐色粘質土で、古瀬戸の小皿を素材とした加工円盤などが出土した。遺構の帰属時期は14世紀代と考えられる。



第26図 土坑 SK001・006～008・010・011・013・015・017・018・041 平面図・断面図

SK037 (第27図) 屋敷地Aの北西部で検出した方形竪穴状土坑で、規模は長辺4.6m、短辺4.5m、深さは約0.6mを測る。断面形は逆台形状を呈する。底面は北側と南側で5cm程の段差がみられ、南側の方が高い。断面観察からこの段差は重複関係によるものではないと判断した。底面で掘立柱建物SB01・02の構成柱穴の他、ピットを9基検出したが、建物としてまとまらないためSK037に伴う柱穴とは考えにくい。覆屋的な建物も確認できなかった。

埋土は主に灰褐色・灰黄褐色粘質土で、土師器羽釜、尾張型山茶碗・小皿、東濃型山茶碗の小皿、融着した山茶碗、古瀬戸の天目茶碗・仏供・折縁中皿・合子蓋・盤類・播鉢、常滑窯産の甕、石硯、被熱した自然石などが出土した。出土遺物のうち、東濃型山茶碗の小皿と古瀬戸折縁中皿の底部外面には花押の墨書が認められる。

出土遺物のうち、山茶碗には尾張型第8型式期から第9型式の製品と東濃型山茶碗大畑大洞新段階の製品が、古瀬戸製品には後Ⅲ期から後Ⅳ期古段階の製品がある。常滑窯の製品は14世紀前半の大甕と、14世紀から15世紀前半の片口鉢がある。底面で出土した古瀬戸後Ⅲ期の折縁中皿・天目茶碗、常滑窯産の片口鉢Ⅱ類の年代観から、遺構の帰属時期は概ね15世紀前葉と考えられる。上層埋土に古瀬戸後Ⅳ期古段階の播鉢が含まれることから、掘立柱建物SB01構築以前の15世紀中頃に埋め戻されたと考えられる。他の時期的に先行する遺物については、埋戻しの際に混入した遺物と考えておきたい。

SK042 (第27図) 屋敷地Aの西側で検出した平面方形の浅い土坑で、規模は長辺1.0m、短辺0.8m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

SK043 (第28図) 屋敷地Aの西端で検出した大型の土坑で、方形竪穴状土坑になる可能性が高い。規模は長辺4.3m以上、短辺2.0m以上、深さは約0.4mを測る。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦で、ピットは検出されなかった。底面で

食物残渣を捨てた貝層(オキシジミ、マガキが主体)を確認した(写真図版26-2)⁽⁵⁾。

埋土は暗褐色粘質土で、時期不明の土師器の細片が出土した。重複関係から14世紀中葉の溝SD060に先行するため、遺構の帰属時期は14世紀前葉から中葉頃と思われる。

SK045 (第27図) 屋敷地Aの西側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長辺約1.0m、短辺0.8m以上、深さは約0.4mを測る。断面形は逆台形状を呈する。重複関係からSK037に先行する。

埋土は主に褐色粘質土で、山茶碗、常滑窯産陶器が出土した。いずれも細片のため詳細な時期は不明だが、遺構の帰属時期は中世と考えられる。

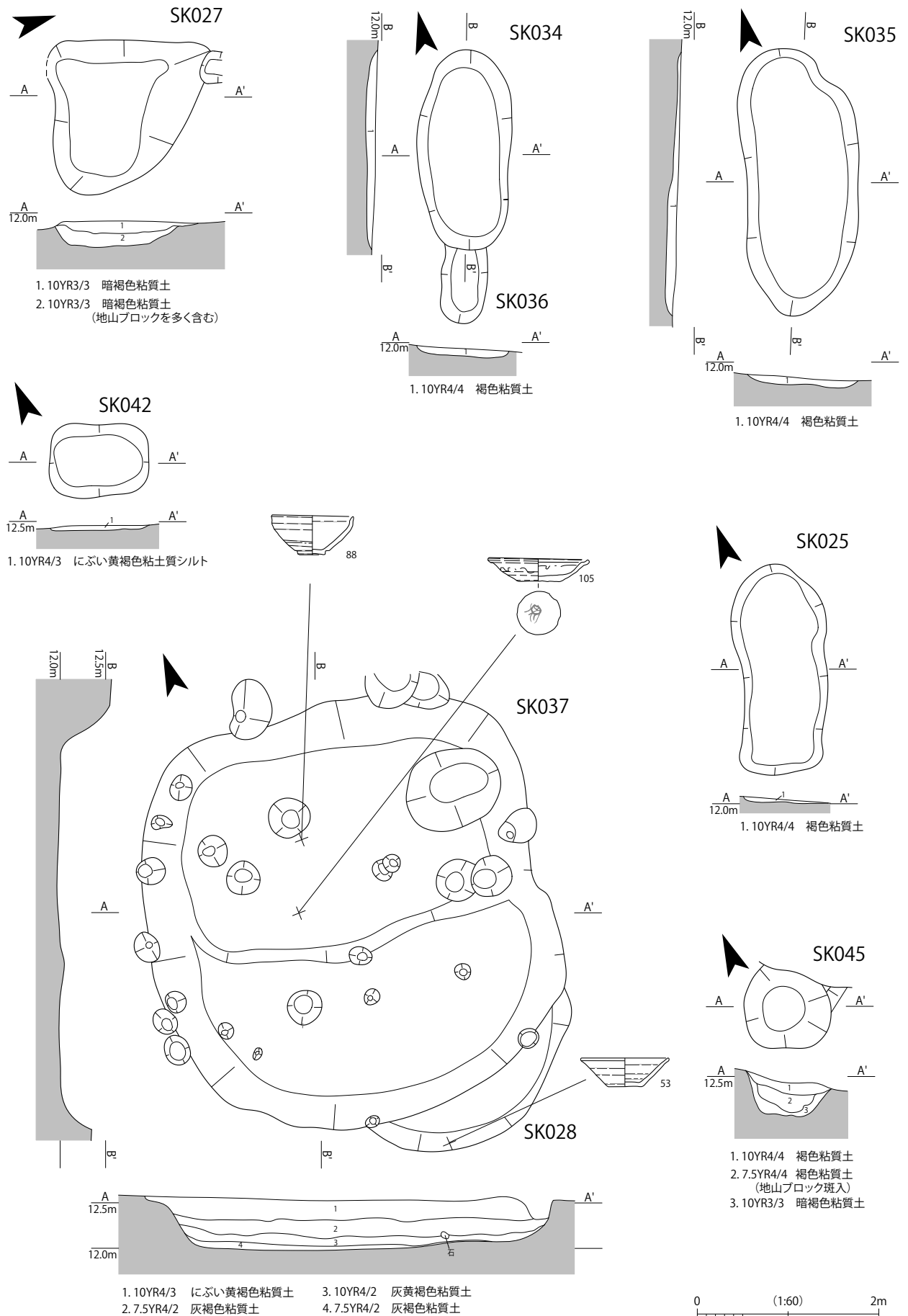
SK050 (第28図) 屋敷地Bの西端で検出した方形竪穴状土坑で、南東部がやや張り出し、北東部に階段状の平坦面が設けられている。規模は長辺3.7m、短辺3.1m、深さは約0.3mを測る。断面形は片側が傾斜の緩い逆台形状を呈する。底面は平坦である。底面でピット5基を検出したが、SK050に伴うとは考えにくい。

埋土は暗褐色粘質土とにぶい黄褐色粘質土の2層で、土師器皿、古瀬戸の平碗・天目茶碗などが出土した。土師器皿の年代観から、遺構の帰属時期は16世紀中頃から後半と考えられる。

SK052 (第28図) 屋敷地Bの西端で検出した平面楕円形の竪穴状土坑で、規模は長辺約3m、短辺2.5m、深さは0.4mを測る。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦である。底面でピットは検出されなかった。

埋土は暗褐色粘質土と黒褐色粘質土で、山茶碗、中国産青磁蓮弁文碗、古瀬戸の小皿・瓶子・柄付片口・播鉢・縁釉小皿、常滑窯産の片口鉢Ⅱ類などが出土した。最も新しい時期の遺物は古瀬戸後Ⅳ期新段階の縁釉小皿で、遺構の帰属時期は15世紀中葉から後葉と考えられる。重複関係からSK053に後出する。

SK057 (第28図) 屋敷地Aの中央北端で検出した平面方形の土坑で、規模は長辺1.5m、短辺1.4m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。



第27図 土坑 SK025・027・028・034・035・036・037・042・045 平面図・断面図

SK058 (第28図) 屋敷地Aの北側の区画で検出した土坑で、遺構の北側が調査区外に位置するため全容は不明だが、規模は長辺2.7m、短辺1.9m以上、深さは約0.2mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は褐色粘質土で、古瀬戸後期の灰釉天目茶碗、古瀬戸後IV期新段階の平碗が出土した。遺構の帰属時期は15世紀中葉から後葉と考えられる。

SK061 (第28図) 屋敷地Aの西端で検出した方形竪穴状土坑で、規模は長辺3.5m以上、短辺3.2m、深さは約0.2mを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈する。底面でピットは検出されなかった。

埋土は暗褐色粘質土で、遺物は出土しなかった。重複関係からSK043に先行するが、SK043とほぼ同規模で重複した位置に掘削されていることから、SK043に近接した時期の14世紀前葉から中葉頃の遺構と思われる。

SK063 (第28図) 屋敷地Cの北側で検出した平面楕円形の竪穴状土坑で、規模は長辺3.0m、短辺2.4m、深さ約0.3mを測る。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦で、ピットは検出されなかった。重複関係からSK075に後出する。

埋土は褐色粘質土とにぶい黄褐色粘質土の2層である。出土遺物に土師器内耳鍋、大窯期の丸皿・稜皿、常滑窯産の甕がある。最も新しい時期の遺物に大窯第2段階の丸皿と稜皿があり、遺構の帰属時期は16世紀中葉と考えられる。

SK064 (第29図) 屋敷地Cの北側で検出した平面隅丸長方形の竪穴状土坑で、規模は長辺6.1m、短辺4.0m、深さは最大で0.5mを測る。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦で、ピットは検出されなかった。検出当初は壁面と底面に厚さ1cm程の灰白色粘土が残存しており、粘土を貼り付けていたと思われるが、埋土と誤認して除去してしまった。底面付近の埋土は粘性の強い暗褐色粘質土で、一時期滞水した状況にあったことがうかがえ、水溜り施設の可能性が高いと考えられる。

出土遺物には土師器羽釜、山茶碗、大窯期の天目茶碗、中世瓦がある。最も新しい時期の遺物は、大窯第4段階の天目茶碗で、遺構の帰属時期は16

世紀末から17世紀初頭と考えられる。

SK066 (第29図) 屋敷地Cの中央部で検出した平面方形の土坑で、規模は長辺1.4m、短辺1.3m、深さは約0.4mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は褐色粘質土とにぶい黄褐色砂質土である。埋土から山茶碗、製塩土器が出土した。山茶碗は細片のため詳細な時期は不明である。重複関係からSK091に後出するため、遺構の帰属時期は16世紀中頃と考えられる。

SK066・SK090・SK091は平面規模・深さもほぼ同じであり、同一箇所連続して掘削された土坑と考えられる。

SK069 (第28図) 屋敷地Cの中央部で検出した平面方形の土坑で、規模は一辺0.9m、深さは0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土はにぶい黄褐色粘質土で、底面から土師器皿が出土した。帰属時期は15世紀後半から16世紀代と考えられる。重複関係からSK087に後出する。

SK071 (第29図) 屋敷地Cの南側で検出した平面長楕円形の土坑で、規模は長辺2.4m、短辺0.9m、深さは約0.5mを測る。断面形は逆台形状を呈する。重複関係からSK070に後出する。

埋土は褐色粘質土で、土師器皿、古瀬戸後IV期新段階の腰折皿などが出土した。遺構の帰属時期は15世紀中葉から後葉と考えられる。遺構の性格は不明である。

SK073 (第29図) 屋敷地Cの南側で検出した平面楕円形の大型土坑で、規模は長辺2.7m以上、短辺2.6m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土は締りの弱い黒褐色粘質土で、土師器鍋と山茶碗などが出土した。いずれも細片のため詳細な時期は不明だが、埋土の特徴から近世に属する遺構の可能性が高い。

SK075 (第29図) 屋敷地Cの北側で検出した平面楕円形の土坑である。規模は長辺0.7m以上、短辺0.6m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形状を呈する。重複関係からSK063に先行する。

埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から中世の遺構と思われる。

SK076 (第32図) 屋敷地Cの北側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長辺0.8m、短辺0.7m、深さは0.2mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は褐色粘質土で、底面から古瀬戸の鉄釉燭台が横位の状態で出土した。燭台は下半部が欠損しており、接合できる破片も出土しなかったため、破損に伴い廃棄されたと考えられる。古瀬戸後IV期古段階の製品で、出土遺物から遺構の帰属時期は15世紀中葉と考えられる。

SK078・079 (第29図) 屋敷地Cの北東部で検出した平面円形の土坑で、SK078の規模は長辺0.75m、短辺0.7m、深さは0.4m、断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかったが、重複関係から後述のSK079に後出するため、帰属時期は16世紀前半以降と考えられる。

SK079は長辺0.6m、短辺0.5m以上、深さは0.3m、断面形は逆台形状を呈する。埋土は地山ブロックを斑状に含むにぶい黄褐色粘質土と褐色粘質土である。埋土から土師器羽釜が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は16世紀前半と考えられる。

SK083 (第32図) 屋敷地Cの北東部で検出した平面隅丸長方形の土坑で、壁面と底面に灰白色粘土を貼り付けた粘土貼り土坑である。規模は長辺1.0m、短辺0.7m、深さ約0.4m、貼り粘土の厚さは約5cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は焼土・炭化物を多量に含む暗褐色・黒褐色粘質土である。壁面・底面に被熱した痕跡は確認できなかった。埋土は全てフルイ掛けを行ったが鍛冶関連遺物などは出土しなかった。

埋土から大窯第2段階の丸皿が出土しており、遺構の帰属時期は16世紀中葉と考えられる。底面と壁面全体に粘土を厚く貼って保水能力を高めていることから、水溜り施設と考えられる。

SK085 (第29図) 屋敷地Cの北東で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長辺0.9m、短辺0.7m、深さは0.2mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土は地山ブロックを含む褐色粘質土である。遺物は出土しなかったため帰属時期は不明だが、埋土の特徴からみて中世の遺構と思われる。

SK086 (第29図) 屋敷地Cの中央西側で検出した平面隅丸方形の土坑で、規模は長辺1.0m、短辺0.8m、深さは約0.4mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は地山ブロックを斑状に含む褐色粘質土で、時期不明の土師器の細片と山茶碗が出土した。細片のため詳細な時期は不明だが、出土遺物と埋土の特徴から中世の遺構と考えられる。

SK088 (第30図) 屋敷地Cの中央西側で検出した平面隅丸方形の土坑で、規模は長辺1.2m、短辺0.9m、深さは0.3mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は地山ブロックを斑状に含む褐色粘質土である。遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。重複関係からSD090に先行する。

SK090 (第29図) 屋敷地Cの中央で検出した平面方形の土坑で、規模は長辺1.6m、短辺1.5m、深さは0.4mを測る。断面形は逆台形状を呈する。底面の埋土は粘性の強い暗オリーブ褐色粘質土で、一時期滞水状況にあったと考えられる。

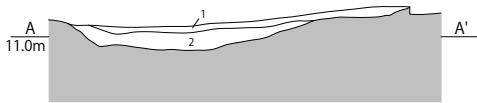
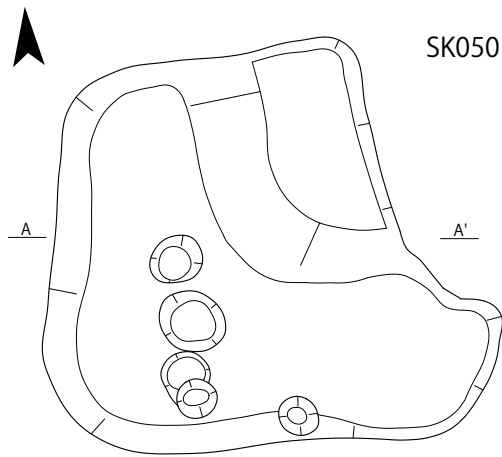
埋土から15世紀代の土師器皿が出土したが、重複関係からSK091に後出するため、帰属時期は16世紀中頃以降と思われる。

SK091 (第29図) 屋敷地Cの中央で検出した土坑で、規模は長辺1.2m以上、短辺0.9m以上、深さは0.4mを測る。断面形は碗状を呈する。重複関係からSK066・090に先行する。

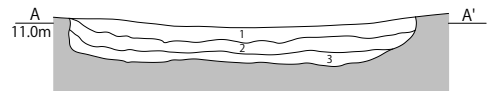
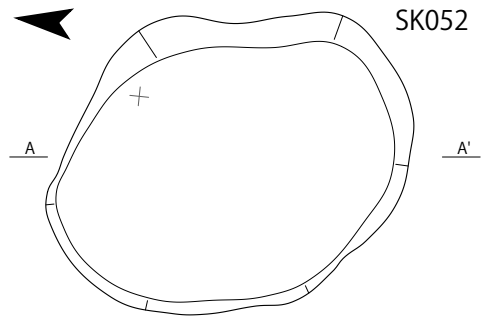
底面付近の埋土は黄褐色粘質土で、底面から16世紀中頃の土師器皿が出土した。遺構の帰属時期は16世紀中頃と考えられる。

SK092 (第30図) SD120の西側で検出した大型の土坑である。調査時はSD120と同様に堀状遺構になると思われたが、調査後に実施した確認調査で、SK092北側に堀状遺構は確認されなかったため、大型の土坑になると考えられる。遺構の北半部が調査区外に位置するため全容は不明だが、規模は長辺3.5m以上、短辺3.1m、深さは最大で1.0mを測る。断面形は逆台形を呈する。

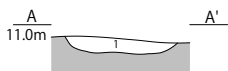
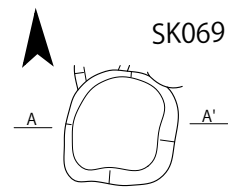
埋土のうち最下層の第9層は一部がグライ化しており、一時期滞水状況にあったことがうかがえる。第7層は土器一括廃棄層で、山茶碗を中心に



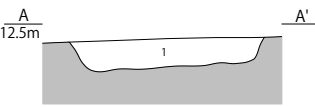
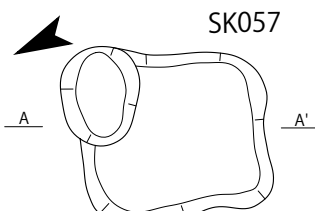
- 1. 10YR3/3 暗褐色粘質土
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土



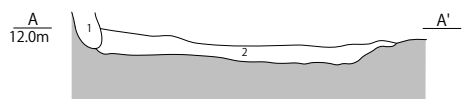
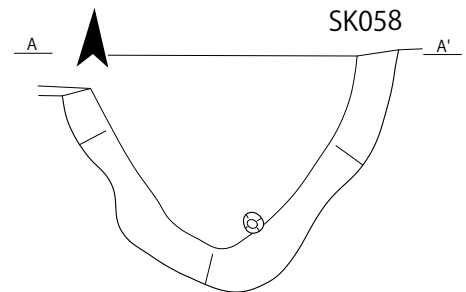
- 1. 10YR3/3 暗褐色粘質土(地山ブロック斑入)
- 2. 10YR3/3 暗褐色粘質土
- 3. 10YR3/2 黒褐色粘質土



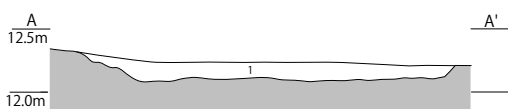
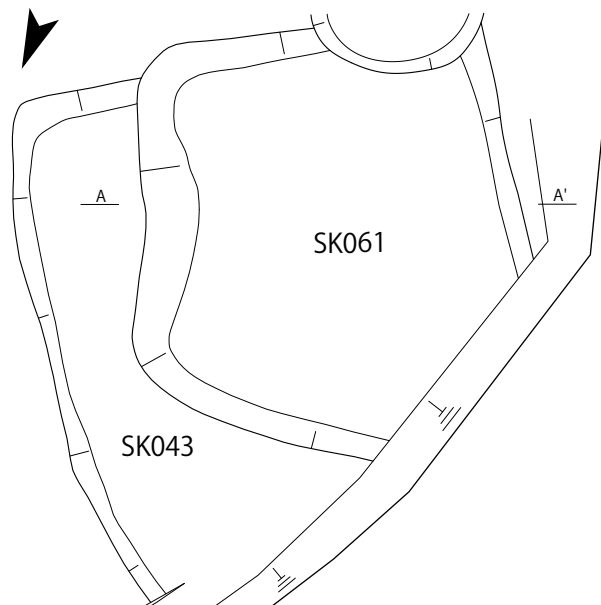
- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土



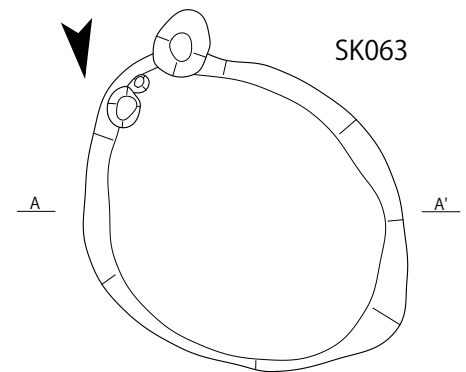
- 1. 10YR3/4 暗褐色粘質土



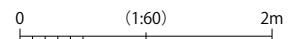
- 1. 植生痕
- 2. 7.5YR4/4 褐色粘質土(地山ブロック斑入)



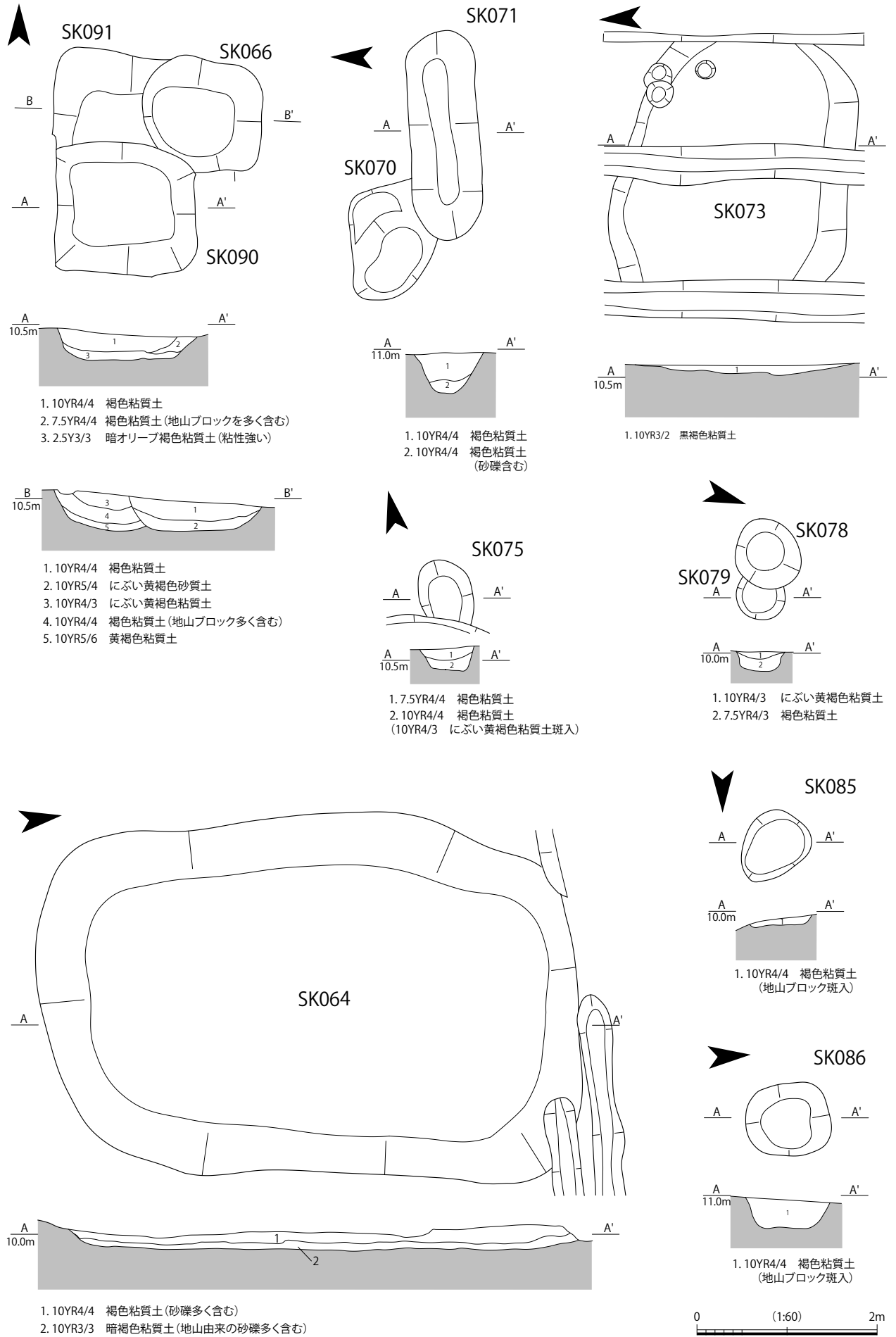
- 1. 10YR3/3 暗褐色粘質土(地山ブロック含む)



- 1. 10YR4/6 褐色粘質土(地山ブロック含む)
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土



第 28 図 土坑 SK043・050・052・057・058・061・063・069 平面図・断面図



第29図 土坑 SK064・066・090・091・070・071・073・075・078・079・085・086 平面図・断面図

遺物収納コンテナで約3箱分の土器が出土した。第5層は地山由来の砂礫を多く含む暗褐色粘質土で、人為的に埋め戻されたと考えられる。

土器一括廃棄層から出土した遺物には、実に様々な時期の遺物が含まれており、これには土師器羽釜、灰釉陶器椀、山茶碗・小皿・片口鉢Ⅰ類・小型壺・広口瓶・三筋壺、古瀬戸の水注・平碗・縁釉小皿・直縁大皿・盤類・鍋・仏供・播鉢、常滑窯産の広口壺・甕・片口鉢Ⅱ類・羽釜、大窯前半段階の稜皿・播鉢、窯内で融着した山茶碗、棒状土製品、砥石、鉄釘、鉄滓などがある。出土遺物や出土状況からみて、遺構の帰属時期は16世紀後半から末頃と思われる。

掘削深度が約1mと深く、一時期滞水状況にあったことなどから、水溜り施設の可能性がある。土器一括廃棄層の遺物は、周辺が耕地化される前の片付けに伴い集積・廃棄された遺物と思われる。

SK094 (第32図) 区画溝SD079の北端で検出した平面円形の埋甕遺構で、規模は直径0.8m、深さは0.3mを測る。断面形は碗状を呈する。掘形底部に常滑窯産の赤物甕を正置しており、胴部下半以下が残存していた。

甕内部の埋土は粘性の強い褐灰色粘質土で、掘形の埋土は黒褐色粘質土である。SK094を囲む建物遺構が認められないことや、遺構の西側に畑に伴う小溝状遺構群がみられることから、野壺の可能性が高いと思われる。赤物甕の年代観から、遺構の帰属時期は18世紀代と考えられる。

SK095 (第30図) 屋敷地Bの北側で検出した平面隅丸長方形の土坑である。規模は長辺2.0m、短辺1.2m、深さは0.5mを測る。断面形は逆台形を呈する。

埋土はにぶい黄褐色粘質土、褐色粘質土、暗褐色粘質土の3層である。埋土から16世紀中頃の土師器皿が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は16世紀中頃と考えられる。

SK114 (第7図) 屋敷地Bの中央部で検出した平面不整形な大型土坑で、複数の土坑を1つの土坑と誤認して検出した可能性もある。規模は長辺4.7m、短辺3.5m、深さは約0.5mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は暗褐色粘質土と褐色粘質土の2層である。

埋土から山茶碗・小皿・陶丸、瓦質土器の火鉢、古瀬戸の縁釉小皿・折縁深皿などが出土した。山茶碗の小皿の口縁端には煤の付着がみられ、灯明皿に使用されたと考えられる(第36図-58)。最も新しい時期の遺物は古瀬戸後Ⅳ期新段階の縁釉小皿で、遺構の帰属時期は15世紀中葉から後葉と考えられる。重複関係からSK117に後出する。

SK115 (第30図) 屋敷地Bの南東部で検出した平面長方形の方形竪穴状土坑である。規模は長辺約4.0m、短辺2.4m、深さは約0.4mを測る。断面形は皿状を呈する。底面はやや凹凸がある。底面でピットは検出されなかった。

埋土は暗褐色粘質土、褐色粘質土、暗褐色粘質シルトの3層で、常滑窯産の大甕、古瀬戸後Ⅲ期の小鉢が出土した。遺構の帰属時期は15世紀前葉と考えられる。重複関係からSD110に先行する。

SK117 (第7図) 屋敷地Bの中央東側で検出した土坑で、西側はSK114に切られている。規模は長辺1.8m以上、短辺1.5m、深さは0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。

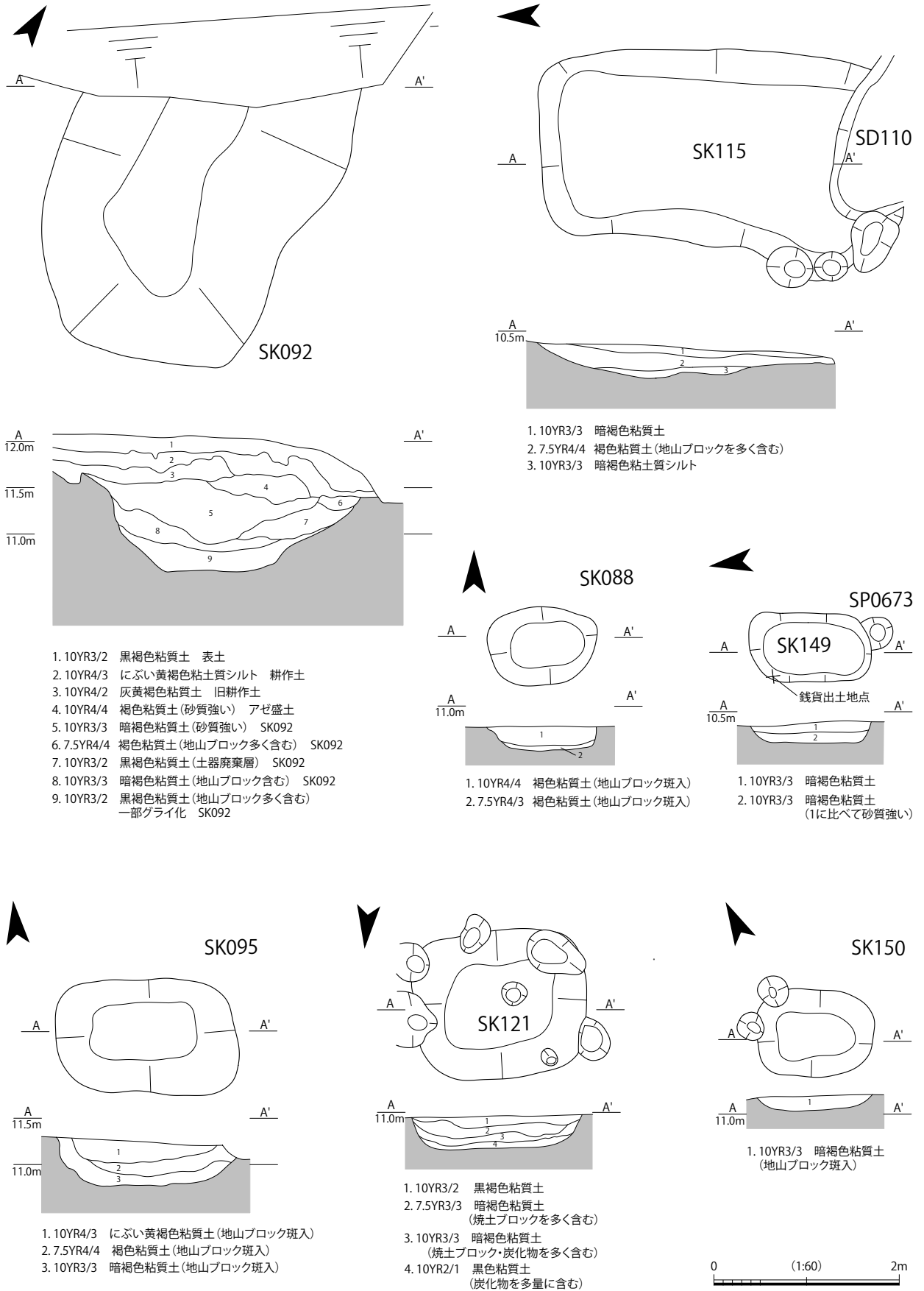
埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかったが、古瀬戸後Ⅲ期の遺物を含むSK106に後出し、SK114に先行することから、帰属時期は15世紀中葉頃と思われる。

SK121 (第30図) 屋敷地Bの中央部で検出した平面方形の土坑で、規模は長辺2.0m、短辺1.6m、深さは約0.4mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は焼土・炭化物を多量に含む黒褐色・暗褐色・黒色粘質土である。底面や壁面に被熱の痕跡は認められなかった。埋土は全てフルイ掛けを行ったが、鍛冶関連遺物は出土しなかった。

埋土から土師器皿、古瀬戸の平碗・天目茶碗などが出土した。最も新しい時期の遺物は古瀬戸後Ⅳ期新段階の平碗で、遺構の帰属時期は15世紀中葉から後葉と考えられる。

SK140 (第31図) 屋敷地Bの南東部で検出した平面長方形を呈する方形竪穴状土坑である。規模は長辺3.7m、短辺2.2m、深さは最大で0.2mを測る。断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。底面でピット4基を検出したが、SK140に伴うも



第30図 土坑 SK088・092・095・115・121・149・150 平面図・断面図

のとは考えにくい。

埋土はにぶい黄褐色粘質土、焼土・炭化物を多量に含む暗褐色粘質土である。炉壁とみられる焼土塊が多く出土したが、底面・壁面に被熱した痕跡は認められなかった。

埋土から土師器、山茶碗、古瀬戸・常滑窯産陶器などが出土した。重複関係から堀 SD126 に先行する。出土遺物から遺構の帰属時期は 15 世紀前葉と考えられる。

SK149 (第 30 図) 屋敷地 B の南東部で検出した平面長方形の土坑で、規模は長辺 1.4m、短辺 0.7m、深さ約 0.2m を測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は暗褐色粘質土で、底面付近から土師器、山茶碗が出土した他、北西壁付近から銭文不明の銅銭が 1 枚出土した。埋納された状況ではないため、墓とは考えにくい。出土遺物はいずれも細片化しており詳細な時期は不明だが、尾張型山茶碗第 6 型式の山茶碗を含む柱穴 SP0673 に後出することから、15 世紀後葉の掘立柱建物 SB05 に先行することから、遺構の帰属時期は 13 世紀中頃から 15 世紀後葉の間と考えられる。

SK150 (第 30 図) 屋敷地 B の中央南側で検出した平面方形の土坑で、規模は長辺 1.3m、短辺 1.0m、深さは約 0.2m を測る。断面形は皿状を呈する。埋土は地山ブロックを含む暗褐色粘質土で、土師器の細片が出土したが、詳細な時期は不明である。出土遺物と埋土の特徴からみて、中世の遺構と考えられる。

SK152 (第 31 図) 屋敷地 B の中央部で検出した平面長方形の大型の土坑で、規模は長辺 2.1m、短辺 1.5m、深さ約 0.2m を測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色粘質土で、古瀬戸後 I 期の平碗などが出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は 14 世紀後半と考えられる。

SK153 (第 32 図) 屋敷地 B の南側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長辺 1.8m、短辺 1.5m、深さは 0.7m を測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は暗褐色粘質土と黒褐色粘質土で、底面から古瀬戸の灰釉燭台が横位の状態で出土した。燭

台は上段の受け部が破損しており、これと接合できる破片も出土しなかったため、破損に伴い廃棄されたと考えられる。この他、出土遺物として古瀬戸の平碗などが出土した。最も新しい時期の遺物は古瀬戸後 IV 期新段階の平碗で、遺構の帰属時期は 15 世紀中葉から後葉と考えられる。大型の燭台は伝世品であろう。

SK154 (第 31 図) 屋敷地 B の南端で検出した平面形がややいびつな方形竪穴状土坑で、規模は長辺 3.2m、短辺 2.6m、深さ約 0.3m を測る。断面形は片側がやや傾斜の緩い皿状を呈する。底面でピット 4 基を検出したが、この遺構に伴うものとは考えにくい。

埋土は暗褐色粘質土と褐色粘質土で、土師器脚付皿、古瀬戸の折縁深皿・小鉢、常滑窯産の片口鉢 II 類、砥石などが出土した。最も新しい時期の遺物は古瀬戸後 IV 期新段階の折縁深皿で、遺構の帰属時期は 15 世紀中葉から後葉と考えられる。

SK155 (第 31 図) 屋敷地 B の中央部で検出した平面楕円形の土坑で、重複関係から SK156 に先行する。規模は長辺 1.6m、短辺 1.3m、深さは 0.3m を測る。断面形は皿状を呈する。

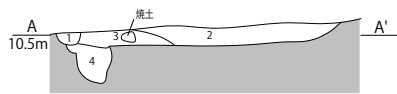
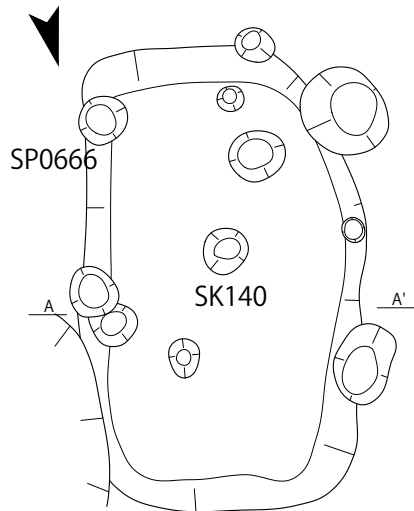
埋土は褐色粘質土で、土師器、山茶碗、砥石などが出土した。山茶碗は尾張型山茶碗第 9 型式と東濃型山茶碗大洞東期の山茶碗が含まれており、遺構の帰属時期は 14 世紀中葉と考えられる。

SK156 (第 31 図) 先述の SK155 に後出する平面楕円形の土坑で、規模は長辺 1.7m、短辺 1.2m、深さ約 0.5m を測る。断面形は片側が傾斜の緩い逆台形状を呈する。

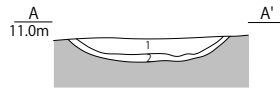
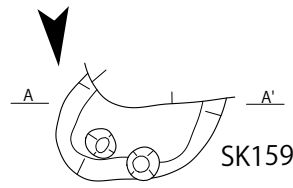
埋土は暗褐色・黒褐色粘質土で、古瀬戸後期の盤類が出土した。出土遺物からみて、遺構の帰属時期は 15 世紀代と考えられる。

SK159 (第 31 図) 屋敷地 B の中央東側で検出した土坑である。南側を SK115 に切られるため全容は不明だが、規模は長辺 1.2m、短辺 1.0m、深さは 0.2m を測る。断面形は皿状を呈する。

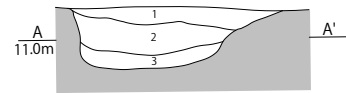
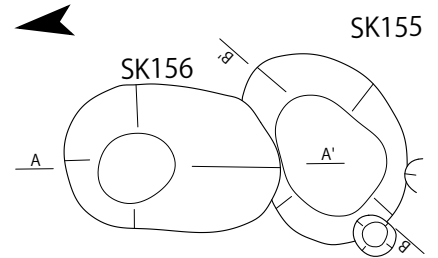
埋土は暗褐色粘質土で、山茶碗、常滑窯産の陶器の細片が出土した。いずれも細片のため詳細な時期は不明だが、出土遺物や埋土の特徴からみて、中世の遺構と考えられる。



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (砂礫多く含む) SP0695
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
3. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (焼土塊・炭化物を多量に含む) SK140
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (地山ブロックを多く含む) SP0669



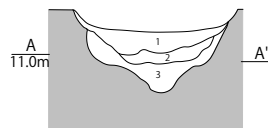
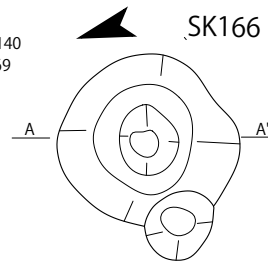
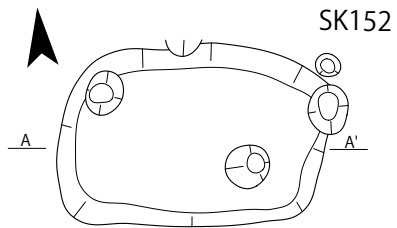
1. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (10YR3/3 暗褐色粘質土含む)
2. 10YR3/3 暗褐色粘質土



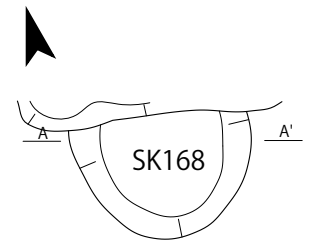
1. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山ブロック含む)
2. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (1に比べて粘性強い)
3. 10YR3/2 黒褐色粘質土



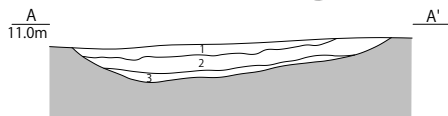
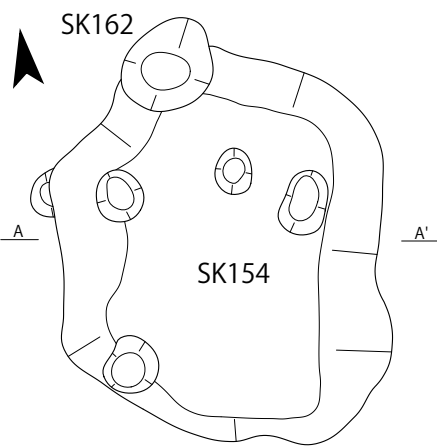
1. 10YR4/4 褐色粘質土



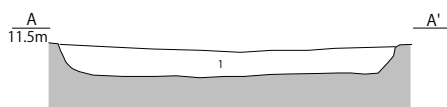
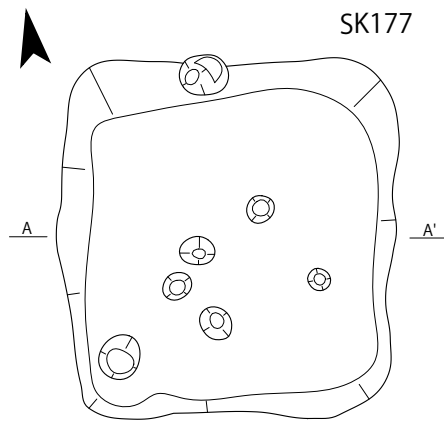
1. 10YR4/4 褐色粘質土 (地山ブロック斑入)
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
3. 10YR4/6 褐色粘質土 (地山ブロック斑入)



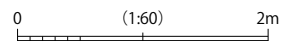
1. 10YR4/6 褐色粘質土 (地山ブロック含む)



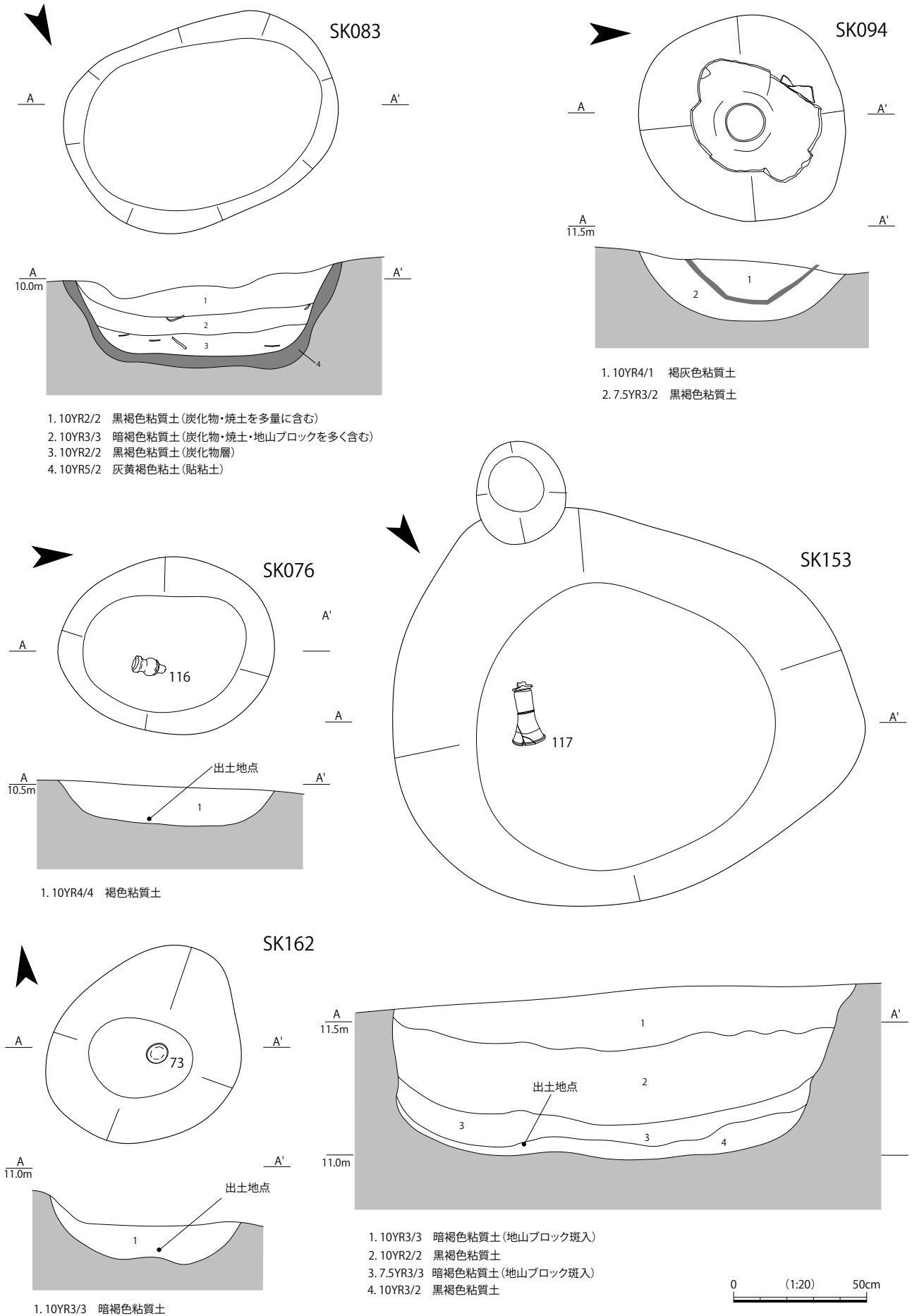
1. 10YR3/3 暗褐色粘質土
2. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山ブロック斑入)
3. 7.5YR4/4 褐色粘質土 (地山ブロック斑入)



1. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山ブロック含む)



第31図 土坑 SK140・152・154・155・156・159・166・168・177 平面図・断面図



第32図 土坑SK076・083・094・153・162 平面図・断面図・遺物出土状況図

SK162 (第32図) 屋敷地Bの南側で検出した平面楕円形の土坑で、規模は長辺0.8m、短辺0.6m、深さ0.2mを測る。断面形は碗状を呈する。

埋土は暗褐色粘質土で、底面付近から完形の山茶碗の小皿が出土した。尾張型山茶碗第8型式から第9型式にかけての製品で、遺構の帰属時期は14世紀前葉と考えられる。重複関係からSK154に先行する。

SK166 (第31図) 屋敷地Bの西側で検出した平面円形の土坑で、規模は長辺1.5m、短辺1.4m、深さは0.7mを測る。断面形は底面中央部が窪んだ碗状を呈する。底面中央部の窪みは大型の甕を抜き取ったかのような形状を呈するが、甕の破片は出土しなかった。

埋土は地山ブロックを含む褐色粘質土とにぶい黄褐色粘質土である。埋土から尾張型山茶碗第9型式の山茶碗が出土した。出土遺物から遺構の帰属時期は14世紀中葉と考えられる。

SK168 (第31図) 屋敷地Bの中央部で検出した土坑である。遺構の北側をSK177に切られるため全容は不明だが、規模は長辺1.4m、短辺1.0m以上、深さは約0.3mを測る。断面形は碗状を呈する。埋土は褐色粘質土で、土師器の細片と山茶碗が出土した。詳細な時期は不明だが、出土遺物から中世の遺構と考えられる。

SK177 (第31図) 屋敷地Bの中央部で検出した方形竪穴状土坑で、規模は長辺2.8m、短辺2.7m、深さは0.3mを測る。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦である。底面でピット6基を検出したが、この遺構に伴うとは考えにくい。

埋土は地山ブロックを含む暗褐色粘質土である。遺物は出土しておらず帰属時期は不明だが、埋土の特徴からみて中世の遺構と思われる。

SK181 (第7図) 屋敷地Aの東側で検出した竪穴状土坑である。東半部をSD025に切られるため全容は不明だが、規模は長辺3.5m以上、短辺2.4m以上、深さは0.3mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土は灰黄褐色粘質土で、細片化した山茶碗が出土した。詳細な時期は不明だが、SD025に先行するため帰属時期は14世紀中頃以前と考えられる。

第7節 井戸

井戸は屋敷地Aで2基、屋敷地Bで1基の計3基検出した。いずれも石組みや木組みなどの井戸側を持たない素掘りの井戸である。

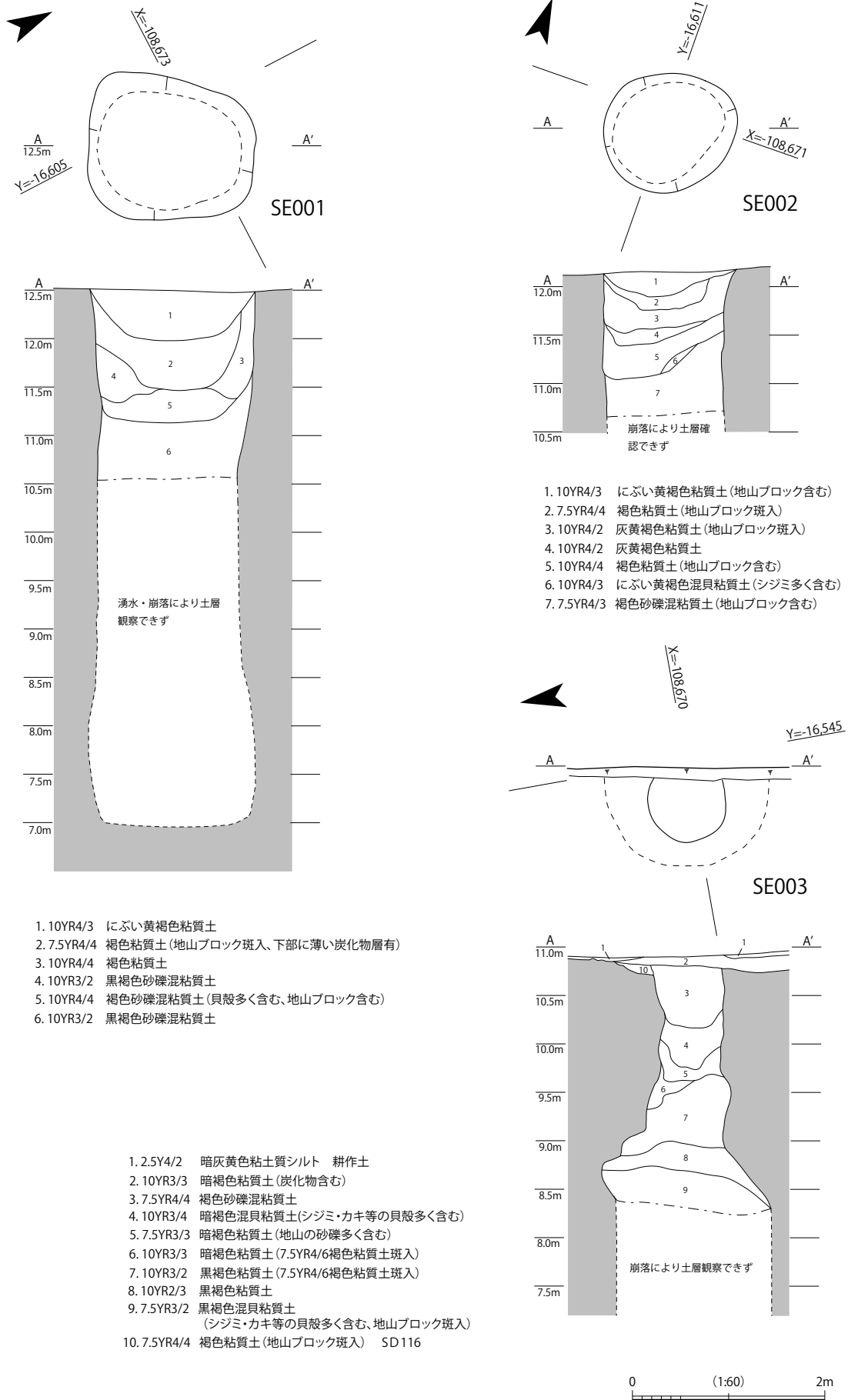
SE001 (第33図) 屋敷地Aの南西部で検出した素掘りの井戸で、平面形は隅丸方形を呈する。規模は長辺1.7m、短辺1.5m、深さは約5.7mを測る。井戸掘形は検出面下4mまでは楕円筒状を呈し、以下は袋状に広がる。検出面下約2.5mで壁面が崩落したため、以下は図として正確に記録できなかったが、検出面下約5.5m、標高7m前後で、水が染み出る黄灰色砂礫の湧水層を確認した。

埋土のうち第6層の黒褐色砂礫混粘質土は、オキシジミ・マガキなどの貝殻類が多量に含まれており、井戸廃棄後に食物残渣を捨てた廃棄層と考えられる。第1・2層は地山ブロックを斑状に含む粘質土で人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物として、土師器羽釜、山茶碗、東濃型山茶碗の小皿、古瀬戸の天目茶碗、常滑窯産の片口鉢Ⅱ類、融着した山茶碗、棒状土製品などがあり、この他、掘形下部の暗灰色粘質土層から、曲物、草履状木製品などの木製品が出土した。時期の判明する遺物として、尾張型山茶碗第5型式と第9型式の山茶碗、東濃型山茶碗大洞東期の小皿、古瀬戸後Ⅲ期の天目茶碗、15世紀前半代の常滑窯産の片口鉢Ⅱ類などがある。

井戸側を持たないため、構築・使用・廃棄年代を考えるのは非常に難しいが、重複関係からみて、古瀬戸後Ⅱ期の遺物を含むSD005に後出することや、断ち割り調査時に掘形下位で尾張型山茶碗第9型式の完形の山茶碗が出土していること、また、掘形下部から15世紀前半の常滑窯産の片口鉢Ⅱ類や古瀬戸後Ⅲ期の天目茶碗が出土していることを踏まえれば、概ね14世紀後葉頃に掘削され、15世紀前半代を中心に機能したと思われる。なお、屋敷地Aの掘立柱建物との関連で言えば、掘立柱建物SB03の時期に近接しており、SB03に伴う井戸の可能性が高い。

SE002 (第33図) 屋敷地Aの南西部で検出した素掘りの井戸で、平面形は円形を呈する。規模は長径1.4m、短径1.2mを測る。深さは検出面



第33図 井戸 SE001～003 平面図・断面図

下1.6mまで確認したが、以下は湧水により掘形壁面が崩壊したため、断ち割り調査も断念した。このため井戸底や湧水層を確認するには至っていない。掘形の形状は検出面下1.6mまでは円筒状を呈し、以下は不明である。

埋土は第4・6層にオキシジミ・マガキなどの貝殻類が多く含まれており、井戸廃棄後に食物残渣を捨てた廃棄層と考えられる。第1～3層は地山ブロックを含む粘質土層で人為的に埋められたと考えられる。

埋土から土師器羽釜、山茶碗、融着した山茶碗、古瀬戸の平碗・盤類、常滑窯産の大甕などが出土した。時期の判明する遺物として、15世紀代の土師器羽釜、尾張型山茶碗第8型式から第9型式の山茶碗、古瀬戸後Ⅱ期の盤類などがあり、14世紀後葉から15世紀前葉の遺物が主体である。いずれも掘形上部の遺物ではあるが、SE002は概ね15世紀代を中心に機能したと思われる。掘形上層で古瀬戸後Ⅳ期の平碗が出土していることから、15世紀後葉以降に廃棄されたと推測する。

SE003 (第33図) 屋敷地Bの北東部で検出した素掘りの井戸で、平面形は円形と思われる。規模は長径0.9m、短径0.8mを測る。深さは検出面下3.5mまで確認したが、壁面の崩落と湧水により、井戸底まで調査できなかった。掘形形状は検出面下1.7mまでは円筒状を呈し、以下は袋状に広がる。最大径は1.7mを測る。

壁面の崩落により、第9層以下は図として正確に記録できていないが、標高8m前後で水が染み出る黄灰色砂礫層を確認しており、本井戸の湧水層と考えられる。第4層、第9層は暗褐色あるいは黒褐色混貝粘質土層で、オキシジミ・マガキなどの貝殻類を多く含んでおり、井戸廃絶後に食物残渣を捨てた廃棄層と考えられる。第9層下部では、二ホンイシガメなどの動物遺体が出土した。第6・7層は地山ブロックを斑状に含む暗褐色・黒褐色粘質土で、壁面の崩落を繰り返しつつ埋没していった様子うかがえる。

出土遺物には、掘形上位層から土師器内耳鍋、山茶碗、古瀬戸の縁釉小皿、掘形下位層から山茶碗、常滑窯産の大甕などが出土した。縁釉小皿の底部

外面には「上」字の墨書が認められる(第37図-101)。墨書土器は井戸廃棄に伴う祭祀に用いられたものかもしれない。時期の判明する遺物のうち、山茶碗は尾張型山茶碗第5型式から第6型式、第8型式の山茶碗、古瀬戸は後Ⅳ期新段階、常滑窯産の大甕は15世紀前半の製品である。

掘形下位で出土した常滑窯産大甕の年代観から、概ね15世紀前半頃に掘削され、15世紀代を中心に機能したと思われる。掘形上位層から古瀬戸後Ⅳ期新段階の縁釉小皿が出土しており、15世紀後葉以降に廃棄されたと考えられる。

第8節 柱穴・ピット

柱穴・ピットは783基検出した。このうち建物として復元した柱穴以外の柱穴・ピットについては、未だ詳細な分析ができていないため、以下では、特徴的な柱穴・ピットについてのみ報告する。

SP0674 (第7図) 屋敷地BのSK140に先行する柱穴である。掘形の平面形は円形で、規模は径約0.3m、深さは約0.4mを測る。断面形はU字形を呈する。

掘形底面から完形の山茶碗の小皿が逆位の状態で出土した(写真図版24-8)。柱の抜き取り痕は確認できないため、意図的に掘形底面に据え置かれたと考えられる。尾張型山茶碗第6型式の小皿で、遺構の帰属時期は13世紀前葉と考えられる。類例が知立市腰前遺跡・小針遺跡などで確認されている⁽⁶⁾。

SP0687 (第7図) 屋敷地Bの東側で検出した柱穴である。掘形の平面形は楕円形で、規模は長径0.4m、短径0.3m、深さは0.3mを測る。断面形は碗状を呈する。

掘形底面から尾張型山茶碗第9型式に相当する山茶碗が出土した(写真図版24-5)。遺構の帰属時期は14世紀中葉と考えられる。

SP0825 (第7図) 屋敷地Bの中央部、SK168の西側で検出した柱穴である。掘形の平面形は楕円形で、規模は長径0.4m、短径0.4m、深さは約0.4mを測る。断面形はU字形を呈する。

掘形底面から完形の山茶碗が正置した状態で出土した(写真図版24-7)。柱の抜き取り痕は確認できないため意図的に掘形底面に据え置かれたと考えら

れる。尾張型山茶碗第7型式に相当する山茶碗で、遺構の帰属時期は13世紀中葉と考えられる。

SP0949 (第7図) 屋敷地Bの南端、SK154の南西で検出した柱穴である。掘形の平面形は円形を呈し、規模は長径0.5m、短径0.4m、深さは約0.4mを測る。断面形は碗状を呈する。

埋土は褐色粘質土で、掘形上位から古瀬戸中期の灰釉花瓶が出土した(写真図版24-6)。出土遺物から遺構の帰属時期は14世紀前半と考えられる。

第9節 その他の遺構

SX002 (第7図) 屋敷地Aの西側で検出した平面形が不整形な遺構である。埋土は基盤層に酷似した黄橙色粘質土で、整地土層になる可能性が高い。埋土に細片化した山茶碗を含むことから、帰属時期は中世と考えられる。

SX012 (第7図) 並行する二本の区画溝SD025・079に挟まれた空閑地で、屋敷地A・B間を南北に走る道路状遺構と考えられる。幅5～7mを測る。南側は切通しSX013に破壊されているが、本来はさらに南側に延びていた可能性が高い。溝SD071の北側はさらに幅広い区画の空閑地となっているが、道路状遺構になるか不明である。

SX013 (第7図) 調査区南端で検出した切通し(古道)である。調査地東側の旧街道(東浦街道)から尾根を分断する形で東西方向に延びたのち、調査区西端でやや北西に向きを変えつつ、調査区外に連続する。検出長は約62m、底面の幅は約2～4m、遺構検出面からの深さは最大で2.5mを測る。

調査区東端・西端で行った断面観察では、表土下約30cmで地山が露出し、間層が一切見られなかったことや江戸時代後期の溝SD002に後出することなどから、幕末頃に開削された切通しと判断した。

ただし、古道などの道路遺構は、堀などが埋没した後に古道として利用される例もあり、また、補修・改修を繰り返すことで、前段階の遺構が破壊されることも多い。切通しは南側丘陵斜面の傾斜変換点に位置しており、屋敷地A・Bの南端を区画するには相応しい場所に位置しており、堀SD120と主軸方位もほぼ一致するため、切通し開削前に区画溝や堀があった可能性も十分考えられる。

第4章 遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺物収納コンテナにして約30箱分ある。これには、土器・陶磁器類、土製品、瓦類、石器・石製品、金属製品・鍛冶関連遺物、木製品、貝類などの動物遺体がある。

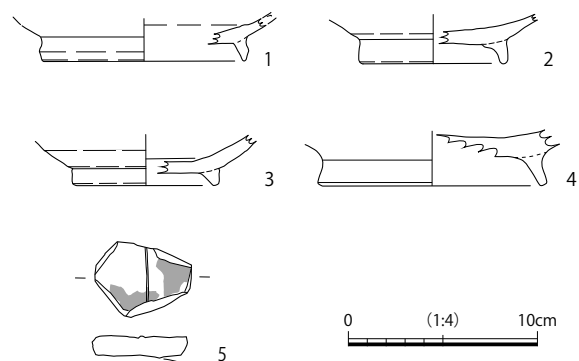
時期としては縄文時代から近世に至るまで、実に幅広い時代の遺物があるが、その大半が中世の遺物である。

以下、今回出土した遺物を、古代の土器・陶磁器、中世の土器・陶磁器、近世の土器・陶磁器、製塩土器、土製品・瓦、石器・石製品、金属製品・鍛冶関連遺物、木製品、自然遺物に分けて報告する。なお、出土遺物の型式や年代観は、凡例にある基本参考文献を基準とした。

第1節 古代の土器・陶磁器

古代の土器・陶磁器には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。出土量は遺物収納コンテナで約1/5箱と少なく、図化できた遺物も少ない。須恵器は甕の胴部片が出土したが、細片のため図化していない。7世紀から8世紀代の製品と思われる。古代の遺物として他に製塩土器があるが、これについては後述する。

土師器 (第35図) 古代の土師器には、脚付皿(24)と清郷型鍋(25)がある。24は脚部に回転ナデを施す脚付皿で、10世紀から11世紀代の製品と思われる。SK154から出土した。25は清郷型鍋で10～11世紀代の製品である。SK092から出土した。



第34図 出土遺物実測図①